



60
605



始



60-605

糸左近著

醫學的催眠術

疾病及惡癖

大正
7. 11. 14
内交

東京 金刺芳流堂



緒言

何を以て醫學的と云ふか、曰く從來世にある催眠術書は多くは心理學者の説いた物で、之を疾病治療に應用する章になると、如何にも漠然たる傾きがある、乃で小生は斯る點までは疾病治療に應用し、斯る點には應用出來ぬと、劃然たる區域を附け、又施す方法に於ても藥物を用ふることある等聊か其の趣きを異にしたる特色があると信じたからである。

悪癖を色々挙げたが、これも一々醫學上及び心理學上の根據を有つてゐるので、毫も著者の臆測を加へたのでは無い。

元來催眠術を以て疾病を治療するといふ事は醫士の權限であつて、非醫者の施す可き筈のものでは無い。然るに我國で

は醫士は殆んど催眠術を以て疾病を治療せず尤も學校でも教へず書物も無いからであらう大抵は物質的療法のみ依るに反し、非醫者の中には覺束無い診斷を下し、催眠術療法を萬能的に濫用する者がある、本書を讀めば非醫者が疾病治療に應用せらる可きもので無いことが了るであらう。

されば本書の目的は疾病治療に應用の部は醫士に讀んで頂きたい積り、惡癖矯正の部は何人も汎く讀み且つ應用して頂きたいのである。

附録も何人にもだが——殊に青年學生が熟讀して實踐躬行せられんことを乞ふのである。

大正七年十月
白菊の花を購めつゝ

著 者 識 す

醫學的催眠術と疾病及惡癖目次

緒 論

催眠術といふ名……………一
醫學的催眠術とは……………二
暗示とは如何なる事か……………三
催眠術を疾病治療に應用する注意……………四
催眠術の書物……………八

心身の關係

心と肉體とは如何なる關係あるか……………一〇
プラント氏の表情説一斑……………一一
人相に就いて……………一四

目 次

愚女の面相……………一六
毒婦の面相……………一七
善女の面相……………一七
賢女の面相……………一八
智徳圓滿なる婦人の面相……………一九
精神作用と疾病の關係……………二一
祈禱を應用した例話……………二三
精神作用と肉體との影響原因……………二四
心身關係の興味ある例話……………二五

暗示の話

暗示療法とは如何……………三七

言語暗示	三七	女に對する注意	五九
證言暗示	三八	病人の周圍の事情	五九
豫告暗示	三八	藥劑を與ふる注意	六三
命令暗示	三九	診察料藥價の注意	六四
形式的暗示	四一	他醫との關係	六六
種々の療法	四四	自己暗示	六七
色々の器械	四五	數度の暗示	六八
診察室	四五	時期的暗示と場所的暗示	六九
醫士の衣服	四六	暗示の三要素	七一
醫士の言語動作	四七		
職務に忠實	四九	注意の話	
醫士の品行	五二	有爲の注意と無意的注意	七三
醫士の診察心得	五四	注意の深淺	七四
患者の年齢上に於ける注意	五七	注意の廣狹	七五

催眠術と注意	七七
--------	----

錯覺と幻覺

錯覺幻覺の説明	七九
催眠術と錯覺幻覺	八二
治療と錯覺幻覺	八二
惡癖矯正と錯覺幻覺	八三

現在の意識と潜在的意識

現在の意識と潜在的意識の説明	八五
催眠術と病氣の原因	八六

催眠術の效果及其の方法

催眠術を施す可き理由	八八
------------	----

目次

平生の秘密	九一
催眠術にて病原を知つた例	九二
催眠術の感受性	九三
催眠術施術上の要件	九六
一喝法一名フアリア法	九八
摩擦法	一〇〇
聽音法	一〇一
温暖法	一〇一
覆耳法	一〇二
嗅香法	一〇二
壓迫法	一〇三
廻頭法	一〇三
言語法	一〇三
藥物法	一〇四

三

計數法	一〇六	酒癖の治つた實例	一一九
莊嚴法	一〇七	養老の瀧と暗示	一二二
電氣法	一〇八	酒嫌になる薬と煙草嫌になる薬	一二三
薬液塗布法	一〇八		
著者の信じ且つ行ふ方法	一〇九		
催眠状態中の暗示法	一一二	催眠術を施す可き病症	
催眠中の暗示注意	一一二	催眠術を施す可き病と然らざる病	一二五
催眠状態の三階級	一一三	催眠術の効果ある病の實例	一二六
催眠状態におく可き時間	一一五		
催眠状態を覺す法	一一五	催眠術の効果ある病の説明	
催眠状態の覺めたる場合	一一六	神經衰弱症の原因	一三〇
分割式催眠術	一一六	神經衰弱症の病狀	一三一
催眠術を施した後の心得	一一七	神經衰弱の肉體的病狀	一三七
咳嗽の治つた實例	一一八	ヒステリー病	一三九
		ヒステリーの意義	一三九

ヒステリーの原因	一四〇	ヒボンデリー	一五九
失戀	一四一	神經痛	一六五
破鏡	一四一	偏頭痛	一六八
老嬢と寡婦	一四二	癩痢	一七〇
無子	一四二	顔面神經麻痺	一七六
愛兒の死亡	一四二	常習頭痛	一七八
不平不満の結婚	一四三	書癩	一八〇
非常な驚愕	一四三	横隔膜痙攣	一八〇
非常な恐怖	一四四	精神病(きちがひ)	一八一
非常な腹立	一四四	神經性胃病	一八四
激しい喜悦	一四六	便秘	一八九
ヒステリー病者と交際	一四八	豆波利	一九〇
ヒステリーの精神的病狀	一四九	夜驚睡怖(小兒の夜啼)	一九一
ヒステリーの爲に墮落した實例	一三二	遺尿(寢小便たれ)	一九二

陰萎	二九二	迷信する癖	二二三
遺精	二九五	泣く癖	二二五
狭心症	一九六	笑ふ癖	二二六
舞踏病	一九六	怒る癖	二二八
生殖慾異常興奮	一九七	嫉妬する癖	二二九
肺結核	一九八	衒ふ癖	二三一
催眠術の効果ある悪癖		粹を氣取る癖	二三二
癖とは如何	二一三	高遠がる癖	二三五
反對する癖	二一四	嘘を吐く癖	二三六
盲從する癖	二一六	盗む癖	二四〇
名譽を好む癖	二一七	異常物を好む癖	二四二
愛憎する癖	二一九	物を數ふる癖	二四六
潔癖	二二一	氣に懸る癖	二四八
		人の缺點を見附る癖	二五一

穿鑿する癖	二五三	傷害したき癖	二七八
蓄産癖	二五四	義侠を好む癖	二八〇
交際したき癖	二五六	喧嘩したき癖	二八一
恐るゝ癖	二五七	勝負事を好む癖	二八三
羞耻する癖	二六〇	賭事をしたき癖	二八四
訴訟癖	二六一	嗜好物に耽る癖	二八六
施す癖	二六二	神秘的を好む癖	二八九
世話したい癖	二六五	博く知りたい癖	二九二
色情癖	二六六	古きを好む癖	二九三
剛情なる癖	二六八	新しきを好む癖	二九五
物に凝る癖	二七〇	奇行を好む癖	二九七
自慢する癖	二七四	滑稽を好む癖	二九八
威張りたき癖	二七六	淋しきを好む癖	二九九
道義癖	二七六	異性を嫌ふ癖	三〇一

動作に表はるゝ種々の癖……………三〇四
 健腦記憶法……………三〇七
 意志を強くする法……………三三二

附 録

自己催眠法に就いて……………三〇六

醫學的催眠術と疾病及惡癖目次終

醫學的催眠術と疾病及惡癖

糸 左 近 著



緒 論

催眠術といふ名は適當で無いかも知れぬ——知れぬ所が實際に不適當である。イヤ一般に世間で行はれてゐる所の催眠術は、其の名が能く當て嵌つてゐるのかも知れぬ、今予が述べんとする催眠術——其の名が甚だ不適當だと信ずるのである。併し今適當な名を附けるとせんか、其の名を聞いた丈では何の事を述べてある書物だか一寸了らぬ。元來名前は其の物全體の意義を言ひ盡す譯には行かぬ。乃で之を言ひ盡さうとするには甚だ長い名になるが常だ。例へば彼のヒステリー病でも、其の病名の甚だ不適當なる事は誰でも認めてゐるが、又誰も之を取り換へずに、矢張古來の言ひ習はしに従つてゐるやうなものだ。然れば著者も亦世間並の名を附け、其の代り醫學的といふ三字を冠ら

緒 論

せたのである。

然らば醫學的催眠術は、何ういふ事かと申すと、催眠術を醫療上に應用し而して、病氣を癒す一助にせんとするのだ。何故此の催眠術といふ名が不當であるかと云ふに、催眠術は讀んで字の如く眠りを催さしめる方法と解釋せられる。然るに、予の述べんとする事柄は必ずしも眠りを催さしめ無いても可い。成程時に依ては真に眠らしめる必要もあるけれど、大抵の場合には眠りを催ほさしめ無いても其の目的を達せられるのだ。これ催眠術といふ名が不當であるといふ所以である。乃ち予の述べんとする催眠は何事も白河夜船になるのでは無く、被術者の精神を最も静まつた状態となし、而して被術者は施術者に對し、或る一種の信仰を伴ふ所の、サゼスチョン Suggestion の與へられるを待ちつゝある外、何事も心に浮べず、眼あれども見ず、耳あれども聞かず、鼻あれども嗅がず……五官は殆ど睡眠の状態になる心的作用をいふのだ。元來、人の身體は大脳を中樞として、到る所に精神は充ちてゐるが其の部分々に必要の無い時は、其の部分は其の精神が働いてをらぬ。(精神

的催眠術と云ふのである。

サゼスチョンといふ原語を一般には暗示と譯してゐるが、之も適當なる語では無からう、と云ふ譯は何も暗示に示す意味では無くて、或る信仰を與へ、

而して被術者を導き、或は感化若くは薰陶するのである。故に信仰的感化とか、或は信仰的刺戟とかと命名した方が宜いかも知れぬ。又中には推感と譯してゐる學者もある。けれども、其れでは催眠術の名を變へると同じく世間の人には了り難い。故に本書には矢張世間並の語を採用してある。所で催眠術と此暗示とは離る可からざるものであるけれど、催眠術は即ち暗示であると解釋してはならぬ。換言すれば暗示は催眠術にのみ應用するもので、其の他には必要が無いと思つては間違ひである。取りも直さず、宗教者も教育者も或は父母が我が子に對しても、不知不識の間に與へつゝあるのだ。故に醫士は催眠術を施さざるも、此の暗示は常に與へつゝあつて、暗示の力を借らざれば病氣の治療は出来ぬと言つても敢て過言では無からうと思ふ。尙暗示の事は一章を設けて詳しく述べよう。

話變つて近來世間では此の催眠術を利用し病を治療することを業とする者が大分多くなつて來た。然るに醫士が催眠術を應用して病を治療し、若くは治療する補助にせんとする人は甚だ尠い。所が之を本當に言ふと、教育上或

は其の他の事に應用するは別問題とし、病氣の治療に利用するのは醫士にして始めて行ふ可き事、非醫者が之を病氣治療に施すには醫士の指圖を受けてからが良い。一體全體催眠術を疾病治療に應用すると言つても、これのみを以て萬病を悉く治療出来る譯では無い。乃ち或る病に對しては催眠術を施すだけで効能があるけれど、或る病には何等の効無く、又或る病には藥物なり水治法なりを施して其の傍ら催眠術を利用すべきもあるといふやうな譯で、如何なる病氣でも之れのみを以て治療するといふことは斷然無いのである。然るに非醫者が病理も診斷學も知ら無いで、盲滅法に之を利用否惡用するに至つては實に危険千萬な事と思はねばならぬ。これに就き斯ういふ危険なる例話もある。一世の豪傑故勝安房伯が虎列刺病に侵されたれば、さア大變と家族一同の騒ぐを伯制して曰く、「醫師も藥も不要ぬ、予は予一人で治して見せる、若し治らずば其れは天命ぢや」と、一室に閉ぢ籠つて坐禪を組み、數日にして其の病癒えたと、言ひ傳へられてゐる。所で或る非醫者の催眠術者が虎列刺病流行時に際し、或る商家の主人が本病に罹り、之を醫士に診て貰

ふと、警察に報告せられ、商賣上の大損害であると唧つてゐるを奇貨とし、
『催眠術で治して上げませう。勝伯は坐禪で治つた、坐禪は矢張り催眠術の
一つだ云々』是に於て、早速其の催眠術を受けたれば主人は數時間の後に永
眠したるのみならず、家族一同に傳染し、又其の術者も侵され、避病院裏で
漸と生命を取り止めたといふ實例がある。著者之を判斷するに勝伯のは虎列
刺病では無く、急性腸胃加答兒であつたに相違無い。急性腸胃加答兒であつ
たため、下痢嘔吐の後、身體を安靜にし、而も自然と絶食療法を施してゐた
やうな工合であつたから、強健なる心身の伯には醫藥の必要も無かつたは僥
倖である。若し伯にして眞の虎列刺病に侵されたのであつたら、何條坐禪如
きで、猛烈なる細菌を驅逐せられうぞ。是の時に當つて天命ぢやと言へば其
れまでだが、實に危いことであつた。然るに商人某のは眞の虎列刺であつた
爲めに、細菌は得たり賢しと暴威を逞うしたのだ。併し坐禪なり或は催眠術
なりで、治るものだと信ずる意志力が強ければ、傳染に對する憂慮を除かれ
其れが爲めに憂慮の結果に有り勝ちの新陳代謝故障を幾分防がれる助けとな

るであらうから、醫士が相當の手當をなしつゝ、或る暗示を與へることは利
益あるを疑はぬ。元來我が國の人は催眠術に限らず、凡ての治療法を過信す
る傾きがある。絶食療法が必要を説く者があると、如何なる病氣も絶食療法
のみで癒ると心得たり、或は温泉が或る病氣に効が有つたと聞けば、直ぐに
温泉は萬病に効能あるものと信じたりする。乃で腹黒き非醫者供は其の弱點
に附け入り、皇張誇大に其の効能を吹聴する。殊に催眠術治療を職業とする
非醫者の中には、往々無根の事實を附したり、或は僅かに効力あつた事をも
輪に輪を掛けて大風呂敷を擴げ、所謂針小棒大に吹聴する輩もある。又中に
は悪氣は無いけれども、施術者其の人が催眠術を過信し、實際に萬病に効あ
るものと思つてるものもある。又病人が催眠術治療の非醫者即ち其の職業をし
てる人より、治療を受け、病者自身は其れ程効果が無かつたのであるけれど
實際を告げると、其の職業者たる催眠術者に對し、其の職業上の名譽を毀損
せしむるに忍びず、其の實を曲げ、大層快くなりましたと花を持たせて、後
の施術を受けぬやうにするのも往々ある。すると花を持たせられてるとは露

知らず、其れ肺病も斯の通り全治したと鼻蠢かしてるとは……何れにしても病氣の治療は醫士の指圖を受けるが肝要だと心得ねばならぬ。然らば催眠術は如何なる人、如何なる病に効驗あるか、或は如何様に施す可きか、請ふこれは後章に詳しく述べませう。

世には催眠術の事を述べた書物は澤山ある。けれども醫學上の見地から述べてあるのは我國に甚だ尠い。所で心理學者の著したる催眠術書は勿論疾病治療の應用が主で無いから、疾病治療の事が書いてあつても如何なる病に如何様に施す可きか、如何なる病には施す可からざるか等に至つては物足らぬ即ち其の物足らぬのが當然である。又催眠術を業とする人の述べたのは、著書其の物が目的では無く、他に爲めにする所があつて書いたのが多いから徒らに前置のみが長くて、其の實際に催眠術を施す方法や、又病氣を治療する仕方等に就いては、故らに筆を省いたりして其れで僅か二三頁書けば済むやうな事を數十頁も冗語を駢べたりしてある。甚しきは催眠せしめる方法を書いて醒覺す仕方を秘したり、或は又催眠術の効能と自分が施した實驗だけ

に止つてゐるのである。任他本書は醫學上の應用のみに止らぬ。而して其の催眠せしめる方法や醒覺せしめる方法等も其れ相當に書いた積りである。

心身の關係

我等人間は心と肉體との二つから成り立つてゐる。肉體にして心が無かつたら人形同様で人では無い。即ち心を離れて肉體は無く、肉體を離れて心は無い。故に前章にも述べた通り、心は身體中に充ち満ちてゐて、大脳は唯其中樞たるのみである。然るに大脳に精神が宿るといふやうに説くは間違つてゐるし、又肉體を離れて心が獨往獨來すると説くのも、一種の迷信たるに過ぎぬ。併し斯ういふ哲學的の論議は姑く措き、兎に角心と肉體とは密接なる關係を有し、心の作用は肉體に及び、肉體の作用は心に及ぶものだ。然れば肉體に異状あれば心にも影響し、心に異状あれば矢張肉體に影響するは言ふまでも無い。即ち生理的にも病的にも影響する。之を名附けて心身の關係と云ふ。彼の所謂表情や人相なども心身の關係に外ならぬのである。乃ち喜ぶ事も、怒る事も哀しむ事も、乃至は樂しむ事も、皆肉體上に表はれ、而して其の肉體上に表はれたる形相を摸擬的に行ふと又其の心に影響するは妙で

ある。今表情に就き、ブント氏の心理學に據り聊か述べて見よう。

凡ての感情は身體一般に表はれ、所謂手の舞ひ足の踏むを知らずなどいふやうに、手足から胴に至るまでも關係するが、就中顔面は最も能く表情するものである。殊に眼と口とは筋肉の數も多く、爲に多くの靈妙なる運動をなすもので、鼻は僅に鼻孔の擴大・縮小・鼻翼の運動等に過ぎぬのみならず、口の運動と結合して漸く表情する位なものだ。耳に至つては全く不能である。人類學者に言はしむれば、人間は元來猿から進化したもので、其の當初は犬猫の如くに耳翼を動かしたのが、次第に退化して今は唯聲音の波動を集むるに過ぎぬ役目になつた云々と。されば耳を見て感情の如何を察することは如何なる表情學者も到底不可能であらう。それは兎も角、今、ブント氏の説に依ると、所有表情は甘・苦・酸の三感覺に基くものである。今其の概要を紹介すれば、第一甘い感覺を起せば口の周圍なる口裂輪匝筋を收縮させる、之を形容して言へば赤兒が乳汁を呑む如き口元をするものだ。第二に苦いと感ずれば口中の諸筋等も無論變化を受けるが顔に表はるゝ所では、眉と眉との間

なる皺眉筋を収縮させ、又口角を牽き下げ、鼻翼が少し擧るものである。第三に酸いと感ずれば其の度の強さに従つて苦感の表情に似るけれど、其の異なる所は口裂を横に擴げる點である。なほ此等の味感に即て味に何等の關係なき喜怒哀樂の表情にも應用することを得らるゝものである。即ち我等が愉快を感じてゐる時は何んな顔をするかと言ふに、甘味を感じると同様な口元をなし、眼を少しく開き、又鼻孔をも開くものである。次に悲哀極つて涙を流すが如き場合には其の口元が苦味を感じる形相と能く似て鼻翼は下り、鼻孔は半ば閉ぢ、兩眉の間なる筋肉を収縮せしむることは人の能く知る所であらう次に可笑しいと感じ、愈々アハ、と笑ふ際は酸味に似たる口元をして鼻翼を高め、眼を細くするものである。然れど笑の極端に達し、腹が痛むなどの苦痛を感じるに至れば兩眉の間なる筋肉を収縮させ、殆ど悲哀に同じ状態となつて涙を流すやうになる。斯なれば泣くと笑ふとの表情が相錯して遂に了らぬやうになる位だ。然らば憤怒の時は如何と云ふに、これも苦味を感じたる表情の劇烈なるものといつて差支無い。即ち大いに眼目を開き、兩眉の間

なる筋肉を収縮せしめるものである。右は唯其の大體であるが、尙詳しく穿鑿すると、頬が少し膨れて口を軽く閉ぢ、眼を軽く視つめる形をする場合には満足の情を表はしてゐるので、此の層強きは自信の表情、尙一層強きは高慢の表情になり、口を軽く閉ぢて口角を下げ、眼は前者と同じく視詰める形をするときは輕蔑の表情となる。次に顔面全體が緊張して齒を噛み締め、額に皺を生ずるは恐怖の徴であるとか、又顔面筋肉が大いに弛んで口を開き、頬を下げ、遠方を見るが如きは驚愕の風であるとか、或は又顔面の大抵の筋肉は弛めるにも拘らず、眼の周圍に在る筋肉のみが緊張する際には心配或は不安の状態であるなど、其の他色々細微なる表情に至つては一々擧て數ふるに違が無い。されど前述の如く皆甘・苦・酸の三味感に源を發し、これが錯綜して色々な表情をなすものだ云々。古來漢文の美辭法として艱難をした事を辛酸を嘗めたりと、形容を味感に取つて言ふも故有ることである。所が此の表情は妙なもので、真似が真物となるものだ、即ち表情を故意に爲せば自然の感情と同じい感情を惹き起すの一事である。例へば可笑しくも無いのに、

可笑しい時の如くアハ、と笑つたり、腹の立たぬのにコラツと故らに怒つた素振をしたりすれば、勿論真物程に感情強くならぬまでも、矢張真に可笑しくなつたり、真に腹が立つて来る。故に之と反對に表情を抑制すれば遂に又消滅し易きは自然の理である。例へば憤怒の情に堪へぬ時、可成忍んで微笑を洩すやうにせんか、其の感情大いに衰へて遂に全く消滅する事有るやうなものだ。左程悲しく無いのに愁嘆の聲を洩して語れば益々悲しさの度を高めるやうになる。然れば何人も快活で優しい言語動作を常に取つてゐるといふ事は非常に望ましい事だ。次に、人相に就いても聊か辯じておかう。但し身體一般に影響するは勿論であるが、これも顔面が最も其の人格を表はすから茲には其の顔面だけに就き極めて其の大意を説いておかう。

人間の眼は妙なもので、類が違ふと其の面相の區別を知るに苦しむ。今我等が雀や鳥を観ると、何の雀も鳥も同じやうだが、雀や鳥の仲間では一見して互に其の相違點を知るに相違無い。次に人間同志でも、日本人が西洋人を観、西洋人が日本人を観ると同國人程に其の區別を見分け難い。故博言博士

イーストレーキ氏が某家の令嬢を見、「お嬢さんお待ちなさい」とノコノコ追つて来る。令嬢は薄氣味悪くドン／＼逃る。氏は益々追ふ。令嬢は這々の體で漸く我家の門内に駆け込む。氏は頭を掻きつ、「又間違つたか」と吐いた話がある。又の字から考へて見ると、幾度も斯ういふ失敗を行らしたものであらう。又同國人でも女は女同志、男は男同志程其の特徴を發見し易いものだ。斯様に類が違ふと其の相違點を見分け難いとは云ふものゝ、其の實我國の三千萬に近い婦人は個々別々即ち三千萬の面相を具へてゐて、父母を同じうする姉妹でも、他人よりは似てゐるけれど、姉は姉顔、妹は妹顔、夫々違つた點がある。又他人の空似と云ふこともあれど、豈夫に人妻と我妻と間違ふ氣違は斷然無い。此の相違點が造化の妙處であつて、これが爲に我等は甚だ都合が好いのである。然らば斯様に個々別々異つてゐるものなれば、其の面相を類別することが出来ぬか。否々然うでは無い。東西の觀相書を繙いて見ると、夫々面相の異同點を擧げて之を類別し、例へば大きな眼、高き鼻、締れる口といふやうに分け、即て之を精神の上に論及し、眼が斯うなつて居



愚女の面相

れば心は何う、鼻が何うなつて居れば斯ういふ性があるといふやうに説いてある。然れど東洋のは餘り皇張誇大に過ぎ、將來の運命までをも之にて占はんとし、西洋のは牽強附會に傾き、何れも確固たる科學として大學の一講座を占める程に研究せられて居らぬ。去りながら如何なる人にも觀相の觀念あるもので『今日留守中に何んな風の人か来たか』と尋ねれば、無學なお巽も無邪氣な兒供も『根性の悪さうな人が参りました』とか、或は『恐さうな叔父さんが来たよ』とか答へる。之が或る點までは頗る間違はぬもので、段々經驗を積むに従ひ、刑事や裁判官は罪料を調べる参考とし、教育家は教育の材料にする。乃で小生は最も普通に普く考へられてる中から人の面相を五つに大別し、之を婦人に就いて述べた方が興味が多からうと思ふ。(第一)に愚女の面相から述べよう。愚女とは如何、曰く學校の生徒となつては何時にも劣等の成績を得、家庭の妻となり母となつても、其家政が下手で夫には斷えず小言を頂戴し、子には馬鹿にせられると



毒婦の面相

いふやうな困つた婦人を云ふ。斯ういふ婦人の面相は、額が如何にも狭く短く、而して其の短い額より鼻梁にかけて次第に前方に傾き、即ち猿的になり眼裂は細く小さく、目尻は幾分下り、鼻は低く平たく、鼻先より口までの間が比較的長く、それで後方に傾き、耳は一般に小さい。斯ういふ婦人を女房にした夫は甚だ氣の毒なものだ。(第二)は毒婦の面相に移らう。毒婦とは智慧に於ては前者に數等勝るけれども、其の智慧を悉く惡に使用し、上流の妻となつては、お家騒動を惹起し、中流以下の妻となつても、夫を夫とも思はず、甚だしきは殺人強盜をも敢てし兼まじき恐るべき女を云ふ。斯る婦人の面相は、額は幾分お出額で、眉は濃く、眼裂は大きくて凄味を帯び、鼻は高く大きく、鼻より口までの長さは短く、口は甚だ大きく、唇は薄く、額は前方に傾きて短く、耳は中等大で、上方幾分尖つてゐる。彼の有名な毒婦高橋お傳、花井お梅、何れも此の面相に近い恐しとも恐ろし。(第三)は反對に善女の面相を述べよう。善女とは其の德行



正しくて心優しい、之を大にしては國家社會にまでも其の慈悲を施さんとし之を小にしては父母に孝、夫には貞、奉公人、出入人をも可愛がり、人の親を見ては我が親の如くに大切にし、人の子を見ては我が子の如くに慈しみ、人の夫を見ては我が夫の如くにイヤ之れだけは或る點に於て然うで無いが、兎に角貞相操正しき婦人を云ふ。斯る婦人の面相は額は比較的長く、眉は伸やかに其の濃さは中等で、其の眉と眼との間が長く、眼は幾分細いけれども、其の眼裂が長くて水平をなし、鼻は高からず低くからず、口は小さくして其の口元は如何にも愛嬌があり、願が垂直に幾分長く、耳は其の邊縁角立たず、而してフツクリと大きい。斯る婦人を妻にした夫は實に仕合せなことである。(第四)は賢女の面相を辯じませう。賢女とは頭腦明晰で、一を聞いて十を知り、學問技藝を教はれば常に優等の成績を得、之を大にしては或は浩澗の著書をなし、或は前人未發の眞理を發見して國家に貢獻し、之を小にしては能く家庭を齊へ、夫をして内順の憂あら



しめぬと云ふやうな敏腕の婦人を云ふ。斯る婦人の面相は、額が廣くて平かに、恰かも屏風を立てたやうになつて居り、眉は濃くて、眉と眼との間が比較的近く、眼は横堅共に大きく、所謂鈴の眼をなし鼻は高くて而も鼻梁通り、口は中等大であるが締つてをり、額は中等の長さで幾分前方に出で、耳も中等大で邊縁角立たぬものだ。斯る婦人を妻にする夫は幸福であるけれども、之を壓抑して玩弄物視せんとするに至つては、ドッコイ然うは行かぬ。去つて獨立事をなすかも知れぬ。(第五)に智徳圓滿なる婦人の面相は如何といふに第三第四を兼ねて、而も其の中庸を得、額は廣く、眉は濃くて細く、眼は中等大で幾分長く、眉と眼との間も長からず狭からず、鼻梁通つて高けれども左程目立たず口も大ならず小ならず、締つてゐて愛嬌があり且つ威を備へ、頤も餘り長からずして垂直をなし、耳はフツクリと大きく、顔全體が調和を得、柔和で品格備はり、何處にも缺點の無い面相を備へてるものだ。斯くの如く肉體は其

の心と關係して、其の品性は言ふに及ばず、其の生理的狀態をも悉く發揮する。故に又其の面相は其の品性や生理的狀態が異つて來ると、又従つて異つて行く、即ち時々刻々に變化すると言はれぬことも無い。例へば第一に述べたる愚女でも、學問技藝を磨き、智識が進歩するに従ひ、前額が平かになり、鼻は高く、口元縮つて來るし、第二の毒婦でも教育其他の感化で、一朝善良なる心に立ち返り父母に孝に、夫に貞に、何人にも慈愛の心深くなると、自然に口元愛らしくなり、眼裂や眉附が伸やかになるやうなものだ。又之と反對に爾來賢くて品行の正しい面相の善い婦人も過つて墮落の淵に墜んか、眼尻は下り、口元は縮らず、顔全體は勿論身體一般が野卑になつて了ふ。或る心理學者が色々統計したる研究に依ると、艱難苦行をして漸々に徳行を積み、遂に大寺の住職となる高僧。又勤儉力行して次第に發展し、遂に大店の主人となる商業家でも、其の高僧となり、其の大商店主となるに及び、其れゝの品格を備ふるは言ふま



相面なる満圓徳智

でも無く、顔貌や體格も従前とは大に變化し、最も妙なのは筋肉が肥え、デブツリと太り、體重は大に殖える一事だ云々。これに就き色々の説明を加へてあるが、要するに心身の關係は靈妙なものである。

右の如く心身は大なる關係を有するものであるから、精神作用が病氣を惹き起し、又反對に治療せしめることあるも事實である。而して精神が肉體的の病氣を惹き起すは、身體中殆んど何れも侵されぬといふは無い。即ち皮膚や皮膚の附屬器にも、又筋骨にも、呼吸器や循環器にも、或は又泌尿器や生殖器にも、勿論消化器にも異常を呈はし、且つ身體中の榮養及び新陳代謝の方面にも影響を蒙つて、色々の病氣を醸すものである。斯くて精神的作用が肉體的の病氣を惹き起した状態に三つの種類がある。(一)は精神的作用で肉體的の病氣を起して居るけれど、其の肉體の器質に病變を認めぬもの。(二)は精神的作用の爲めに肉體的の病氣を起し、而して其の肉體の器質にも一時的の病變を認めるもの。(三)は精神的作用が肉體的の病氣を起し、其の肉體に持久的或は慢性的の器質的疾起すものである。今例を擧げて言ふと(一)

心身の關係

は病者自身が然うで無いのに脊髄病だと確く信じ、これが爲めに脊髄部が痛み、四肢にも脊髄病に在る可き症候が起り、悩み苦しんでるけれど、其の脊髄なり四肢なりの肉體には何等の器質的疾無く、而して病者に誤解なることを悟らしむれば忽ち治つて了ふ如きを云ふ。(二)は無毒の物を飲食して有毒物だと思ひ誤り、爲めに嘔吐を發して腹痛を起すなどし、其の胃にも亦一時的の炎症を發するけれど、無害な物であつたといふ觀念が起ると同時に、其の器質的故障即ち胃炎が速かに癒える如きを云ふ。(三)は激烈なる憤怒のために腦の血管が破裂して卒中を發したり、或は深い心配の爲めに頭髮俄かに白くなり、其の憤怒及び心配が去つても、其の肉體の器質的病變は持久的に去らず、或は去るにしても仲々容易に癒えぬ如きを云ふ。乃で(一)や(二)は催眠術のみで治るかも知らぬが、(三)に至つては催眠術のみで到底治らぬ、即ち催眠術療法は何等の効果なく物質的療法補助になる位なものだ。然るに非醫者の催眠術職業者中には(三)に對しても催眠術を振り廻して居る者がある。して又(一)(二)にしても果して器質に故障あるか無きかも見分けが定か

う筈が無いから、非醫者が催眠術を以て疾病を治療するは甚だ危険な次第と謂はねばならぬ。然れど退いて考ふるに、醫士も亦物質的治療のみを以て、所有病氣を治さうといふは不可能である。乃ち(一)や(二)に對しては精神的療法を應用せねばならぬ。縦ひ己れは行はざるにしても、或る方面の人に依頼して受けしむるが宜い。故に予は謂ふ、催眠術治療を業とする人は、酒癖を止めしめるとか或は不性な癖を矯正するとかの如き事はいざ知らず、苟しくも肉體的に關する病は一應醫士の指圖を受けて、其の器質的に故障の無きを確めて貰つた後、施術するが却つて世の信頼を受ける所以では無いか。これに就き斯ういふ例話がある。

或る富有な農家の一人息子が、感冒の爲めに四肢や脊骨が幾分痛いやうに感じた。折しも友人に脊髄癆に悩める者があり、見舞ひ旁々行つて其の容態を聴くと、何うやら自分も脊髄癆の初期の様に思はれる。乃で村醫に其の由告げて診察を乞へば、村醫は爲めにする所あつてか、其れとも誤診かは知らねども、兎に角多分脊髄癆であらう云々。事茲に至ると、日に増し病症は其

の様に募つて来る。是に於て幾人もの醫士に診療を受けたる中で、某醫士は患者が宗教迷信者であるを利用し、或る徳高き僧正に内通して置き、其の僧正の祈禱を受けしめれば、次第に治療して健全なる身體に復したのがある。これは此の醫士が職務に忠實で而も氣の利いた處置を取つたのであるが、若し此の醫士にして催眠術を利用したならば、僧正の手を借る必要も無つたのであらう。

翻つて精神的作用が肉體に影響する原因を考へて見ると、之を二大別することが出来る。乃ち(甲)は直接的で、(乙)は間接的である。例を擧げて言ふと、(甲)は胃を痛めたとか、或は脊髄癆に罹つたとかと、思ひ誤つた事が原因となつて胃炎を起し、或は脊髄癆の徴候を來すが如きを云ひ、(乙)は激怒が原因となり返して言へば、(甲)は胃炎や脊髄癆を注文通りに發したといふやうな姿、(乙)は腦卒中や白髪を敢て聯想した譯では無いが、不知不識侵されたのである。尙此の間接的原因からして種々の病を起したる例話を一つ擧げよう。此の

例話は少し長いけれど、心身の關係を證するに最も適切であるから、嘗て予は他の著書にも述べたけれども茲に再び掲げておかう。

今より(大正七年より)貳拾餘年前、著者の郷里(富山縣)に、月俸大枚七圓五拾錢を頂いてる郵便脚夫某が、妻及び年老いたる母と、幼い兒供四人を養はねばならぬ身。搦て、加へて、亡父の殘せる借金もあるし、困難一方ならぬ生計であつた。頃は大晦日に近づいてる或る夜、配達も既に終つて、我家に歸らうとする時、天を仰げば、月は皎々と牙えて、越路名物の白雪を照し、夜は殊の外寂としてゐる。某は歩きながら思ふには、「嗚呼我程不仕合な者は恐らく此の世にあるまい、幾ら走つて歩いたとて、七圓五十錢の收入、何うして餅は搦かれるものか、責めては父親の殘した借金でも無れば可いけれど、其の借金に責められつゝ、七人の口を養ふのでは何時まで経つても浮ぶ瀬のある筈は無い。其れは然うと斯う云ふ時に金の千圓も遺ちてゐたら直に警察へ届けて遣し主から一割即ち百圓位の御禮を貰はれるものを。百圓あれば子供や女房に晴衣の一枚宛も買つて遣られるけれど、年百年中歩くのが

職業で、而も能く注意して歩いてるけれど、鏝一文遺ちてたことが無い。嗚呼、何の爲めに生きてるのか、我ながら譯が了らぬ。斯んな事を咄きながら次第に家に近づく、不圖紫の風呂敷包み一つ落ちてゐる。旨いぞッ、何が入つてゐるだらう、取り敢へず其の中を檢べれば、ヤツト思はず三尺程退いた。敢て恐れるのでは無いが、五圓紙幣ばかり束ねたのが、幾つもゝある。これや夢では無からうか、イヤ斷然夢では無い。更に心を取り直して、一二三四五……二十、一束で百圓、それが又十、確かに千圓。今心の中で祈つてゐた通りだ。ドレ人目に懸らぬ中に早く歸らうと、風呂敷包みを腰に結いて立つたが、嬉しいと云はうか、恐ろしいと云はうか、其の立たんとする刹那、グラ〜と眩暈がして來たと同時に腦震盪を起し、雪の上に倒れて了つた。折しも通り合せた知人が認め、脚夫の口へ雪を入れたり、或は大聲で呼んだりして夫れが爲めに漸と生氣附き、「紫の包み——ナニ手は紫色になつてゐる。合羽を着てゐるから分るまい——イヤ合羽を着てゐるから感冒には罹らなかつたらう、有難い〜」と、何だか譯の分らぬ事を口走つてゐる

「お前さん、氣を確りしなさい、兎に角送つて上げませう」と知人に助けられて家に歸つた。早速妻に打ち明け、「今、お前、歸り道に斯ういふ譯だ」と紫包みを解いて見せ、「直に警察へ届けても一割即ち百圓のお禮は定り物、己れア嬉しくつて一時氣絶したよ、何と結構な事では無いか」「然うとも〜、けれど老母さんには黙つてゐらつしやいよ」「年寄は口が軽いからな、マア一杯酒でも飲まう」妻はイン〜と買ひに行つた。例もならば一合の酒に、前後忘れて熟睡するのだけれど、小人玉を抱いて罪を作る。其の晩寢床に入つても容易に眠られぬ、眠られぬから考へる、考へるから眠られぬ。「警察に届ければ一割の報酬、亡父の借金五十何兩を返せば残る所四十幾兩、四十幾兩では着物一枚宛も買へやせぬ。まゝよ千兩取つておかう。然うすれア借金とでも少し宛返せば可し、而して人目にや何處までも貧乏な風をしてゐて、チビリ〜と使つてゐれや知れる氣遣は無い、だが最早妻に明した上は何んな事で口走らぬものでも無い、届けるとせう、イヤ併し妻とても口走れば自分の損、子供四人もある身。さりながら〜と取つ置いつ、寢返りの數十遍も

繰り返してゐる中に、長い冬の夜も既に明けて了つて徹睡ともし無かつた。斯くて最早出勤す可き時は来たが、心身共に疲れてをれば今日は先づ缺勤届、其れから又一合飲んでグツと睡よう。妻も賛成して朝から酒買ひに走つた。警察へ届け出づれば何の不安も無いことなれど、届け出ぬ中は罪人であるから、何と無く不安の念に驅られるは言ふまでも無い。折しも家の外ではガヤ／＼と人が騒ぐ聲がする。「ハチナ、捕手が来たのか知らん——いや其の氣遣は無い筈」何と無くドキ／＼する胸を壓へて耳時て聞けば、甲「オイ寺島屋（酒屋）の前の掲示を見たかい」乙「見たよあれは寺島屋の番頭さんが、主人の金を昨夜丁度千圓餘所から集金して歸る途中、酒に酔つばらひ、此の町近所の田圃道で落したと云ふことだが、主人の言ふには落したのではなく、何かに融通したのだらうと怒るので、番頭さんは其の明白な事さへ主人に了れば拾つた者に悉く千圓を遣つて、已れは其の千圓を主人に辨へても可いと言つてさうだ。で兎に角拾つた人が午前十時までに届けて下さるならば、二百圓進上仕る可く候と書いてある、拾つた者は何れ此の町の者だらうがのう」

丙「ビク／＼もので千兩の金を有つてるよりは天下晴れて二百兩貰つた方が可いちや無いか」丁「さうだとも／＼」是等の話は郵便脚夫夫婦の耳には手に取るやうに聞える。乃で老母と子供等は用に托けて餘所へ出し、二人は熱と相談した。届けることにすれば二百兩を貰へる、併し二百兩と千兩では八百兩の相違、届け無いでビク／＼と氣長に使はうや、それが宜う御座んせう。妻の方が寧ろ平然としてゐる。又、酒を飲んで枕をすれば、今度は能く眠られた。すると又其の日の午後四時頃、又大變ガヤ／＼と表の方に騒ぐ聲がする。今更ながら又胸轟かせて聞けば「寺島屋の標札が變つて、今度は五百兩進呈すると出た、拾つた奴は馬鹿者だ、天下晴れて五百兩使つた方が宜いちやないか」と又天下晴れの話が繰り返されてゐる。「良人五百兩になつたとき、届けますか」「今となつて届ければ盗る氣で有つたといふ事が了つて、逆も此の町には住はれないぢやないか」「ぢや矢張チビ／＼消費ませう」と、斯う夫婦が斷然と一決して、十兩だけを正月の費用に當て、残り九百九十兩は床下に埋めて了つた。所が不安の念は益々高まり、世間中の者が自分を疑つてるや

うに思はれる。のみならず、其の金が悉く五圓紙幣であつて、斯んな狭い町では何を買つても注目せられる種となる。といふのは七圓五十錢の月俸、一月に五圓紙幣二度使はれる筈がない。されば四五里も隔つた富山市まで故々出懸けて行つて、少しの物を幾軒もの店で買つて五圓紙幣を兩換してゐた。兩換した所で、矢張月給不相應に使へば第一に母親から疑ふやうな道理。其れや此れやを思ふと精神は次第に衰弱し、随つて食慾も減り、身體は衰弱して来る。醫士に診て貰へば消化不良だ即ち胃病だとの言。之を治療するにしても矢張金。金はあるけれども使はれ無い。衰弱は益々加はつて来る。何うしたら可からうと、妻と相談して見たが之れぞといふ名案も無い。旅他國へでも行くか、と言つて住み慣れた故郷を去るのも辛い、ぢや斯うしよう、誰か朋友に事情を打ち明けて頼み、表面は朋友の助力を乞ふといふことにし畢竟一人の慈善家を製へよう。其れには幾らか金の有る者で無くてはならぬ甚五郎に頼まうか、清兵衛に打ち明けようか、甚五郎の方が宜からうと、早速同人に話した。甚五郎は豫て郵便脚夫の妻に道ならぬ戀をしてゐたことな

れば、「可いともく、他人の金で俺が慈善家になるのだから、何の造作も無いこつた」相談は忽ちに纏つた。始めの中は、彼巧みに深切を装うて居たれば、郵便脚夫も大に病氣の保養も出来、他人からも「甚五郎は仲々義侠な男だ」と賞められてゐた。所が甚五郎は胸に一物あることゝて、次第に郵便脚夫の妻を口説落し、後には弱點に乗じて、姦夫姦婦は傍若無人の有様。郵便脚夫は無念骨髓に徹してをれど、荒立てゝはならじと涙を飲んでゐたが、或る夜の事、殆んど公然的に密會して居る事が知れ、いよゝ勘忍袋の緒が切れ、前後も辨へず、鐵拳振つて踏み込んだが、腕力は甚五郎に及ばず却つて甚五郎の爲めに散々に擲られた。郵便脚夫の怒り極度に達し「残念ッ」と齒嚙をしたまゝ、人事不省になつた。事茲に至れば、姦夫姦婦も打ち捨て、おく譯にも行かず、水よ薬よと介抱した結果、蘇生はしたものの、これより黄膽病を發し、妻は離婚し、甚五郎とは絶交した。去られた妻は身の振方を甚五郎に頼んだが、妻ある甚五郎、殊に斯る輩の情は永く續くものに非ず、昨日に變つた無情な言振、妻は已むを得ず再三郵便脚夫に詫を入れたが、聞き入れ

ぬ所から、悔しまぎれに遂々警察へ密告した。それとは知らず、郵便脚夫は病後の脚を引き摺りながら、我が家の上り框に近づく途端、「御用ッ」此の一聲は百雷の一時に落ちたる如くに響いたと同時に、又々人事不省、巡査が活を入れたので氣は附いたれど、家宅搜索やら、親子の泣き叫ぶやらで、言語は吃り、耳は聾となつて了つた。其れより監獄に拘禁せられてからは、家に残した老母と四人の子供が心配で堪らぬ、「嗚呼今頃は何うしてゐるやら、日ならず餓死するだらう、隣り近所の者も罪人の家族だと誹るだらう、斯んな事ばかり思ひ詰めた結果郷思病を惹き起し、四十度以上に發熱して殆んど窒扶斯の様な状態になつた。斯くて治療を加へられ、全快の上年期も過ぎて家に還つたれば家族は一同健康無事、先づ何うして暮してゐたかと聞けば、寺島屋の番頭は、『我は主人の大金を持つてゐながら、途中で酒を飲み、遂に大金を遺失したが爲めに頓でもない罪人を作つた、我さへ遺失さずば七人の者が貧乏ながらも清い生活をするのであつた、實に氣の毒なことだ』と郵便脚夫が監獄にゐる間は其の家族を引き取つて世話して呉れたとの事。聞いて脚

夫は伏し轉んで、番頭の慈悲深きに、ヨ、と泣いた。之より直に番頭の許に至り、大地に手をついて大に謝し、「道義に依るに非ずんば此の世に立つ事は出来ません、私は眞に生れ變つた様な人間になり、而も大に働いて貴方の爲めに御恩の萬分一を報いねばならぬ、私は貴方の爲めに生命を捧げて働きますから、何んな事にでも使つて頂きたいもので……」と又泣いた。これより彼は此の町の小學校の小使を奉職し、其の傍ら未明に起きて牛乳配達をなし學校にゐては暫時の暇にも繩を編み、又學校の授業終れば寺島屋の樽拾をなし、家にては駄菓子を賣り、夜は草鞋を作り、日曜には方々の庭掃除に雇はれることの七職を勉めて居たれば稼ぐに追附く貧乏無しとやらで、家計も豊かになり、其れで他人には情深いために、誰云ふと無く七手觀音の綽名を受け、身體は舊に倍して健康になり、口も勿論吃らず、耳の聾も何時の間にか治り、身體中に何等の故障が無くなつた。

右は一小人たる郵便脚夫の話なれど、其心の作用が身體に著しく影響したる事實を大に證明してゐる。實に心身の關係は妙と謂はねばならぬ。乃ち非

常に喜んだときには脳震蕩を起して倒れ、不安の状態を續けてゐると食慾次第に進まず、恰も慢性胃加答兒の如くになつて身體漸々衰弱し、憤怒の極度に達したときも卒倒して、引き続き黃膽を發し、俄かに驚いた時にも人事不省の揚句、言語は吃り、耳は聾になり、監獄に繋がれ、郷里を思うて煩悶するや望扶斯の如くに熱發したなど、一々精神が身體に影響せぬといふは無い斯くて善良な人間に立ち返り、善良な精神、健全な心を以て働くやうになる、諸症皆癒り、舊に倍して健康なる肉體を作るに至つた、返すくも心身の關係は争はれぬものである。これを以ても人は精神を健全にし、正しい心を持して世に立たねばならぬ。健全なる精神は臨終の命すらも延すことが往々ある、例へば重病の人が自ら不治なることを覺悟し、遠方の子なり、兄弟なりを呼んで遺言せんとし、其の到着を待つて居ると、醫士が豫想せる以外に壽命が延るけれども、逢つて其の遺言を終り、最早何時死んでも可いと思へば直に瞑目して了ふなども矢張心身の關係である。九十いやうだが今一つ健全なる精神になつたが爲めに、病苦の身體が期せずして健かになつた例話を

掲げよう。其れは獨逸にあつた事で、或る病院の管理者某が七十八歳で老衰に傾き、心臓の鼓動が弱くなつて、脈は時々結代し、其の上に慢性氣管支加答兒に襲はれ、口唇は垂れて常に涎を流し、眼からは何時も涙が出で、揚句に又肋膜炎の徴候も加はり、脚には浮腫が來り、最う數十日の中には此の世の人では無からうと云ふ醫士の診断であつた。此の時に當つて其の病者の管理せる病院が、管理者病氣の爲めに何の關係もせずにあつた所から、其の病院の患者取扱方や或は計畫上等につき世間から大に攻撃を受け、非常に信用を失ひ、従つて患者は段々減り、將に衰運に傾かんとする由を病床に在つて聞いた。所が此の動機は彼をして大に精神を興奮せしめ、これが大變だ、何うあつても、吾は此の病氣を癒し、一刻も早く、病院の信用を回復せねばならぬと、自ら勇氣を鼓舞し、醫士を呼んで診療を受ける傍ら書記をして手紙を書かしめ、自らも筆を執り、或は徵を所々方々に飛し、尙又自分は或は車に乗り、或は船に乗り、東奔西走して其の病院の信用回復を計畫したれば、病院の信用は又日に擧り、彼の身體も段々快復し、心臓の鼓動も脈の搏方も皆

順調になり、口唇も平常に復し、涎も止めば肋膜炎も四週間で消散し、脚の浮腫も何時の間にか消え、唯慢性氣管支加答兒だけが幾分残つたけれど、之れより某は尙一層其の病院の爲めに奮闘したれば八十七歳まで九年間健全に壽命を長らへたといふ。之れも精神が大に身體を健全にしたる例證の一つである。

以上數例に依つて精神は身體に影響し、古い諺に「健全なる身體に健全なる精神宿る」とあるが、又健全なる精神は健全なる身體を作るとも言ふことが出来る。故に醫士たる者は之を心得てゐて治療に従事せねばならぬ。然るに世の醫士は精神の身體に影響する事は度外視して、一向に物質的のみで病氣を癒さうとしてゐる傾きがある。されば醫科の中にも心理學の一科を加へ催眠術療法も他の藥物療法等と並び行はれるやうにし、非醫者が醫士の指圖無しに肉體上の病氣を治療するが如き事を、取り締つて貰ひたいものである之れにて心身の關係は略述べたが、尙一層詳しく知らうと思ふ人は心理學書に就いて讀まれたいものである。

暗示の話

暗示療法とは如何

サゼステジョン (Suggestion) 即ち暗示とは如何なる事かといふ定義は、既に緒論に述べたれば、今茲に再説する必要が無いから略す。其れは兎に角之を醫療上に應用するを暗示療法と名づく。即ち暗示療法は病的觀念を抱いてる患者に治療觀念を暗示し、其の病的状態を治療せしめんとする方法である。而して此の暗示に色々の種類はあるが、之を大別すれば言語暗示と形式的暗示となる。

言語暗示

言語暗示とは讀んで字の如く、言語を以て暗示するので、之を證言と豫告と命令との三つに區別することが出来る。例へばヒステリー患者の四肢が痲痺せるに對し、「貴方の痲痺は既に治つた」と確かに證明して言ふが如きは證言暗示で、「貴方の痲痺は二三日中に治りませう、必ず治らねばならぬ譯です」と言ふが如きは豫告暗示。「貴方の痲痺は貴方の迷ひである、動かすことが出来る、さア動かさない」と強ひて行はしむるやうにするのが命令暗示である。

暗示の話

る。

證言暗示は患者が大に醫士を信用し、此の醫士の言ふ事には間違ないと恰かも神の如くに崇拜してゐて、而も其の病症が何等器質的の故障なく、唯精神作用のみの影響なるときは大に卓効を奏するものだ。例へば前段に記せるヒステリー患者の痲痺に於けるが如きは、器質に故障がないのであるから、斯る患者に對して患者の崇拜せる醫士が相當なる安心の確證を與へれば即座に治るものである。

豫告暗示は其の病症が矢張器質的に故障無けれども、即座に治せずと認めたる場合に應用す可きものだ。けれども其の時日を餘り確定すると、往々失敗を招くことがある。故に日ならず治るとか、或は二三日乃至五六日の中に奏効するといふやうに暗示せねばならぬ。著者嘗て或る患者(四十歳の男子)を診察した。其の患者は腸窒扶斯に罹り、避病院に入院し、數月の後全快して歸宅したのであるが、歩行することが出来ぬ。乃ち歩行せんとするも下肢が顫つて直に膝が屈つて了ふ云々。之を診するに、榮養状態から、皮膚筋肉

或は關節乃至は神経系等の生理的状态は何等故障がなく、患者自身も病前よりは健康になつたと感じてゐる。併し何か藥の爲めに下肢の腿を傷めたのだらうとの素人判断を下してゐるのみならず、醫士の中にも其の様な疑ひを入れた者もあつたとの事。乃て予はこれは患者が全快の當初に病後の衰弱で容易に立つことの出来なかつたのと、且つ長い時日病床に臥してゐたるため、言はずは歩くことを忘れたやうなものだと思つたから、其の通り正直に患者に話し、力のある人に扶けて貰つて歩く稽古をすれば、必ず二三日中に元の如くなること疑ひがないと告げ、何等の藥劑を與へなかつた。然るに従前の醫士は何れも塗布劑又は懸法藥等を與れたのであるから、此の藥劑を與へなかつたと云ふ一事が、患者をして予に確信あることを悟らしめた。斯くて患者は二人の大男に扶けられて、歩行の稽古をしたれば一日の中に最早數間を歩かれ、三日目には殆ど元の如く外出するやうになり、以來予を非常な名醫と過信したのである。これは予の如き裁醫としては上出来の豫告暗示であつた。

ものだ。勿論器質的に何等の故障なき場合に限る。斯くて此の命令暗示を與へて何等の奏効がないと、患者が其の醫士に對する信用は頓に失せ、爲めに必ず効力ある可き他の方法を試みても効力がないやうに至ることがある。例へば前段の患者にしても、直に扶け起して、歩めるから即座に歩めと命じても恐らくは効がなかつたに相違ないのだ。併しながら上肢の關節が脱臼し、之を整復したるにも拘らず動かすことが出来ぬと言つてゐるやうな患者に對しては、此の命令暗示は大に良効がある。或る擊劍の先生が門人の上肢脱臼を整復したけれども、矢張動かぬと言つてゐる。然らば或る方法を以て治して遣らうと、其の門人を柱に縛り、然る後先生は白刃を閃めかし、『拙者の術を施したるに動かぬと有つては不名譽だ、さア動かせ、動かさずんば切つて捨てん』と將に實行せん風貌を示したれば、『先生動かします』と我れを忘れて自由に動かしたといふ話がある。これは作り話であらうけれど、命令暗示の例に適してゐる、即ち命令暗示は多少威壓的に施し、患者に或事を爲さざる可からずといふ觀念を與へ、患者が少しも抵抗なしに之を受けると共に最も

有効なのである。序に言つて置くが、動かぬのを動かす場合のみでなく、動くのを動かぬやうにするのも同じことだ。例へば手が顫ふとか(精神作用で)咳嗽が出る(神經性)とかの如き時に、『手を顫はすな』『咳嗽をしてはならぬ』といふ命令暗示を與へて忽ち奏効する例に乏しく無い。彼の眞言宗秘密の法で、人を動けぬやうにすると言ふが、是れも矢張證言暗示か、或は命令暗示かの一つであらう。而して高德の僧若くは高德であると被術者が信じてゐるに非ずんば行はれぬとのことである。

形式的暗示とは物質其の他種々の形式を以て暗示を與へるので、學者に依ては物質的暗示或は覆面的暗示等と名づけてゐる人もある。抑、言語暗示は病人が非常な信仰を抱いて居らぬと、却つて反抗の觀念を惹き起すことがある。乃で其の病人をして反抗心を起さしめぬやう、其の聯想觀念を調へておく爲めに、此の形式的暗示を與へるのである。例へばヒステリー患者の痲痺に對して前章の言語暗示のみでは奏効不確實であると認むる場合に、其の痲痺せる部に毒にもならず又藥にもならぬ着色水を塗るとか、或は蒸溜水を注射す

るが如きを云ふ。然うすると所謂「罇の頭も信心柄」で、其の奏効が著しいものだ。但し斯ういふ無害無効の藥物のみで無く、學理上に於て幾分或は大に有効なる物も、其の目的が暗示であれば矢張之を形式的暗示と云ふのである。否目的が暗示で無くても、世間の醫士が不知不識の中に此の形式的暗示を與へつゝあるのだ。次に此の有効なる藥劑も、患者が有効ならずと信じてる場合には、其の信する如く、更に効無きか或は却つて害あるとがある。彼の神經衰弱症やヒステリー病の者は、ブロームカリウムや纈草丁幾及び是等に配合せられる苦味丁幾や重曹等を屢服してをり、爲めに是等の藥劑を輕んじ、是等の藥劑は何等の効を奏せぬやうなものだ。而して是等の神經病者は屢々醫士を取り換へて處方箋を求めたり、或は惡意な醫士や藥劑師に就き、病症や藥物等の事を研究したがるものだ。故に方々の醫士を亘つて來た患者に處方箋を與へる場合には、同じ効力の藥でも、可成他醫の處方せぬやうな藥を撰んで書くやうにし、又自ら藥物を與へる際には、其の藥の味なり或は色なりを變化せしめるやうにするが如きも、一種の形式的暗示であるし、又

始め根治的の藥よりも寧ろ一時的に諸種の苦痛が幾分宛でも緩らぐやうな對症藥を與へ、而して先づ始めに患者を信仰せしめ、然る後徐ろに根治的療法を施すが如きも、矢張形式的暗示である。之に就き斯ういふ例話を醫友から聞いた事がある。或る腦神經衰弱症の患者某が診療を受けに來た。某の語る所に依れば、近所の醫士は言ふに及ばず、神經系専門の病院から醫科大學、其他大學教授の自宅などでも治療を受け、加之に色々な賣藥や新藥等を試みたとして、普通醫士の知らざる藥劑までも能く知つてのみならず、電氣療法、運動療法、入浴療法、食餌療法等の事までも詳しく心得てゐる。それで何ういふやうに苦しむかと問へば、頭痛がする、眠られぬ、便秘する、食慾が進ま無いで酸い嘔吐が屢々出る、動悸が亢ぶる、寒さが著しく身に沁みる、色々な雜念が浮ぶ、その他多くの精神的病狀を並べ立てた。醫友は丁寧に診察したる後、嚴かに告げて曰く、「病症は頗る慢性になつてゐるが、予には予の自信がある。今予の與ふる藥を三日間連服して効力が著はれたならば、其の餘は着々歩一步に全快すること疑ひない。就いては藥は甚だ數多いけれど、定期

の時間に必ず服まれよ」と、鎮痛剤、痲酔剤、下剤、制酸剤、心臟調整剤の五通りを與へた。患者は爾來多くも水劑・散劑・丸劑の三通りなるに、丸劑散劑の上に水劑が三通りもあることなれば、兎に角好奇的の信仰を以て服用した。所が此の中には神經を強壯にするやうな根治的の藥物は無いけれど、鎮痛劑の爲めに頭痛は緩ぎ、痲酔劑の爲めに能く眠るを得、下劑の爲めに快く便通し、制酸劑の爲めに酸い嘈雜は止み、心臟調整藥の爲めに動悸は鎮まり、今までに無い爽快を覺えた云々。是に於て醫友は次第に此の對症療法を止めて、次第に目的の強壯藥を用ひ、次第に作業療法や水治法其の他精神的療法をも試みたらば數月の中に全快して健全なる人となつた云々。これは此の醫友が巧みに形式的暗示を利用したのである。

彼の按摩療法・電氣療法・冷水療法・溫泉療法或は古來我國に行はれてゐる針灸療法、又近頃は一風變つた抵抗療法とか食養療法とかいふ方法も一部の人は持つて囃されてゐる。其の他尙斷食療法・光線療法・磁石療法・金屬板療法等の諸種の療法も色々あるが、實際に其の療法が直接的の効果を與ふるよりも寧ろ

形式的暗示の爲めに、藥物以上の良結果を來すことが珍らしく無い。管に病氣治療のみならず、衛生上に於ても岡田氏の靜座法や、二木博士の深呼吸法なども道理は兎も角形式的暗示の力が與つて大に効果がある。

又其の必要が無くても、故らに種々の器械を使用するが如きも、同じく形式的暗示で時に依ては大なる効力を奏することがある。例へば神經性の胃病であるのに、患者は眞に器質の傷んでる胃病であると確信してゐる場合に、胃唧筒を使用して胃を洗滌ふ如きである。其の他尿道病にカテーテルを挿入したり、婦人生殖器病にイリリガートルを使用したたりするが如きも、物質的効果以外に、形式的暗示が其の効果を助けることの大なるものである。されば醫士が患者に對する一舉一動が、悉く暗示の種にならぬといふは無いと謂つても恐らく過言では無からう。今左に一々列記して見よう。

患者診察室の如何が患者に暗示を與へる上に於て甚だ影響するものである。乃ち其の室内の掃除が行き届いてゐて障子及び裝飾品等が雅致に富んでをり、又諸種の診療器械等の整頓してゐるといふ事は病者に一種の快感を與ふるも

ので、醫士の家に往つたら、最早幾分治つたやうになつたと云ふやうな事を往々聞くが、これは其の室が良い形式的暗示を與へるのである。これと反對に掃除が甚だ行き届かず、障子の紙が破れてをり、或は硝子戸の硝子が傷んでをり、器械其の他の裝飾品等が亂雑であるといふやうな事は非常に患者の信仰心を缺くもので、縦令醫士其の人が技術に長じてゐても其の割に成績の擧らぬものだ。けれども又餘りに飾り立て、所謂山師の玄關と云ふやうなもの却つて識者の卑しむ所となるものなれば、醫士たる者は斯る事にも注意せねばならぬ。

醫士の衣服は一方ならず暗示に關係する。乃で敢て立派に着飾らざるも可いが、醫士相當の品位を保つ様な瀟洒たる服を着け、而も之を整然と着て居らねばならぬ。品位を損ふやうな衣服或は垢だらけの衣服を着け、或は然らざるもだらしく胸を露はして居るなどは患者をして醫士を輕蔑せしめる一つである。一般に世間の醫士が他の職業の人よりも比較的に美服を纏ふのは知らず識らずの中に暗示を與へようとしてゐるのである。けれども粗服が却

つて人を信仰せしめる人もある。例へば故乃木大將や又現に東京市長の職にゐられる田尻稻次郎子爵の如きは、其の粗服が人格の崇高なるを思はしめ、却つて其の人を信仰する一つになるは例外である。それから又分に過ぎて餘り立派な衣服を着飾り大に華美を街つたり、甚しきは顔に薄化粧したりして俳優然と構へる醫士中にはあるが、無智なる輩は立派に見るかも知らねど、識者の眼からは其の人格の卑しい所が見透かされて、非常に信仰心の失せるものである。著者の知れる某醫學士は嘗て軍醫であつたが、其の人の短所として、粹人を氣取りたがり、髭は蓄へず衣服や携帶品などは何と無く意氣に見せかけ、従つて其の言語動作から心根までも學者然とした點が無い爲めに、何うしても商家の番頭然と見え、然ういふ方面の者には喜ばれるけれど、患者には一向に信仰を受けぬのがある。醫士たる者は大に鑑みねばならぬ。

醫士が病人に接しては其の言語や動作には其れ相當の禮儀を備ふ可きは前段の二つよりも大切である。然れど餘り叮嚀に過ぎて卑屈に陥り、富家權門に媚るやうな態度があつたり、或は齒の浮くやうなお世辭を振り廻す如きは

非常に宜しくない、と云つて又其の言語動作が疎暴であるとか或は又傲慢であるとか云ふやうなものも勿論悪い。殊に貧者若くは地位の低い人に對して侮るが如き態度や卑しむやうな言語を使つたりするは醫士の最も慎しむべきことだ。斯る輩に對して寧ろ比較的敬意がなければならぬ。下層の者程僻み根性の有るものなるに、敬意を以て之に接すれば非常に懐くものだ。古人の格言に敬人己亦敬於人とあるが實に其の通りである。故に之を總括して言へば貴賤貧富に對して其れ相當に禮儀あつて欲しいのである。所が此の程度が六かしいもので、之に就き滑稽な話がある。著者の醫友が、其の代診の薩摩生れで、患者に對し、言葉が餘り野卑であるから、之を戒めて言ふやう、『成る可く奇麗な言葉を使ひ給へ、殊に女には然うだ。例へば内儀さんと云ふ所は御新造、御新造で可いと思つたら奥さん乃至奥さまと云ふやうにして貰ひたい』と教へたれば代診先生其の後は非常に鄭重な言葉になり、即て車夫金七といふ者の妻に、金七さんの奥さんと呼んだれば、其の妻大に怒り、『餘り人を馬鹿にしなさんな』と診察を受けずに去つたといふことだ。敬語を使ふ

も程度問題である。事些細に渡るやうだが、矢張醫士の心得べき事である。それから又兒供や妙齡の女に向つては、可成臆せぬやうに、所謂威あつて猛からず、而も懐く可き態度を保たねばならぬ。兒供や妙齡の女子には殊に形式的暗示を興ふることの必要あるものである。要するに醫士の顔貌と態度とは内には自信深く外に向つては同情心に富まねばならぬのである。斯くて醫士は其の舉動が凡て沈着なることが甚だ肝要である。患者の語る所を聴きながら、扇をバチ／＼音させてゐるとか、或は烟管をカン／＼と頻りに叩くとか、乃至は此處彼處キヨロ／＼見廻してゐるなどは大に卑しめられるものだ。故に言語でも動作でも悠揚迫らず、如何にもシットリとして居らねばならぬ。而して其の言語は餘り大聲でも無く、又餘り低聲でも無く、能く其の中庸を得てゐて、明瞭に且つ正確にあつて欲しいものである。

何業でも然うだが、殊に醫士は其の職務に熱心で而も忠實で無ればならぬ。今二三の例を舉げて之を説明しよう。或る醫學士が開業して熱心勤勉に患者を取り扱つたれば大變に歓迎せられて、忽ち富有になつて來たが、不圖米相

場に出し、其れ以來相場に夢中になり、患者を診察しながらも、新聞の相場欄を眺めてゐたり、或は中途に立つて電話口に至り、相場の事を聞き合せたりするやうになつてからといふものは、次第に診察を受けに来る者が減り、数月の中に門前雀羅を張るやうになり、斯うなると稀に診察を受ける者も、信仰が少い爲めに、以前の如く効果が無い、効果が無いから信せぬといふやうな道理である。之と反對に熱心忠實で人を信せしめた好例を擧ると著者の友人が肋膜炎に罹り大學病院に入院してゐた時、故青山博士の助手をしてゐたる醫學士某氏が其の職務に忠實で、患者を診察する毎に診斷圖に其の診察したる結果を事細かに、記入して行くが例であつた。斯くて數週間の後には其の圖中は細かい文字が縦横無盡に埋められた。是に於て著者は某氏の熱心忠實なる事に感じ、斯る醫士の治療を受ければ必ず良果あるといふ信念を抱き、退院後も病氣の節は必ず其の人に診を乞ひ、崇拜すること青山博士以上であり、従つて成績も亦擧つた。これ忠實が斯く人を動かすのである。今一つ有名な例を擧げよう。獨乙のビスマーク公が嘗て健康勝れず、或る田

舎の温泉場に轉地療養をなし、旅館の主人を呼んで曰く、「此の邊での名醫を招いて貰ひたいがのう」旅館の主人對へて曰く、「幾人も御座いますが、先づシユウエーニンゲン様が宜しいで御座いませう」難て招きに應じて來た。ビスマーク公一見すると尙う若い青年ではあるが、其の舉動が如何にも沈着で、而も敢て權門に媚びるの様も無ければ、又敢て傲慢な風も無い。併し長者に對するの禮容は十分に備はつて居る立派な君子である。斯くて徐ろに口を開き、ビスマーク公の遺傳から、既往症や現在の病氣に於ける原因徴候等は言ふに及ばず、平常の生活法や嗜好物等に至るまで、問ひ去り問ひ來り、容易に脈に觸れさうも無い。公遂に煩に堪へず、「もう尋ねる事は善い加減にして早く診察して貰ひたいね」醫伯色を正して曰く「公にして病の事を聞かると、御着蠅いならば獸醫に診を請はれたい。獸醫は何の問診も無く、直ちに診察に取り懸りまする、私は之れで御免を蒙ります、左様ならば……」と將に立つて去らんとする。此の時凡庸の人ならば「なアに生意氣な事を言はつしやるな、醫士は君一人でもあるまい」と縦し口に出さるまでも、其の

態度に表はれるであらうが、其處に行くど流石に英雄は英雄ぢや、忽ちにして其の醫士の職務に忠實で而も自信の深きに感心し、「ま待ち給へ、これア俺が悪かつた」と時めく宰相も、此の一青年に一段の敬意を表し、更に問はるるが儘に詳しく答へたといふ。此の醫士は曾に公のみならず、誰にでも貴賤貧富の區別無く、能く職務に忠實であつた爲めに、洽ねく世間の信仰を受け、後に赫々たる名聲を擧げた人である。

醫士たる者は品行方正で無れば良い暗示を與へられぬ。これに就き舊幕の醫士吉益東洞と云ふ人曰く「良醫たらんと欲せば必ず先づ君子たらんことを求めよ、君子に非ずんば良醫たる能はず」と、洵に味ある金言と謂はねばならぬ。彼の高德の僧正が人に接し、何物も語らざるに能く人を感化するは、高德其の物が暗示を與へるのである。醫士の德行も矢張同じことで、昔の耆婆扁鵲が能く病を治したといふは、技術勝れてゐたに相違無からうけれど、一つは高德が能く人に暗示を與へたのである。一寸考へると技術さへ上手であつたら、何んな不品行でも病を癒す上に何の差支も無い譯だが、患者にし

て其の醫士の不品行を知ると、其の技術が何と無く下手なやうに思はれて、其の人を信ずることの薄らぐものである。東京で多少名のある耳鼻咽喉科の某ドクトルが始めて病院を開いた節は次第に患者の信用を得、日に増し隆盛を來し、鉅萬の富を貯へた。所が其の金のあるに委せて數人の妾を蓄へ、家庭に風波を起すやうになり、其の評判が世間に傳はると、患者は次第に減つて、昔日の妾は段々失せた。是に於て其のドクトルは大に前非を悔い、悉く其の妾を追うて德行の人に復つたれば、此の事又何時とは無しに世間に知れ、又々繁昌し、今も隆盛を極めてゐる。實に德行が能く人を感化することの大なるを證するに好適例である。泰西の諺に「醫士の德行は藥に優る」とあるし、昔支那の岑谿丘といふ名醫が「醫己れを行ふこと正しければ則ち病者之を信ず、之を信すれば則ち藥能く功を成す」と言つてゐる。以上何れも醫士たる者の須臾も忘るゝことのならぬ格言である。とは言ふものゝ技術も勿論熟練で無ればならぬし、學問の智識も深く無くてはならぬ。故に醫士たる者は常に日進の醫學を研究し時代に後れぬやうに努め、相當の専門雜誌や新し

い醫書などを、業務の暇に讀むことを怠つてはならぬ。換言すれば業務に忠實なると同時に篤學の人で無ればならぬ。醫士の免狀を得たからこれで十分だとし、本箱を棚に上げて顧みぬやうでは駄目だ。兎角流行醫は忙しい所から、時代に遅るゝ傾きあるが、斯くては遂に折角の信用を失ふに至るの基である、鑑みねばならぬ。これにて形式的暗示に關する事柄は粗述べたが、序に醫士の心得となる事柄を一括して左に記しておかう。

抑、醫士は丁寧に而も綿密に落度無く診察せねばならぬけれども、餘り詮索に過ぎ、左程重からの病をして患者に恰も重病であるかの如くに思はしめてはならぬ。例へば茲に胃病の患者あり、之を診察するに當り、胸部から背部に至るまで、或は打診をなし、或は聽診をなし、或は喉頭検査乃至は喀痰を検査するに至つては、患者をして胃病の外に尙又肺結核を伴つてゐるのでは無からうかと疑はしめるやうになる。故に必要無き事は簡單にしておかねばならぬ。然れど若し斯様な疑ひが幾分でもあつて、穿鑿す可き必要ある場合には、前以て心配せぬやうに告げねばならぬ。即ち『予は手落の無いやうに、

念を入れて診察するのであるが、其の實貴方の病氣は其の様に重態では無いのです』と能く〜安心せしめてから、綿密に検査するが可い。次に重態の病人に對しても其の重病であることを成る可く知らせぬやうに診察するが大切である。けれども患者が自ら一通ならぬ重病であると確信してゐるに對し、餘り軽く言つてるのも却つて患者に疑心を起させる一つになつたり、或は其の醫士を信せぬに至ることがある。彼のヒステリー患者の如きは餘り軽く云ふと、却て腹を立てるものだ。換言すればヒステリー患者は他人が見るよりも、自分では非常に重いと信じてゐるのみならず、より以上に重く言つて他人に同情を求めたがるものである。されば斯ういふ患者に對しては「貴方の病氣は更に心配するに足らぬ、直に治つて了ふ」といふ風に軽く言ひ放つと、此の醫士は診誤つてゐる、斯んな醫士には診て貰ひたく無いと云ふ念慮を起させることがある。故に斯る患者には『少し重いけれど、治療と養生が行き届けば追々に癒るから心配するには及ばぬと云ふやうに慰めるが宜い。それから又非常な重病者に對しては勿論重病ではあるが、長い時日の中には段々回復

する見込みがあるといふやうに告げて慰さめ、場合に依ては謙誠の言葉をも交へて、暗々裡に病氣の憂ふるに足らざる事を悟らせるも亦一法である。兎に角病者に對しては何處へまでも同情あり、眞實である事は最も宜い暗示である。次に病人は醫士に對し、色々と病の事を聞きたがるものだが、これは病理の智識を得んとする念慮も幾分あるとは云ふもの、實は其れよりも寧ろ醫士より治癒すること疑ひ無いとの慰安を得たいのだ。であるから患者が病の事を質問したならば、其の大意は説明し、兎も角其の病氣の癒るべき事を能く慰安するが、第一の基礎である。それから又、醫士は教育有る者と、教育無き者とに對し、同一の答へ振りでは宜しく無い場合がある。例へば教育のある者は心臓瓣膜病とか或は脊髄癆とかの如きは不治の病であることを知つてゐる。然るに此の患者に對し「心臓瓣膜病乃至は脊髄癆が直ぐに全治するから何等の心配はありません」と言つた所で、決して信するもので無い。されば斯う云ふ人に對しては「これは根治せぬ病氣ではあるが、生命に關する病氣で無く、治療及び攝生が宜しければ、七十歳乃至八十歳までも普通の

患者の年齢
上に於ける
注意

業務を執つて世を送つた人が幾らもある、氣を落さずに養生しなさい」といふやうに例を擧げて説明すれば大に慰められて而も其の醫士を信頼するものである。けれども教育の無い人に對し、縱令其の患者が心臓瓣膜病乃至は脊髄癆は不治症であると前醫に告げられてゐるにしても、「矢張不治症です」と答へたならば、其の患者は尙一層落胆の度を重ね、大に死期を早めて了ふものだ。故に斯様な人に向つては「然ういふやうに解釋する醫士もあるが、又全治したといふ報告もある。予は大に其の報告に賛成する、併し治つても不養生であると再發し易いものだ」といふ位に答へて置くのが所謂釋迦も方便で、醫士たる者も時に依ては權道を用ひねばならぬこともある。併し此の權道は決して不正な心からでは無い、要は何事も誠實を以て患者を信頼せしめれば可いのである。次に患者の年齢に就いても大いに注意せねばならぬ事がある。乃ち兒供に對しては前に述べた通り臆せぬやうに、且つ懐くやうに取り扱はねばならぬし、少者壯者に對しても亦其れ相當の態度がある。若い者が其様な事位に屈するかといふやうに激勵することも、甚だ必要なる場合が

ある。又老人に對しては能く老人の心理を心得てゐて老人をして其の醫士を信用せしめるやうに導かねばならぬ。老人は口では「我も年老いたから何時死ぬかも知れぬ、又何時死んでも惜しくは無い」といふやうな淋しい事を云ふのが癖である。けれども其の實は如何に年老いても死にたくは無い、所謂「冷飯喰へても娑婆に居りたい」で、非常な悲境に居て、眞に此の世を味氣無く思ふ者ならいざ知らず、大抵の者は一年でも生き延びたいと思つてゐるのだ。但し若い者とは違ひ、多少心細く思ふから、其の心細さを紛はさんがために其の健康時には達者自慢をするものだ。此の精神作用を醫士たる者は心得てゐて「御年よりは若く見える」とか、或は「容貌は兎も角も其の身體の組織が尙々若やかな所がある」といふ様に云へば、心細く思つてゐる老人も大に嬉しく思ふのみならず、これが爲めに元氣が付き、其の病氣が治り易く、且又其の醫士を懐かしく思ひ、兩々相待つて甚だ良結果を來すものだ。然るに「貴老の病氣は若い者なら直に治るのですが、何しろ御年が御年ですからなア」と己れの療治の下手なのを棚に上げて、老人故に治り難いといふに至

つては、益、老人をして心細がらしめ、益、老人を弱らせるのである、慎しむねばならぬ。次に女に對しては又女の心理作用を知つてをらねばならぬ。女が慢性の病氣に罹ると、其の肉體上の苦痛よりも寧ろ其の夫や舅姑及び其の他の家族が己れに冷淡なる態度を非常に氣にするものである。故に左程で無い病氣でも之れが爲めに治り難いことの往々あるものなれば、醫士はこれに注意し、家族に對しては「何うか親切にして上げて下さい」と、或は間接に又直接に勸告するが肝要である。然うすると其の婦人が大に慰安を得るのみならず其の醫士を懐かしく思ふの結果、信仰心をも増し、病氣の治癒上に於て大なる良効を齎すものである。

次に醫士は病人の周囲の事情を考へねばならぬ。乃ち家族の關係から、貧富の度合等を察し、病者の出來能ふ範圍内に於て、療法なり養生法なりを斟酌す可きである。今家族の關係に就いて例を舉ると、其の病人が先妻の子であるとか、或は一度嫁して離婚せられてゐる者であるとか、或は又孤獨で叔父なり叔母なりの家に養はれてゐるとかの如き者であると、患者は言ふに言は

六〇
れの苦勞のあるものだ。斯る患者を診療する場合には大に同情を寄せて慰安の道を講じて遣らねばならぬ。さりながら人情は妙なもので、逆待を受けてる者を真向から大切にせよと其の家族に勸むれば、却つて反抗心を増し、益、病者の爲にならぬのみならず、其の醫士をも惡み、折角同情を寄せたること、が仇となつて尙一層病者の困る例が世には澤山ある。故にこれ等の事も能く考へて臨機應變の處置を取るが肝要だ。要するに同情を以て接すれば何人か我に和せざらんやだ。然るに世にはこれと反對に甚だ卑しむ可き幫間的の根性を有てる醫士があり、其の憐れむ可き逆境の人に同情せず、却つて逆待をしてゐる者に與するに至つては鬼と言はうか蛇と言はうか、恐しとも恐し。次に貧富の度合が病に關係あるは言ふまでも無い。例へば肺結核に罹つたとせんか、本病は實に財布の重さと逆比例をなすもので、即ち財布が重ければ病が軽くなり、財布が軽ければ病が重くなるといふ通り、富有の身であれば、醫療も十分に受けられ、理想の場所に轉地することも出来、滋養物も自由に攝られるのみならず、其の職業を休んで長い年月を保養してゐても差支ない

六一
譯であるが、之れと反對に貧苦の人であると、醫藥や滋養物をも十分得られぬのみで無く、患者が戸主であると、長い年月職業を休むために家族も路頭に迷ふやうになるから、肉體上の苦痛よりも寧ろ精神上の苦痛は一層である。斯ういふ譯であるから富有なる者は病氣の治癒が速く、貧困なる者は治療が遅きを免れぬ。然れども肥胖病や或る胃病の如きは金錢の不自由無き爲めに食ひ且つ飲み、而も不運動になり勝ちであるから、富有なる者よりも貧困者の方が治癒し易いものである。醫士たる者は是等の點を承知してをらねばならぬし、又養生法を告げるにしても患者の行ひ能ふ範圍に於てせねばならぬ例へば『熱海の温泉場へでも行き、悠悠湯治しながら、種々の滋養食物を攝りなさい』と勸めた所で、僅かの俸給を得てゐる小官吏であるとすれば、到底出来ない相談であるのに、斯う醫士より言はれた事が氣になり、行はんとすれば能はず、行はざらんとすれば病は治らぬのだらうかと、徒らに精神上の苦痛を増し、治る可き病も治らぬやうになることがある。斯る場合には醫士の一言甚だ罪ありと謂はねばならぬ。然れば貧富の度を察するといふ事は

特筆大書す可き注意である。次に醫士たる者は病人の趣味を知つて、其の趣味を利用せねばならぬ。元來病者は其の病氣の事のみ思つてゐるものであるから、可成これを思はしめぬやうに導くのが即て速く治癒するの道である。これには病者をして其の人の趣味に其の精神を傾けしむれば其れだけ病者が軽くなる道理だ。例へば音楽を好む患者であつたら、時々音楽を奏して聞かせるとか、花木を楽しむ患者であつたら枕許に盆栽を並べるとかといふが如きは勿論であるし、讀書を以て何より樂しとせる者には、良書を探んで一定の時間に讀ましむるが如きも甚だ鬱散の道となることがある。これに就き素人に醫書を讀ますは甚だ宜しく無いと述べてる醫士もあるが、成程、不治の病に罹つてゐる患者に、其章を讀ましむれば甚だ宜しく無いけれど、治す可き結核症を不治であると迷信してゐるやうな患者に醫書を讀ましめて、不治ならざる事を確信せしめるが如きは、其の効や莫大と謂はねばならぬ。話し變つて音楽の嫌ひな人に音楽を聞かせんとしたり、花木に何の趣味も無い者に盆栽を並べたりした所で、益々病人を精神的に害することになる。何事も杓子

定規を以て律す可きものではない。終りに患者に與ふる藥劑に就いて大に辯じておかねばならぬ。

藥劑を與ふる注意

醫士が患者に藥劑を與へる場合には其の藥劑の副作用を豫め告げておかねばならぬ。假令へばサリチール酸曹達を配合せる物を與へるとせんか、『此の藥は貴方の病の疼痛を去り且つ熱を解く爲めに差上げるのですが、或は服むと悪心くなるかも知れず、又時に依れば嘔氣を催すかも知れませんが、併し人に依ては然らぬかも知れません』と告げておく如きを云ふ。然るに何事も告げずに置き、聽て患者が其の藥劑を服みムカ〜と嘔吐を催して來り、或は嘔いたりするやうな事があると、斯んな藥が効くのだらうかと疑念を起し、其の醫士を信せぬ種になり、後に辯明しても容易に信せぬものである。又前述の如く人に依つては何の副作用も來さぬ者があるから、此の事を告げて置かないと、患者が若し悪心もならず、嘔氣も無いとすれば、これア變だ、間違つた藥を與れたのでは無からうかと同じく疑心を抱くものだ。故に是等の事は落ち無く詳かに告げて置く事は、病人に良い暗示を與へるもので

ある。

次に心得可きは診察料や薬價の點である。世には診察料及び薬價を富者より高く徴收し、貧者には大いに減じ、若くは無代で施してゐる者もあるが、之れは大いに考へ物だ。呉服物とか茶碗皿鉢とかの如き物ならば一見して其の價格を知られるから、廉いのを徳とするかも知らねど、薬は素人に了る物で無い、換言すれば手の中の丸薬であるから普通の醫士が徴收する價格より低減すれば、下等な薬だから廉いのだといふ觀念を與へ、効く可き薬も効かぬやうになるは心身の關係上争はれぬ事實である。斯くて其の薬を下等だと思ふ聯想上から又其の醫士の技挿をも下等視するに至るものだ。昔の小説や傳記などに、親の病氣に人參を與へんが爲め其の娘が大切な貞操を破つて花柳の巷に身を賣り、其の代を以て高價なる人參劑を得たり、或は名醫の診療を受けしめたりして、爲めに普通の醫士が薬匙を投げた病氣が快復したと云ふ話が澤山ある。元來人參は今日になつて實驗研究して見ると、爾く起死回生の効力ある物では斷然無い。起死回生の効力が毫も無いのみならず、人參

の主効だとする神経系統の病に對しても、これより優る薬物は澤山ある。縱又人參が幾分か神経系統の病に効があるにしても内地産では駄目で、即ち朝鮮などの山に生じ而も數百年を経た物程効力があり、従つて價も高いのである。所で昔日本に舶來したのは果して更に年數を経た物であつたかも知れない。然るに斯る効力の覺束無い薬を服して或る種の病に効があつたといふのは娘を苦海にまで身を賣つて得たる尊い薬だと思つたからである。即ち心身の關係上からして良効があつたのだ。斯ういふ譯であるから、患者が貧困者であるからとて、薬價を非常に低減したり、若くは施療するが如きは大切な暗示を無にし、癒るべき病も癒らぬやうになる、折角の慈悲心も甲斐なき事になりはせぬだらうか。これと同じ道理で診察料とても之を大に廉にするのは自分の技挿や品位を自ら低くすると謂はねばならぬ。右の次第であるから、中産以上の者に對しては言ふに及ばず中産以下の者に對しても相當の診察料及び薬價を徴收して醫士の威嚴を保たねばならぬ。「醫は仁術なり」との古言は薬價や診察料を廉にし若くは施せといふ意味では無くて、職務に忠

實且つ病者に同情の涙が有つて欲しいといふ意味である。去りながら患者が如何にしても診察料及び薬價を拂ふことの出来ぬ者がある、之を救助して遣りたいと思ふならば、其の患者の親類なり知己なりの者に、豫じめ其の診察料なり薬價なりを渡しおき、其等の者が其の患者を助けるといふやうにし、患者からは矢張徴收した方が宜い。然らずんば今貸し與へて置くが全快後は何等かの方法を以て徴收するといふやうにして置く可きだ。因縁の無い者に施すは却つて良い暗示を失ふの基である。之にて形式的暗示に關する事は、間接と直接とを問はず略述べ終つたが、今一つ醫士の心得となる可き事及び患者の知つてをらねばならぬ點を話しておかう。

前段述べた通り醫士は相當の威嚴を保たねばならぬけれど、他醫を誹謗して自家を誇張し、以て患者の信用を得んとするは策の最も拙劣なるものだ。縱令直接に誹謗せざるも前醫が苦心して治療したる後に診察し、「これは手後れになつてゐます」といふが如きは暗々裡に前醫を侮辱することの大なるものだ。斯ういふ醫士は其の品性が劣等であるから、断然治療を謝絶するが可

い。又一患者を二三の醫士が對診する場合に於ても、互に謙讓を旨とし、患者の前で議論する如きことを慎しまねばならぬ。又患者や家族も此の點に注意し、可成病室より隔つた場所で相談して貰ふが宜い。元來數多の醫士に毎日診察を受けるといふ事は所謂「船頭多くて船山に上る」の道理、利少くして害の伴ふ場合が多い。貴顯紳縉の病氣に往々斯ういふ傾きが有つて、比較的良結果の少いものだ。長々と暗示に就いて辯じ、尙又枝葉にまで亘つたが、以下少しく暗示の性質に就いて述べよう。

前章の言語暗示にしても、又形式的暗示にしても、皆何れも甲者が乙者に與ふる暗示であつて、之を他人暗示と名づく。之に反し他より暗示を受けずに、唯自分が自分に暗示を與ふるを自己暗示と云ふ。即ち前者は他動的暗示で、後者は自動的暗示である。他動的暗示の例は長々と辯じたから略し、自動的暗示即ち自己暗示の例を舉れば「明朝は四時に起きねばならぬ、必ず其の時間に起きて見せる」と枕を四つ打つて寝る、眼覺し時計が無くて其の時間に整然と眼が覺める。又「大酒をするといふ事は心身の爲めに甚だ害が

ある、之を止め乃至は節せられぬといふは生地無しだ、我は必ず止め或は大に節して見せる』との信念が強ければ必ず思ふ通りになるやうなものだ。病氣の事もこれと同じで、今茲に長い時間勉強してゐた爲めに多少頭が重くなつた場合に「嗚呼我の頭は重い、我は臆病になつたのだ」との自己暗示を興ふれば矢張腦充血の如くになつて来るが、此の時若し「此の頭の重くなつたのは長い時間勉強したからだ、暫時休めば治るに違ひ無い」との確信があれば、即ち頭腦は軽くなるが常だ。然れば醫士たる者は他人暗示を興へると同時に、患者自身をして自己暗示をも起さしめるやう導けば兩々相待つて、他人暗示のみよりも一層効果あるは言ふまでも無い。次に、

何種の暗示にしても屢之を繰り返す毎に益容易に行はれるものだ。即ち他人暗示にしても自己暗示にしても、一度より二度、二度より三度と度重ねれば、其の信念の度が強くなり、従つて其の暗示が益効力を奏するに至る、之を名づけて習慣的暗示と云ふ。曾にこれは病氣の事のみならず、百般の事項は皆此の習慣的暗示に支配せられるものなれば、善良なる習慣を養成せねばならぬ。

又一定の時期と一定の場所とに依り、其の時期或は場所が暗示の種になることがある。之を名づけて時期的暗示或は場所的暗示と名づく。例へば昨年の盛夏に齒痛を病んだとすると、今年の盛夏にも多少の齒痛を來すが如きは時期的暗示で、中には暗示ならざるも眞に時候と關係して起る病も勿論あるが、斯る病にしても同じく暗示が興つて之を助けるものだ。彼の慢性レウマチスの如きは梅雨の候に罹り易く、而も根治し難い病であるから、次の年の梅雨の候に入ると再發し易いと言ふまでも無いけれど、一つは梅雨の候に起つたといふ暗示が之を助けて病を重らすことがある。故に醫士は斯ういふ事も心得てゐて、否定暗示を興へねばならぬ事も往々ある。次に場所的暗示の例を舉ると、某地の温泉場で或る病が治つたとすると、其の病の再發したる場合に、又其の地に行くと良結果があるやうなものだ。著者の知人に此の時期的暗示と場所的暗示とを兼ねてゐる例がある。乃ち其の知人は或る年の夏下肢が痲痺し、醫士に診察を受けたれば、脚氣病だとの診断。所で脚氣は轉地

に限ると他人より聴かされ、伊勢の山田に轉地し、一週間程養生したれば兎に角治つた。所が明年の夏になると又々下肢が痲痺して來た。で又伊勢の山田に行つたれば二三日の中に治つて了つた。其の又明年の夏も同じく其の徴候を來した、されど或る事情の爲めに行くことが出來ぬ、止むを得ず東京にゐて針灸其の他の治療を受けたが良効が無い。所で故青山博士の診察を受ければ「これは脚氣では無い、然う思ふからだ、健康無事である。察するに初年の痲痺は長時間立つてゐた揚句で無つたか」と言はれ、考へて見ると、其れに相違が無い。斯くて服薬を止め、一兩日静養してゐたれば、恰かも夢の覺めたるが如く、痲痺は消え失せて了つたのである。之れは時期が暗示を與へ、又場所が暗示を與へたのだが最後に青山博士の明確なる診断に依て、暗々裡に良い暗示を受けたのである。又習慣的暗示と時期的暗示とを兼ねたる例を舉れば、知人某は常に便祕に苦しんでゐるから、著者告げて曰く「朝起るや必ず上厠し、而して便意が有つても無くても努張つて便通をなすやうにし、他の時に便意が有つても強ひて忍へ給へ、これを毎朝實行すれば必ず規

則的に便通が利くなる云々」某は此の通り實行したれば遂に早朝一回宛便通があるやうになつた。これは著者自身も二十年來自己的暗示を以て、習慣的暗示時期的暗示を兼ね、而も便通が終ると直に入湯することも習慣になつてゐる。所が旅行先などで朝湯の無い所で宿り、入湯することが出來ぬと、其の日一日不愉快に暮さねばならぬのには甚だ困つてゐる。これも習慣的暗示に捕はれてゐるのであらう。

斯くて暗示は他人的と自己的とを問はず、又何種の暗示に限らず、三つの要素がある。乃ち(一)道理に適合してゐる事。(二)道徳に背かぬ事。(三)信念の強き事である。此の三つは互に緻密なる關係を有してゐるもので、此の三つの中一つでも缺けてゐたら、暗示は成り立つものではない。換言すれば施す者も施さるゝ者も、其の事柄が理論に一致してゐて、而も俯仰天地に對して愧ぢず、従つて成し行はれるに相違無いとの信念が強く無ればならぬのだ。彼の催眠術にしても、施さるゝ者は言ふに及ばず、施す者も一點の疑念があるとは行はれ難い。徳行の備はれる大僧正が惡漢に對して不動の金縛りは出來能ふ

七二
かも知らねど、悪漢が如何に催眠術を心得てゐたとて悪事を働く爲めに正義の人に其の催眠術を施す譯には行かぬ。これ其の三要素が缺けてゐるからである。尙詳しく事は後段の催眠術の章で説かう。

注意の話

有爲的注意
と無意的注意

注意とは或る事物に對し、精神を一點に集める所の心理作用を云ふのである。これに無意的注意と有意的注意とがある。無意的注意とは五官の中何れか、眞に意識を用ひ無いで、或る事物に對してゐる状態を云ひ、有意的注意とは確然たる意識を以て或る事物に對してゐるを云ふ。例へば風がフューと音して吹き來り、我が身體に觸れた折、フューといふ音を聞き、觸れてゐることも感じてゐるけれど、無意識的に聞き、無意識的に感じてゐるので、其の物に對し注意はしたが、其の物の何たる事などには一向意識を用ひぬ場合には之を無意的注意といふのだ。尙又例を擧げて言へば、街路を通つてゐる際、ドンドコドンといふ音が聞える、其れを唯聞えると思つてゐる間は無意的注意なれども、「偕何の音だらう、あれは屹度太鼓と三味線で嘶し立てゝるのに相違無い」と、其の音の方を見れば人が群集してゐる。尙其の方に進んで何があるのだと之を究めんとする状態は益々有意的注意の度を高めて行くのだ。斯くて愈々近

づいたれば、輕業師が輕業をして居る。之れは面白いと益興に乗じ、我が用務も打ち忘れ、輕業に夢中になつて居る中に、懷中物を掏り取られてゐることも知らぬやうになるは、注意が非常に深くなつたのである。乃で此の有意的注意の淺い深いは何ういふやうに血液と關係するかと云ふに、物を見る時、眼球の「レンズ」が見る物の遠近に應じて調節する如き工合である。乃ち注意するに當り、其の注意の度が深ければ、血液も亦從つて多く頭腦に集注する、注意の度が淺ければ血液の集注が少い。故に又血液の集注に故障があると、專心注意することが出来難くなるものである。故障といふと病氣のやうだが、病氣で無くても、血液が身體の他部分に多く注がれて居る時、例へば大に手足を運動せしめてゐたとか、或は食事をしたとかの如き場合には、血液が其の手足なり消化器なりに多く注いで居るから、此の時に注意の度を深くせんとしても甚だ出来難い。若し其の時注意の度を深くしたとすれば衛生上に大害がある。故に甲人が乙人に注意を深くせしめんとするにも、又己れ自身で注意を集注せんとするにも、運動或は食事の直後を避け、少くも三十分時

を経ねばならぬ。従つて後段に述べる所の催眠術を施すにしても斯ういふ事を心得てをらねばならぬ。

次に注意に淺い深いがあるのみで無く、廣い狭いもある。例へば大政事家が、國家の事に注意周到であるが如きは其の注意が廣いので、發明家が何か一つの事を發明せんとして寢食を忘れ、傍に人あつて何か言つてゐても耳にも入れず、唯發明の事にのみ一心不亂であるといふが如きは注意が狭くて深いのである。乃で其の廣いといふは畢竟深い注意を色々に分配するのだ。大政事家と言つて見ると、一國を治めるといふ事に注意を傾けて居るには相違無いけれど、それに就いては宗教の事にも教育の事にも、軍事にも、外交にも乃至は貿易・鐵道・物價の調節其他人事百般の事に注意を分配し、而して國家を能く料理するのだ。所が發明家の方は注意を各方面に分配せず、只管其の發明の事にのみ注意し、其の事柄以外の物は五官に觸れぬやうにし、而して邪念を去るやうにしてをらねばならぬ。發明家といふ譯では無いが、故田中醫學博士は解剖學に熱中し、而して斯學の爲めに注意を集注してゐたる際に日

清戦争があつた。然れど博士は其の起つた原因から、戦争最中の事及び平和を告げるに至つた事まで何も知らずにゐた。日清戦争と云へば誰でも知つてゐる通り、明治廿七八年の戦役であつて、其の間は一ケ年以上を経るが、博士は唯解剖學の研究に没頭し、新聞も見ねば人と談話も交へず、傍らの人々が戦争の話をしてゐても聞えもせず、耳に入れようとせぬ。時稀に道で祝勝旗の翻つてるのを見て、國旗が擧つてる位に感じたらうけれど、前段に述べたる無意的注意に過ぎなかつたのだ。即ち歩きながらも、食事をしながらも、或は上廁しながらも解剖學以外には注意を分配し無かつた。斯くて自分が豫定の研究が一段落を告げてから、漸く家人や朋友などより日清戦争の始末を耳にし、大に驚いたこのことだ。之は實に注意を最も狭く且つ深くした實例で、一面から見ると如何にも迂遠な人のやうであるけれど、又一面には實に尊い所がある。學生の如きに至つては斯ういう趣きが有つて欲しいものだ。學問ばかりで無く、何の藝術でも人に勝れた者は皆斯る深い注意を集中した結果である。今の本因坊田村九段が、あれまでに技插拔群になつたのは

嘗て辰州の或る寺に籠り、數年間世と相離れ、古人の碁經に就いて晝夜に碁々と研鑽し大に得る所あつて東京に出で、前の本因坊と戦つてみれば其の腕前の進歩實に驚くべきもので、其の社會からは鬼田村と緯名せられ、遂に本因坊の月桂冠を得るに至つた。これ取も直さず注意を狭く且つ深くしたからである。

醫士が患者に催眠術を施して病を癒さうとする折は、患者をして唯醫士の施術にのみ注意を集中せしめ、即ち患者の注意は醫士の與へる暗示にのみ傾いてゐて、其の間は何等思はず何等考へず、一心不亂に醫士を信仰し、傍らに人あつて大聲を發してゐても更に聞えず、何んな臭氣があつても香はず、縦令身體に觸れる者があつても感せず、管に外界の刺戟を感せぬのみで無く、己れの身體に痛い部分があつても其の痛さを忘れ、炎る場所があつても感せず、其の他何んな苦痛も一向に無感覺である。又勿論精神的の病状例へば邪念や脅迫心或は鬱憂の状なども悉く打ち忘れ、只管醫士の暗示のみに傾注してゐる。故に醫學的催眠術は一方から言ふと病者をして病の事を忘れしむる

法である。尙又是等の事に就いては催眠術の章で詳しく説かう。

七八

錯覺と幻覺

錯覺幻覺の
説明

五官即ち視覺(眼)聴覺(耳)味覺(舌)嗅覺(鼻)及び觸覺(皮膚)が成る物を間違つて感覺するを錯覺と云ひ、同じく五官が無い物を有るが如くに感覺するを幻覺といふ。例を擧げて言へば、船に乗つてゐて、岸の走るが如くに見えるは眼の錯覺。水禽の飛ぶ音を敵軍の襲來と聞いて逃げた平軍は耳の錯覺。クロロフォルムや麝香を嘗めて味ある如く感ずるは舌の錯覺兼幻覺である。何となれば是等の物は香が高いから味ある如く感ずるので、其の實何の味も無い物であるからだ。炭酸瓦斯の多く籠れる室に長い時間居ると何の臭氣もせぬは鼻の錯覺。冷い重錘は暖い重錘よりも重いやうに感ずるは觸覺筋覺も兼ねるの錯覺であるやうなものだ。次に幻覺の例を擧ると、或る田舎の素封家が妻を伴れて東京見物に出で、二三ヶ月も滞在して緩くり遊ぼうと、麴町區の番町で、築山泉水もある一寸立派な家を借り、下婢を雇つて氣樂に暮してゐた。聞かぬ中は何の事も無かつたが、此處は化物屋敷だと聞いてからは何となく物凄

錯覺と幻覺

七九

かつた。所が郷里より何か田地の事で、尋ねて遣した書き物に就き、或る夜妻や下婢が寢所に入つてから獨り一室に籠り、筆を執りつゝ調べてゐたれば、二時乃至三時昔の所謂丑滿時に腥い風が颯と吹いて来て皮膚に觸れたと感した、と同時に椽側の障子が闇夜であるにも拘らず、明月の照すが如くに明るくなり、間もなく散し髪ちりかみの婦人の姿がアリ／＼と其の障子に映り、而して其の長い髪毛をバラリ／＼と障子の紙に音させて歩くを視、怕氣立つたれど、勇氣を鼓して、短刀提げ、其の後を追つかけたが、其の婦人の姿は忽ちに消え失せた。で思ふには嫉妬した女の靈が残つてるといふのだから、能く言ひ聽かせ、御念佛を唱へさせて遣りたいものだ、其の翌夜同じ刻限に、其の婦人を待ち受けてゐると、同じく腥い風が前夜よりも一層身に沁みたと思ふ一刹那、天地も崩れんばかりの轟々たる音——と共に同じく明るくなつて、長い散し髪の婦人が、矢張バラリ／＼を音させて椽側を通る。併し餘り大きな音に腰を抜かした素封家は御念佛を授ける勇氣もあらばこそ、其の儘氣絶せるが如くに伏臥して了つた。其の翌夜も多少趣きを異にするけれど散し髪の

姿は執念くも表はれる。是に於て是非共他へ引越さんと準備してゐる云々の話を聞き、或る文學博士井上圓了氏であつたと記憶するが尋ね行き、一人其の一室に閉ぢ籠られたが何の事もない。其の翌夜又其の素封家と共に其の室に談話をしながら例の丑滿時になると、素封家はキヤ／＼と叫んで博士に抱き附く、其の音に驚いて妻君も下婢も車夫恐しい爲めに臨時雇つてあつた腕力自慢の男も一同が飛んで來た。乃で博士は何故叫んだかと問へば「彼の音が先生に聞えませんでしたか、又あの姿が見えませんか」と戰慄してゐる。是に於て博士は精神作用の説明をなし、天狗も幽靈もあるもので無い、従つて怨靈なども自分が自分の心で作るのだと、色々例を引いて言ひ聞かせ、漸く迷ひの心を晴さしめたといふは、明治廿二三年頃であつたと記憶するの各新聞に書き立てた興味ある怪談であつた。此の素封家は舌の幻覺を除くの外は、四官の幻覺を悉く一人で兼ねてゐる。即ち腥く感じたは鼻の幻覺、其の腥い風が颯と觸れたやうに感じたは皮膚の幻覺、轟々たる音響を聞いたは耳の幻覺、散し髪の婦人を見たは眼の幻覺である。斯くの如くに人間の五官は幻覺や錯

覺の往々あるものだから、デカールといふ哲學者は我等の五官が感ずる物は果して有るのか、果して眞實か、實に疑はしいものだ。が併し思想だけは信するに足る。The thought is truth (思想は眞理である)と言つた位である。然れど斯る幽玄な哲學論は姑く措き、兎に角我等の五官は錯覺幻覺の有るもので、殊に心の中に或る觀念を浮べることが強いと、其の錯覺幻覺が甚しくなるものである。

催眠術に於ては此の錯覺幻覺を利用する。乃ち施術者は被術者に對して、或る一物を其の實質と異つた事を暗示すれば、矢張然うだと錯覺し、更に無い物を有ると暗示すれば、同じく有ると幻覺する。僧侶が地獄極樂の状態を見せたり、昔の妖術家が天地も震動する様な落雷の光景を見せたり聞かせたりしたこの話を言ひ傳へてゐるが、これは取も直さず其の信者は不知不識催眠術を施され、斯る幻覺を起したものである。

醫學的催眠術に於ても、此の錯覺幻覺を利用することが往々ある。醫士は患者に一杯の着色水を服ましめ、『それ今貴方の腰が暖かくなつて來たでせう、

これで遺尿は治ります』と言へば何等の温暖法を施さぬのに、暖かいと感じ『然うです暖かくなりました』と答へ、其の後遺尿が眞に治つた例もあるし、又或るヒステリー患者が咽喉に蛔蟲があると信じてるに對し、醫士が催眠術を施し、然る後一碗の水を與へ、『此の薬は少し苦いですが、之を服むと蛔蟲を間も無く嘔いて了ひます』と其の水を飲ましむれば矢張苦く感じて飲み、即て嘔氣を催して來る、乃でコップの如き物に蛔蟲に似たる形の物を入れ置き、さア之に嘔き給へと言つて吐かしめ、『其れ此の通り蛔蟲が出ました』と言へば患者は大に喜んで其の後は蛔蟲のあるを感せぬやうになつた實例もある。是等は錯覺幻覺を巧みに應用したのだ。此の外種々の病に對し、此の錯覺幻覺を臨機應變に利用して効果を奏することが往々ある。

惡癖矯正に對しても同じく催眠術を施し、而して此の錯覺幻覺を利用することは珍らしく無い。但し其の惡癖が普通の教訓で矯正出来るものならば、斯る催眠術を施すにも及ばず、従つて錯覺幻覺を利用する必要も無いは勿論である。又惡癖のみで無く、疾病にしても催眠術を施し、其の暗示を與へ

る際、其の暗示が合理的であつて、然も其れが良効を奏するなどは、故らに錯覺幻覺を起さしめざるも可い。要は唯臨機應變に應用す可きである。

現在の意識と潜在的意識

現在の意識
と潜在的意識
の説明

我等が明確完全に意識する精神作業を現在の意識と云ひ、我等が左程明瞭なる意識を伴はぬ精神作業を潜在的意識と云ふ。所が我等の精神界には無数の觀念が有るけれど、此の現在の意識は極めて少く、即ち其の残りの多くは悉く潜在的意識である。乃で初め無意識的の觀念が精神内に入つて來ると、直に精神の幽深部に入り、茲に其の記憶像を存して置くものと、初の精神界に入り來つた時には意識的のものであつたれど、其の後に及び精神の幽深部に潜み入るものとある。抑、記憶像は精神的に於て一たび意識に上り、十分明確になつても、一定時の間は深く幽深部に潜んでゐて、外界から新しい印象が意識中に入つて來ると、これと關係の近い記憶像が直にこの幽深部から出で來り、新印象と連合して明確なる意識的觀念をなすが、一旦其の役目を終れば又幽深部に潜むものである。斯くて現在の意識は何時でも我が記憶に喚び起されるけれど、潜在的意識は何等の新印象無くて、我より之を獨立的に

記憶に喚び起すことは出来難い。所が催眠術を施すと、之を獨立再生せしめることが出来るもので、斯くの如き場合に在つては意識が分裂したと言はれるのである。此の意識分裂は即ち潜在的意識であつて、時間と空間との制限を受けず、醒覺時の推理状態に背いた精神状態を呈し、現在の意識とは全く異つた精神状態に陥るものである。即ち我等が夢を見る最中も此の状態である。

話し變り、原因の判明せざる神経系統の病氣に、催眠術を施すと、能く其の原因を知られることがある。例へば幼少な折に或る精神的打撃を受け、爾來之を忘れてをり、丁年以上になつてから、神経衰弱とかヒステリーとかの如き神経病に罹り、何の原因で有つたか判明せぬ節に、催眠術を施して之を追求すると、其の幼少な折に受けたる精神的打撃の事實を告げ、是に於て其の遠い原因を知るを得、従つて治療上甚だ良い助けとなることがある。これは潜在的意識が獨立に活動するのだ。抑潜在的意識の現在の意識に對する關係は恰かも屬官の長官に於けるが如くで、現在の意識に課せられたる作業

は凡て潜在的意識に於て分擔し、潜在的意識に於ける作業は必ず一度は現在の意識を経て外界に發表せられ、其の作業は直接に現在の意識を煩はすことが無いにしても、兎に角現在の意識の支配を受けぬものは一も無い。所が催眠術状態に於ては潜在的意識が現在の意識を離れ、獨立して活動し、其の作業は現在の意識の支配を経ずに直と發表せられるのだ。尙是等の事は次の催眠術の章で詳しく説明しよう。

催眠術の効果及其の方法

催眠術の定義及び催眠術は何んな者かといふ事は、緒論に於て略述べたから、今茲に再び繰り返す必要は無いが、何ういふ場合に之を應用するかに就き一言説明して掛らう。

抑、我等の脳髓は他人の脳髓より影響を受けるの性質がある。これが取りも直さず暗示を與へられる譯であつて、病に罹ると此の性質が甚しく増して來るものである。所で前にも述べた通り、醫士が患者を治療するに當り、暗示を與へるといふ事は非常に大切であるけれど、暗示を與へても病者の普通状態即ち醒覺時に於ては、病者自己の論理を以て之を判断したり、或は調節したりして、醫士の暗示を妨害し、爲めに其の暗示の効を奏せざることがある。斯る場合には其の病者の觀念を除いて暗示を與へんため、茲に所謂催眠術を施すのだ。乃ち催眠術を施せば病者は何等の抵抗を試みず、眞に服従するものである。換言すれば催眠術を施されると、患者の意志力は大に減り、醒

催眠術を施す可き理由

覺の時とは異り、醫士の暗示に何等の反對觀念が起らぬ。醫士は此の時に乘じて暗示を與へると、其の暗示は其の儘感受して固定し、治療的觀念が病處に聯つて大脳の神経要素に影響し、これより遠心性に末梢の神経を経て、其の病處に好影響を與へるに至るのだ。例へば神経痛とか、或は食慾進まぬとか、或は便秘するとかの如き場合に、催眠術的暗示を以て治療的觀念を與へれば、痛まぬといふ觀念が大脳皮質に抑制的影響を及ぼし、其れより抑制神経に傳はり、痛むといふ觀念の入るを拒むやうになり、又食慾進む或は便秘せぬといふ觀念は同じく大脳皮質に一種の興奮を與へ、其れが分泌神経や腸筋の運動神経を經、遂に胃液の分泌を増し、或は腸の蠕動を起さしめるに至るのである。併しながら催眠術治療のみで全治するは精神作用より起れる病症であつて、器質に損傷ある症には一時的の輕快を覺え、若くは他の治療を幾分補助するに過ぎぬのだ。即ち慢性胃加答兒とか胃潰瘍とかの爲めに、胃痛や食慾不進等の徴候を來せる者に對し、催眠術を施して治療的暗示を與へたとて、或は幾分の時間は輕快を覺えるかも知らねど、催眠術のみを以

催眠術の效果及其の方法

て治す譯には行かぬ、即ち他の理學的治療や化學的治療を施さねば到底全治せしめることは出来ぬのである。

或る醫學博士が胃癌に罹り、長興醫學博士の診療を受けた。所で患者は勿論醫學の智識に富んでる人だから、胃癌は切開して手術せねば到底治るもので無いと承知してゐる。依て長興博士に手術を迫るは無理の無いことだ。所が長興博士の心中には此の胃癌は病勢進んでるから、切開手術の時を失してゐると思つたけれど、其の儘にして服薬し給へといへば、徒らに死期を幾分遅くせよといふに過ぎぬが如くで、患者は承知するもので無い。乃で已むを得ず麻酔劑を施し、萬一の効果を期して切開したるに、案の如く癌腫は大に蔓延してゐて、胃全部を切り除かねばならぬ、即ち手の附けられやうが無い。是に於て何の術も施さず、其の儘切開を續つて置いた。すると患者は麻酔より覺めてから、如何であつたと問うた。長興博士は實を以て答ふるに忍びず、曰く癌腫を切り除いた、これ此の通りだと、他の胃癌患者の切除したる物を示したれば、博士の患者大に喜び、これより當分の中は甚だ爽快を覺え、爾

來の病徴は一時消え失せた。乃で親戚朋友を招き、「予も殆んど全快した、何うか今日は快く飲んで下さい、眞の全快は近き中ですから、其の節は又大いに御馳走致しませう」と色々談笑してゐる。患者の老父母や妻君などは其の事實を知つてゐることゝて、堰き來る涙を飲んで笑つてゐたとは嘸苦い思ひであつたらう。斯くて患者の喜びは束の間、日を経るに従つて元の默阿彌、遂に患者は胃癌では無く唯衰弱の爲めだ位に思つて、歸らぬ旅路に赴いた。これは催眠術では無いけれど、治るといふ強い暗示を受けてゐることは同じ道理である。故に一時的の効果はあるが、器質の損傷は到底治らう筈は無い。催眠術治療の器質損傷に効あるは、これと同じことであると心得れば可いのである。

話は元に戻るやうだが、前章にも述べた通り、催眠術状態に入ると、醒覺時に全く忘れてゐた事や、又醒覺時に無意識に知つた事、夢に在つた事、又前の催眠術状態中に在つた事柄で醒覺時には全く記憶してゐなかつた事などを思ひ出すものであるから、或る人は「催眠術は平時の意識で隠れてゐたる

潜在的意識をば人工的に暴露せしめられるものだ』と言つてゐる。尙一步進んで言ふと、平時には秘密にす可しと誓つてゐる事柄も、催眠術状態に入ると、悉く之を自白することがある。故に之を悪用した不徳者もあるが、醫療上に應用すると一方ならぬ良果を來す場合がある。

或る婦人が嫁いで間もなく、ヒステリー症に罹り、種々治療すれども治らぬ。抑、ヒステリー症は、直接に或は間接に、精神的の打撃が原因となるものなるに、此の婦人は如何なる精神的怪我が原因となつたのかは、何うしても了らぬ。即ち其の婦人は其の良人とは相思の中である、舅姑との間柄も圓滿で、生計の上にも於ても何等心配になることも無く、取も直さず何不自由無き身、又故家方に於ても、其の婦人の氣に懸るやうな事が無い。又生殖器病や其の他の病があつて、婦人の精神を苦しめる事も斷然無い。然るに斯く醫療の効果が無い所から、他人に勸められて或る催眠術者に治療を乞ひ、其の施術中に自白した事柄が間接に否舊い原因であることが了つた。其れは斯うだ。此の婦人僅かに十三歳の時に、丁年以上の男子に強迫的の姦淫を受けた、即

ち殆ど強姦せられた。然れど體格が相當に發達してゐたから、肉體上に何等の害も無く、斯くて爾來勉學其の他の藝事に熱心してをり、殆ど其の事を念頭に浮べずして今日に至つた。されども其の當時には大なる精神上の打撃であつた爲めに、今や正しい生殖の道を遂げるに至り、其れが動機となつて、其の追想は恰かも今新たに起つた如く、烈しく精神を刺戟して遂に本症に罹つたのだとの斷定を下された。所で幸に此の施術者は德行の人であつた所から、種々訓戒的並びに慰安的の暗示を與へ、短時日の中に大なる好成績を得たのである。醫士も斯ういふやうに利用すれば、物質的治療のみに依頼するよりも、莫大なる利益を與へられるのである。乃で何ういふ風にして其の病原的事情を語らしめるか等の方法は、以下催眠術の方法を説くと共に記すことにせう。

催眠術の感受性は人に依て頗る差等のあるもので、直に感受する者もあれば又容易に感受せぬ者もあり、甚しきは全く感受せぬ者もある。之れに就き諸家の調査せる所に依ると、感受性のある者は八十%乃至九十%であつて、

十%乃至二十%は全く感受せぬものである。斯くて愚鈍なる者は感受し難く、伶俐なる者は感受し易い。それで剛情なる者は感受し難く、和順で服従の性に富んだる人程感受し易い。故に兵士の如く常に上官に服従するを義務としてゐる者には施し易いものだ。次に被術者が施術者よりも智識階級が上だと思ひ、而も其の施術者を輕蔑してゐる場合には甚だ施し難く、一般に教育程度の高い者殊に形而上の學問に耽つてゐる人には施し難いもので、教育程度低い者には施し易い。これに就き反駁論者もあるけれど、其の論者の説く所に依ても、施術者を尊信してゐぬ様な者には施し難いと言つてゐる。されば此の反駁は甚だ矛盾せるものと謂はねばならぬ。要するに施術者を偉い人だと信頼してゐる者程感受し易く、而して施術者を神祕的の力を有せる人の如くに信じてをれば最も効果があるのだ。次に男女に依て彼是言ふ人もあるが、唯女子は一般に男子よりも教育程度の低い者が多いからのも、男女の性其の物だけに依ては感受の上に差等は無い。次に年齢に就いて言ふと、一歳以下の小兒は殆ど羅らず、高年者は大に羅り難く、少年青年は最も羅り易く、

壯年は大抵中等度である。これ一歳以下の小兒は愚鈍者と同じく、施術者を信する念慮が無いからであらうし、少年青年は施術者を尊敬する觀念が深いからであらう。高年者に至つては猜疑の念が深くなるのと、施術者を彼の青二才めがといふが如くに輕んずる傾きがあるからだ。故に高年者に對しては老人の施術者程効力があるとのことである。催眠術家の中には『抵抗したり輕蔑したりしても一向に差支無い、寧ろ斯る者には却つて施し易い』など、言ふ人もあるが、これは恐らく催眠術其の物を、より以上に信せしめん目的でもあらうし、又他に何か爲めにする所があつての、言はゞ廣告的の言であらう。斯くて其の抵抗したり或は輕蔑した者が、『其の様に言はるゝならば一つ我に施して御覽なさい』と、いよゝゝ施術者の前に出で、施術者の命ずるが如き態度を取り、果して普通の人程——寧ろ普通の人以上に感受したとせば、これ口で何と言つてゐても、其の施術者の前に出たと同時に、信仰の念を生じたのである。然るに口にも心にも輕侮の念を起してゐる者としたならば、決して感受す可きもので無い。故に催眠術を施すに際しては左の要件がある。

- (一)被術者が催眠術其物を深く信じてをる可きは勿論、之を紹介する人も催眠術を信じてをらねばならぬ。紹介する人が「我は催眠術を信せぬけれど、君は一つ試して見給へ、就いては何某に紹介して上げませう」といふが如くで、來つたやうな人は自然と疑念が混じてゐるから其の成績が悪い。
- (二)催眠術を信ずると同時に、施術者をも深く信じてる人に施し、若し己れを信せぬ人であつたならば斷然謝絶するが可い。
- (三)施術者も亦深く催眠術を信じ、即ち此の病氣には必ず催眠術の効力あると確信してゐるが肝要だ。効くか効かぬか知らねども、依頼に應じて遣らう位の念慮では駄目である。
- (四)施術者の態度が沈着で、而も被術者の懐く可き同情が無ればならぬ。尙此の事に就いては、前に述べたる暗示の章を熟讀す可きである。
- (五)被術者が熱望及び承諾の上にて施し、被術者の求めぬのに強ひて施すが如きは甚だ宜しく無い事である。
- (六)被術者をして催眠術を恐れしめてはならぬ。若し恐怖の念ある場合には

能々恐る可きものならぬことを言ひ聴かせ、場合に依ては被術者の親近者を傍に坐らしめるが可い。

(七)被術者が興奮若くは不安の状態にゐる場合に施してはならぬ。例へば大に憤怒してゐるとか、或は鐘が鳴つてゐる、我が家の近邊が火事では無からうかと思つてるやうなものだ。斯ういふ状態の人に施しても決して良果を奏せぬものである。

(八)施術者も亦精神が安静で無ればならぬ。今早く他へ行かねばならぬのだから、急いで施さうといふが如きは宜しく無い。故に被術者が幾人待つてゐても、待つてる人の事を忘れ、悠々たる觀念を以て施すが肝要である。

(九)被術者の運動直後食事直後及び空腹時を避けねばならぬ。感受の難易は兎も角も衛生上に害がある。

(十)被術者の周圍に於ける状態が、自然に睡眠を起し易いのが可い。ドンチヤンと音が聞えたり、色々な物が眼に觸れたりするが如きは、感受を妨げるものである。これに就て或る催眠術家は反對の論をなし、曰く「喧擾難

沓の場所でも必ず施される、若し施されぬならば其れは施術者の下手なのだ、車馬囂々たる往來の真中でも行はれる云々」と。此の論は恰かも「坐禪をするには何んな繁華な場所でも之を山奥だと心得よ」と云ふが如きで、縦し行はれるにしても静閑な場所に如くは無いのである。斯くて愈し施すに當つては患者を安樂椅子に腰掛けしめ(場合に依ては坐らしめ、或は横臥せしめることもある)身體に苦痛を感せしめぬやうにせねばならぬ。

右十ヶ條の外に尙言ふ可き事もあれど、其れは次の方法を述べる中に籠つてをれば、能々参照するが可い。

催眠術を施す仕方は甚だ澤山あるが、先づ其の中で著明なものを挙げ、然る後著者の信する所を述べよう。

(一)一喝法——一名フアリア法(印度人)とも云ふ。これは催眠術を施すに際し、先づ大聲を發し、「眠れッ」と一喝するのだ。即ち被術者に對し、施術者が出し抜けに大聲を發し、大に驚かしめ、爲めに他の雜念を忘れ、施術者に對する注意を集め、従つて暗示を感受するといふ譯である。恰かも教授法の下手

な教師が、生徒の注意を己れに集めしめん策として、劇しく床板を踏み鳴したり、或は机上を打つたりするやうなもので、一時は威嚇的の効はあるけれど、眞の信仰心は滅殺せられるものである。故に我國では香具師の輩が齒牙を抜く場合等に能く應用したものだ、上流の催眠術家は大抵此の法を採用してをらぬ。但し催眠の目的と同時に、或る惡癖乃至は或る疾病を癒さんために、斯る驚愕的處置に出づることがある。例へば放縱・怠慢或は我儘などの癖ある者や、何か一つに固執せる精神病者に應用するやうなものだ。大なる落雷の音に驚いて長年の發狂が正氣に復つたといふやうな事實は古來往々あることだ。故に大聲叱咤するのみで無く、不意に冷水を灌注したり、或は外科刀を以て手術を擬裝するが如きも同じ道理だ。されば斯る者に對しては威嚴を示しつゝ、一喝して催眠の状態に入らしめ、然る後強い暗示を與ふるも亦場合に依つては効力がある。が併し餘程施術者が熟練してをらぬと、牛を矯めて角を折るの譬に洩れぬやうな結果になることあれば、大に注意せねばならぬ。

(二)凝視法——これに二通りある。甲は施術者と被術者とが互に睥睨するのだ。即ち被術者をして施術者の眼を見詰めしめ、同時に施術者も被術者の眼を睨んでるのである。(乙)は光輝のある物體又は赤い色の物體例へば金銀の類赤い球又は自分の着てゐる洋服の釦乃至は時計等の如き物を睥めさせるのだ。施術者に依ては凝視球といふ様な物を備へてる人もある。斯る特別な器械であると、何か其の球に一種の魔力がある位に思ひ、普通の品物よりも効力が多いといふけれど、其れは教育程度の低い者に適するのだ。兎に角此の凝視法は被術者をして凝視する方に注意を集めてゐるから、他の雑念は自然に去り、従つて催眠の状態に入るので、昔から最も廣く行はれてゐる。此の法に就き、眼瞼を疲勞せしめるから甚だ宜しく無いといふ反駁論もある。然れど衛生上害ある程の疲勞を來すものではない。唯此の法の缺點は注視するために意思を緊張し、却つて催眠の状態に入るを妨げることのある一事である。

(三)摩擦法——これは施術者が被術者の身體の一部例へば胸とか、又は脊或は手などを摩擦するのである。イヤ摩擦といふよりも寧ろ軽く撫でるので、故

に輕撫法と名づけてゐる人もある。之も随分行はれてゐる法であるが、唯單にこれだけでは良果が少い、即ち他の方法の補助に用ふれば可い位なものである。これに就き、眼上に睡神經があるから、眼上を極めて軽く刺戟すれば催眠の状態に入り易いものだ、されば眼を閉ぢしめて置き、其の上を軽く撫でるに限るといふ論もあるけれど、其れは今や陳腐の説となつてゐる。

(四)聽音法——これは被術者に遠くよりオルガンとか或は笙筆篋の如き音楽を奏して聞かせるとか、或は懷中時計の如き間斷無く、一定の音を發する物を聞かせて置くなどであるが、之も前法と同じく、他の方法の補助に用ふるに過ぎぬ。殊に遠方より音楽を奏するに至つては事餘り大形に過ぎ、多勢の人に一時に施す如き場合ならばいざ知らず、一個人に行ふには適せぬと謂はねばならぬ。斯くて音楽にしても、時計の如き小音にしても聽音法の催眠術は長い時間を要するものである。

(五)温暖法——これに二通ある。甲は被術者が其の室内に入ると他室よりも温暖を感じるやうに裝置してあるもの、即ち身體全部に温暖を感せしめる方法。

(乙)は身體の或る一部分を暖めるので、これに又二通りあり、(一)は額の上に施術者の手を暖めて軽く載せ置く方法で、(二)は唯足部を暖める方法である。元來溫暖の感は睡眠を催さしめるものなる所から、之を利用したので、一名ベルクエン(獨逸人)法とも云ふ。何れにしても盛夏に感心出來ぬ事なるのみならず、其の他の時期に於ても矢張他の方法の補助たるに過ぎぬ。但し幼い小兒には額を軽く暖めつゝ、摩擦するのは良成績があると云つてゐる人もある。

覆耳法

(六)覆耳法——之は被術者の兩方の耳孔を覆ひ、音の耳に入るを防ぐのであるが、自己催眠術の場合に應用す可きで、斯る事をせざるも注意を施術者に凝集せしむれば、他音の耳に入らぬものだ。何ぞ必ずしも耳を覆ふの必要あらんやだ。元來耳を覆へば外界の者は聞え難くなるけれど、ゴーといふ雑音が聞えて不愉快な感を起すものだから、諸法の中でも最も賛成の出來ぬ下手な仕方である。

嗅香法

(七)嗅香法——これは一種の香料例へば沈香とか白檀とかの如き物を焚いて嗅せるので、(四)の聽音法なる音楽を奏すると同じく、莊嚴的に精神を沈静せし

壓迫法

め、斯くて徐ろに催眠の状態に入らしめるのである。昔から行はれてゐる宗教家の御祈禱殊に眞言宗の護摩を焚くといふが如きは、不知不識の中に催眠術を施してゐるやうなものである。さりながら此の嗅香法のみでは其の目的を達し難く、矢張他方の補助たるに過ぎぬのである。

廻頭法

(七)壓迫法——項部或は顛頂部或は額顛動脈或は喉頭動脈其の他頸動脈や脊中などを壓迫しつゝ催眠せしめるので、斯る場所を催眠點と名づけてゐる人もある。縦令強く壓迫せぬにしても頸動脈や顛頂部を壓迫するのは、患者に依ては大に不愉快を感じるものなれば、餘り面白からぬ方法と謂はねばならぬ。

(九)廻頭法——これは施術者が被術者の後頭と前頭とを軽く壓へつゝ、被術者をして静かに、即ちソロ〜と後方に首を廻轉せしめる方法である。これは諸法中で最も疲労し易く、且つ不愉快なる方法で、妙齡の婦人などは殊に嫌ふものである。縦し催眠状態に入り易いにしても、拙劣否醜い方法である。

言語法

(十)言語法——これは聲を低くし、且つ單調に「眠りなさい」或は「今から眠りなさい、今に眠ります、もう眠ります」といふのである、能く感受し易い

人は「眠りなさい」の一言で足りる人もある。斯う言ふと一喝法と違ひ似てゐるやうだが、其の異なる所は、聲を大きくして驚かすが如き拙劣な仕方では無い。されば一喝法と似てゐるとは言へ、其の精神に於ては大に異なるのだ。併しながら「眠りなさい」だけでは容易に感受せぬ者には生理的の睡眠状態を暗示するのだ。例へば『君の眼は疲れて来た、眼瞼は重くなつた、次第に重くなつた、眼より涙が出て来た、眼瞼は垂れた、今や全く閉ぢた、睡くなつて来た、頭も全身も疲れて来た、君は何物をも感せず、視覚は全く去つた、今や全く眠つて了つた』といふやうに告げるのである。

(十一)藥物法——これに二通りある。(一)は服ませる薬は催眠作用無き物、例へば着色水とか或は健胃劑等の如き物を之れは魔睡劑である、之れを服めば催眠の状態に入ると告げて飲ましめるのである。(二)は眞の魔睡劑を嗅すとか、或は服ましめるのだ。例へばクロロフォルム或はエーテルなどの如きを嗅がしめたり、抱水クロラル或はブルフォナル等を服ましめるやうなものだ。此の藥物法は(一)の如くに魔酔作用の無い物ならば何人が施しても差支へ無い

が、眞の魔睡劑を用ふるに至つては眞の醫士であり、而も此の薬が、其の患者の病を癒す上に於て幾分効力の有る場合を除くの外は危険である。換言すれば催眠術を施すのみの目的で無く、催眠術を施すと同時に其の魔睡劑が其の病に効力ある場合に最も適するのだ。併し其れにしても半魔酔の状態に止まる丈の少量を用ふるが肝要である。併し同じ魔酔作用を帯びてる藥物でもプロームカリウムを半瓦乃至一瓦の範圍に於て、神経性の病氣に用ふるが如きは何等の危険が無い。それで前にも述べた通り、十乃至二十%の人は催眠状態に入らぬことあるものなれば、斯る人に此の藥物法は最も効力がある。殊に非常なる病的興奮をしてゐる患者に對しては此の魔酔劑を投することの良効あるは疑ふ可くも無い。斯くて眞の魔酔劑を投じたる場合に於ては平臥せしめて、普通の催眠術を施したるよりも、長い時間覺まさぬやうにせねばならぬ。元來我國の人は病に薬といふやうに、藥物を過度に信じてる傾きがあり、他の療法即ち食餌療法とか水治法とかの如き方法のみで治る病に對しても、藥物を用ひぬ以上は病は治らぬかの如くに思つてゐる者が多い。故に醫

士が「此の薬は魔酔作用あると同時に君の病には良効がある。此の薬を服んで眠りなさい、非常な効果があります」と告れば殊の外良い暗示を與へられる譯だが、醫士ならぬ者が此の薬を服めよといふのは却つて患者に危懼の念を起さしめる原因となるものだ。故に藥物法は醫士が應用するに限ると謂はねばならぬ。

(十二)計數法——これは施術者が一オつ、二アつ……と數を計へる毎に、被術者をして一々其の眞似をなさしめるのだ。而して其の發音は静かで且つ長く引く方が宜い。斯様に無意味で且つ單調なる音を聞かしめつゝ、被術者にも亦同じ事を發音せしめてる中には、自然と催眠の状態に入るもので、彼の佛者が御祈禱する折に讀經してゐると、信者が眠くなつて來るのも畢竟同じ結果になる。即ち讀經は其の發音が大抵單調で、而も普通一般の者には何の意味であるか分らぬから、目的の無い數を計へて聞かすと殆ど同じことだ。尙了り易い例を舉れば子守唄を聞いて赤兒の眠るやうな道理である。著者少年時代に文章軌範の講義を聴いた節、其の講する先生が最初に一度其の文章

を節を附けて素讀せられた、其の節が恰かも讀經の如くであつた爲め、生徒は大抵催眠の状態に入つたが、先生は讀み終ると、「偕て」と發音してから講せられた。其の「偕て」を聞くに眠りが覺め、然る後眞に其の講義を聴いたのが例であつた。これ其の節が淋しい様な有り難い様な一種の音調であつたから、催眠術を施されるやうな工合になつたのであらう。尤も素讀は數はらざるも殆ど讀まれたのだから、却つて其の讀經的が生徒の心を沈靜せしめ、聴講の際に意思を散漫せしめぬ利益があつたと思はれる。計數法も矢張この通りであるが、併しこれのみの方法で無く、言語法其の他の方法を補助する一法に應用すれば甚だ適してゐる。

(十三)莊嚴法——施術室には花毛氈でも敷き詰め、周圍は鏡や繪畫を以て圍み大きな花瓶には奇麗な花を活けたりし、其内の光線は強からしめず、而して沈香の如き香料でも焚いて置き、施術者は異様で且つ立派な服装をなし、可成は一壇高い處に位置を占め、門弟二三人が首を低れて侍坐し、患者の入り來る際には、遠くの方から音樂を奏する聲が聞えるといふ風にし、斯くて患

者に對し、應揚なる態度で患者の患部に手を觸れるのである、此の莊嚴法こそは宗教者の御祈禱其の儘であつて、十八世紀の頃メヌメル派の盛んに賞用したものだ。併しメヌメル其の人は事實を皇張誇大に言つた爲め、識者の卑しむ所となつて遂に餘り行ふ者が無いやうになつた。要するに斯る鱗威しは蒙昧の者には宜しからんも、今の文明人には却つて卑しめられる種になる。然れども多少の室内裝飾をなし、醫士相當の衣服を着けて、威嚴を保つやうにす可きは、既に暗示の章で述べた通りである。

(十四)電氣法——これには二通りある。甲は眞に電氣を通せぬのだが、唯電氣を通じてる様に電氣機を働かせ、而して一導子を額に、一導子を胸に附け、病人をして施術者の方を注視せしめ置き、即て言語を以て催眠を暗示するのだ。乙は病人を感傳電機の傍に坐らせ、弱い電流を頭に通じながら、同じく言語法を暗示するのである。此の電氣法は「催眠術は妖術的の恐ろしいものだ」といふ如き恐怖心のある患者に適當してゐるとのことだ。

(十五)藥液塗布法——着色水或は無害無効の藥乃至は清涼の感を與ふる藥又は

眞に効力ある藥を病者の患部に塗り、これは魔酔状態に入り、且つ治療の効を奏し、若くは治療を補助するといふやうに暗示するので、前に述べたる藥物を服ましめると同じ道理である。故に疼痛部に鎮痛劑を塗つて暗示するが如きに適するけれど、之を以て催眠の目的とするには適せぬ、唯催眠状態に入りたる者に施すには頗る良果がある。

これにて昔より今に行はれてゐる催眠術を略述べ盡した積りである。彼の按摩法や回轉鏡法などあるとは言ふもの、煎じ詰れば皆此の十五法中に籠つてるのである。然れば之より著者の最も良法と信じ、且つ實驗せる法を左に記さう。

- 一、暗示の章其の他でも述べた通り、施術室は掃除其の他裝飾品等の瀟洒たる可き事。
- 二、醫士は身分相當の衣服を整然と着てゐる事。
- 三、舉動・顔貌の沈着なる可き事。
- 四、醫士は他事を思はず、自信自重の精神に富んでゐる事。

催眠術の效果及其方法

五、傲慢の風なく、而して相當の禮式ある可き事。
 六、患者入り來らば互に相當の會釋をなす可き事。
 七、暫時の間(一分時以内の範圍に於て)は互に言語を發せず、互に瞑目して靜かに深呼吸をなしをり、然る後目を開いて施術者より徐ろに發言す可き事

八、催眠術を信す可き事及び催眠術を恐るゝもので無い事を説明す可き事。
 九、「さアこれより目を閉ちて御眠りなさい、今私が數を計へますから、貴方も一々其の通り計へるのです、一オつ、二アつ、三イつと數の進むに従つて眠くなります」と暗示す可き事。

十、最も能く暗示に感ずる人は、「眼を閉ちて御眠りなさい」と言へば、數を計へぬ中に、最早催眠状態に入る人もある。が併し普通には然う早く感せぬから、一オつ、二アつ、三イつ……と施術者と被術者と交番に唱へて行く中に、兩眼瞼が瞬きせず——即ちビク／＼動かぬやうになつたらば、之れ睡眠状態に入るの徴候であるから、「眼瞼は垂れて來た、今や

貴方は次第に睡氣が増して來た、頭も身體も疲れて來た、最早何事をも感せぬ、今や全く睡つて了つた」と聲低く、單調に少し宛時間を置いて言ふのだ。

これにて催眠状態に入らしめる方法は述べ終つたが、其の時間は人に依り大に違ふ。大抵は十まで計へざる中に感ずるけれど、中には互に五十宛も計へねばならぬがある。互に五十宛計へても十分に感せぬ者に在つては前に述べたる摩擦法輕撫法を兼ね行ふのだ。これでも尙感せぬ者に在つては一時中止し、一定時間の後、或は翌日に至り、藥物法を應用するより外に致し方が無い。

以上は著者が普通に施す方法であるが、併し患者に依つては凝視法聽音法温暖法等をも採用しつゝ、言語法を兼ねることがある。然らば如何なる人に斯くするかと云ふに、其れは臨機應變で豫じめ斯る人だと言ふ譯には行かぬが、概して感じ難い患者だと思はれる場合である。所が催眠術家中に凝視法に限るとか或は言語法に限るとかと主張し、而も五分時以内で感せぬやうでは未

熟練であるといふ人もあるが、其れは普通一般の患者であつて、中には全く感せぬ者もあるのだから、都て五分時間内に感せざれば施術が下手であるとは断言し難いのである。されば之より治療上の暗示に移らう。

催眠状態に入つたらば、何時にても治療上に必要な暗示を與へるのだ。其れに就いては能く病者の教育程度・病者の性質及び病症の性質などに依て、其の暗示の與へ方を斟酌せねばならぬ。而して病氣の症候が幾つもある場合には其の重い方より順々に一症候宛除くやうにし、決して同時に多くを除かんとするは不成功に終るを免れぬ。例へば頭痛・不眠・眩暈・鬱閉の感・食慾不進等の數症候を訴へる場合には、今日は頭痛の治療暗示、明日は不眠、明後日は眩暈の治療暗示といふやうにするのだ。併し頭痛の治療暗示が全く奏効せぬときは之を又續けて行ひ、一症候が全く止んでから次に移るのである。

催眠中の治療暗示は前の暗示の章で述べた通り、證言暗示・豫告暗示及び命令暗示の三通りあるが、證言暗示や命令暗示は大抵用ひぬやうにし、一般に豫告暗示の方が効力あるものだ。何となれば證言や命令は一度で必ず治ると

診断せられる者には適すれども、慢性的の症には一時的の効を奏するに過ぎず、即ち再發するを免れぬ。再發すると患者をして其の信用を薄くせしむる基となるからである。次に言語暗示のみで無く、催眠術中若くは催眠術の前或は後に相當の藥劑を與へたり、或は催眠術中に「私が今此の部を摩擦しておくと偉効があります」として摩擦するとか、或は電氣を通じたり、或は患者をして手を動かさせたりする如きも必要である。何れにしても暗示する言語は通俗的で、事柄が能く理解出来るやう、深切で而も同情が無くてはならぬ。催眠の状態に浅い深いの度がある。之を一般の催眠術家は三階級に區別してゐる。第一階級は催眠状態が浅く爲めに施術者の暗示を制して眼瞼を開く程度を云ひ、第二階級は被術者は眼を開くことが出来ず、何事も施術者の暗示通りになるのだが、覺めてからも催眠當時の事を記憶してゐる程度を稱し、第三階級に於ては覺めた後に施術中の記憶更に無きを云ふ。治療上に於ては第三階級の方が覺めてから記憶が無くても其の暗示の効力が最も有効であると稱ふる人もあれど、普通一般に於ては第二階級が最も適してゐる。又醫士

の中には「第一階級でも十分である、催眠術は眞の睡眠では無いのだから、唯暗示を與ふれば可い、何ぞ必ずしも第二階級にまで及ぼす必要あらんや」といふ人もある。然れど著者は第二階級を以て最も宜いと信じてゐる。何となれば第二階級は患者の論理を以て施術者の暗示を批評せんとする抵抗力は毫も無く、斯くて第三階級の状態に在るよりも意識が猶存してゐるからである。兎に角暗示せられた事が醒覺後に残つてゐるを殘暗示といふ。此の殘暗示は場合に依て大なる効力あるものだ。尙後章を讀めば此の理が自ら判明せられるであらう。

催眠術家の中には催眠状態中には何等の治療的暗示を與へる必要は無い。唯催眠術が病の治療に効あるものだと思はしめて置けば其れで可い、即ち或る一定時間睡眠状態にして置き、一定時間を過ぎたら、覺せば其れで効あるものだ。催眠状態中の治療的暗示は蛇足である云々」と稱へてゐる人もあるが、或る簡單なる病症はこれでも可いかも知らねども、大抵の病症には矢張催眠状態中に暗示するの有効なることを著者も實驗して疑はぬ所である。

催眠状態に
おく可き時
間

催眠状態に置く可き時間は各人に依て多少の斟酌をせねばならぬけれど、十五分乃至は二十分時位が普通である。これにて催眠術を施す方法に就いては大抵述べ終つたれば之より醒覺せしむる方法に就いて述べよう。

催眠状態を
醒ます法

催眠状態より之を醒覺せしめるには、「最早貴方は眼を御覺しなさい」と言へば其れで十分である。尙初めて施した患者に在つては「貴方は眼が覺めると精神が爽快になりますぞ、さア最早眼を覺しても宜いです、御覺しなさい」と懇ろに告げる方が、覺めて後も疲倦脱力等の感が無くて可い。其れから又場合に依ては「貴方は最早眼を覺して宜いです、乃で私が一二三と號令を掛れば覺めます、一二三、最早覺めました」と暗示する事もある。何れにしても其の發音を静かにし、急劇に告げては甚だ宜しく無い。斯ういふ様に言語暗示を與へても一度の言語暗示では容易に覺めぬ人がある。其の時には「貴方は程無く覺めます、さア御覺しなさい」を徐々に繰り返すのだ。これでも覺めぬ人が稀にはある。斯る人には暫時経つてから、更に被術者の面上に呼

催眠状態の
合
めたる場

分割式催眠
術

氣を吹き掛けつゝ、「さア最早眼を御覺しなさい」と告げるのだ。或は又被術者の眼を開けて遣りながら暗示し、又頭上を冷して覺ますこともある。斯様にすれば覺めぬといふは殆ど無いけれど、萬一にも之れで覺めぬことがあつたら、自然に醒覺する時を待つても差支無い、周章狼狽して騒ぎ立て、身體を振り動かすが如きは甚だ宜しく無いことである。注意せねばならぬ。

催眠状態中に物音に驚いたり、或は何の原因無くとも眼の覺めることがある。然るときは更に施して催眠状態に入らしめるが宜い。其の儘にして置くのは折角施したる暗示の効力を殺ぐものである。

ブロードマン(Broadmann)といふ人は分割式催眠術を主張した。分割式催眠術とは初め被術者を言語法で催眠せしめて治療上の暗示を與へ、更に覺さしめてから、如何なる暗示を受けたかと質問し、更に又催眠術を起し、前の暗示に連続して又他の暗示を與へ、再び覺まさせて又質問し、之を數回繰り返すのである。之れは僅少の時間に多くの症候を除かんとする目的に適當してゐるのだが、普通の場合に在つては、矢張一回だけに止め、二回目は明日に譲

催眠術を施
した後の心
得

つた方が宜いのである。何れにしても催眠を覺させ、即ち其の治療的暗示を終るに際しては「貴方の何々病症は大に緩いだ(若くは治つて了つた」と告げて歸すのだ。併し一時的の奏効であつて再發するに相違無き症や、又慢性の症に在つては「大分快くなつたが、尙又續けて行ひます」と言つておかねばならぬ。

催眠術を施したる後の結果に就き、心得てをらねばならぬ事が五つある、左に記さう。

- 一、施術者もこれで治つたと信じ、病者も全く治つたと喜んでゐても、其れは眞の一時で、又々再發することの有る事。
- 二、治さうと思つた病症は治つたけれど、又新しい病症を起すことのある事。例へば鬱々悲觀する症候は去つたが、其の代り詰らぬ事に腹が立つといふ症候が新たに出来来るが如し。
- 三、催眠術の暗示で其の病症は去つたが、又新たに其の病症を惹き起さしむ可き刺激即ち以前よりも尙一層強い同じ原因が来ると、再び同症を發

催眠術の效果及其の方法

して更に強い暗示を與へざれば効果無き事。

四、催眠術を受けて大に良効が有つたにも拘らず、他人より催眠術の事を誹られると、再び舊時の病狀に復する事。これは誹るといふ程で無くとも幾分疑ふ語氣を漏すを聞いた丈でも大に妨害となるものである。

五、催眠術治療の適當なる病氣に催眠術を施し、何等妨害となる可き原因が無くても、効力十分ならず若くは全く無効なることの有る事。

催眠術治療には右の如き五つの遺憾な事が伴ふ場合がある。然れば醫士が患者に施すには、専ら催眠術のみを以て治療せず、縦令催眠術のみで全治する病氣でも、可成は他の理學的治療や化學的治療藥物療法も含むを兼ね行ふ方が宜いのである。之にて催眠術を施す方法から覺す方法等を述べ終つたが、尙著者が施して効果のあつた實例を左に二つ記して讀者の参考に供へよう。

〔第一例〕患者(年齢四十七歳の婦人)は元相當の生計を立てゝゐた者だが、夫に死に別れてから不幸打ち續き、遂に下婢となり、轉々して著者の家に雇はれたのだ。二年前に不圖困苦なる咳嗽を發し、爾來種々の賣藥や醫療を受け

咳嗽の治つた實例

たが、段々重くなつても軽くはならず、時々咳嗽出で、殊に溫暖の感(臥床に入るが如し)寒冷の刺戟、飲酒・運動・伏向いて仕事をする場合などに増劇する云々。之を診察するに咳嗽が原因となつたものか、將又肺氣腫が原因で咳嗽を發したもののか、其の原因結果は判斷し難かつたが、兎に角肺氣腫であつて、色々投藥を試みたが効は無い。是に於て催眠術を施したのである。今其の次第を云ふと、式の如くにして催眠状態に入らしめたる後、喉頭部から胸部にかけて(胸部は衣服の上軽く撫で下し)「斯うして此の部を撫でると、肺氣腫も治れば咳嗽も治るのだよ、快い氣持になるだらう、斯う言ひつゝ撫でること約十五分時。是に於て覺し、更に診察して『病は大分治つた、次第に全快するよ』と告げ、斯くて四回施したが回を重ねる毎に咳嗽の度が軽くなり、四回目は全く治り、其の後約一年間著者の家にゐたが、咳嗽に苦しむことは殆ど無いやうになつた。

〔第二例〕三十六歳の男子(中學校教員)は非常なる酒好で、學校に出勤しての間は止むを得ず飲まぬけれど、家に歸れば晚餐時まで待てず、直に一杯を傾

催眠術の效果及其の方法

酒癖の治つた實例

ける。斯くて晚餐時は言ふまでも無く、寢際にも飲む。日曜日や大祭日は終日徳利と親しんでゐる。其の他客あれば飲み、人を訪へば飲み、甚しきは早朝に飲んで出勤することさへもある。之が爲めに胃は慢性の胃加答兒を發し、腦は常に充血し、心身共に勇氣を失ひ、僅かの運動も慵なく、書を開いても緻密なる理論に至れば意志散漫して讀むに堪へぬ。此の儘にして日を累ねんか、前途實に憂ふ可きものである。といふ事は家族や朋友からも戒められ、本人自身も知つてゐる。知つてはをれど飲まずにはゐられぬ、今日は止めん、明日より禁せんとも誓つては見るもの、又直に飲む。是に於て著者の催眠術を受けることになつた。で矢張式の如く催眠状態に入らしめたる後、五十瓦程の水を與へ、「之は芳酸無比で、何等の防腐劑を含まず、醫藥用にも供へる上等の酒です、灘から直接に取り寄せ、密栓してあつたのです、之を貴方が此の量だけ用ゐられるならば何の害もありません、飲んで御覽なさい、實に旨しいです」被術者がグツと半分程飲んだ時、「旨しいでせう」「實に旨しいです」次に水と酒とを等分に混じたる物を又五十瓦程を與へ、「これは普通の人が常

に用ひてる酒です。斯ういふ酒はサリチール酸を以て防腐してあります、甚しきは昇汞といふ毒藥の入つたのがあります。併しこの酒を試験しましたが、サリチール酸は比較的少い方です、常には了ら無いけれど、今貴方の様に精神を統一してゐる時に飲むと、一種の厭ふ可き臭氣が鋭敏に感ぜられます、兎に角一口飲んで御覽なさい」乃で被術者は其れを口に入れんとし、「成程厭な臭がします」とて飲まぬ。「でも經驗の爲めに我慢して少し飲んで御覽なさい、サリチール酸の爲めに辛い厭な味がします」被術者は濫々一口飲んで、「不味い」逆も飲めません』では能く此の臭と味とを覚えておきなさい、今後貴方が酒を飲みますと、此の臭と此の味がして飲めません」斯くて式の如く覺してから歸宅せしめた。所で妻君は其の日の晚餐時に例の如く燭をした徳利を御膳の上に置いたれど、殘暗示の爲めに厭な臭氣がし、一口強ひて飲んだが不味くて飲めぬ。明晩も亦殆ど其の通りであつたが、四日目の晩になると其の臭味が餘程失せて來て幾分飲めるやうになつた。で又著者の施術を受けに來た。今度も亦同じく催眠状態に入らしめ、酒と水とを等分にしたる物五

十瓦を與へ、「これは普通の酒です、だが此の水薬を一條服んでから(別に投薬れお入)此の酒を飲むと厭な臭と厭な味がして飲むことが出来ぬやうになります、一つ試して御覧なさい」先づ被術者に其の水薬を一條飲ませ、然る後混水酒を與へたれば、以前よりも一層強く不快な顔色をして「非常に厭な臭がします、逆も飲めません」でも一口だけ飲んで御覧なさい」被術者は止むを得ず一口飲み、「實に厭な味がします」では當分此の薬を毎日三回宛御服みなさい、今後酒を見ることも厭になります」暫時の後覺してから、更に右の薬を二分與へ、此の薬は酒が嫌ひになるのみでなく、健胃劑にもなりますから、食慾が進んで大に心身の爽快を覺えます、半月ばかり連服せられた方が宜いです」其の後被術者は著者の言つた通り、十五日間此の薬を用ひてみたが、爾來酒を飲んでる人を見ると、輕蔑の念を起すやうになつた。

此の例に依て著者は彼の養老の瀧を聯想した。如何に孝子が汲んだとて水が酒に變る譯は無いかれど、其の父親は我が子の孝心を深く信じ、而も酒であると思つてるのであるから、今此の被術者が催眠中に水を上等の旨しい酒

として味ふが如く、其の老父も矢張錯覺を生じて酒の如くに味はつたのであらう。されば其の孝子の美德を深く崇拜せる者が飲んだら、何れも水を酒と味ふかも知れなかつたであらう。次に斯ういふ事を感じた、縱令催眠術を施さるも、偉大なる人格ある者が諭せば、如何なる惡癖も止むものであらうと。又斯ういふ事も知つた、人を戒める際、唯單に然ういふ惡事をなすなと言つても殆ど効果は無いかれど、成程惡事であると觀念せしめる事柄があれば自ら止むものだ。故に催眠術を施す際には、其等の心理状態を知つてゐて巧みに暗示を與へぬと効力の少いものである。

世には酒嫌ひになる薬、煙草嫌ひになる薬などあるが、其等の薬は縱令斯る作用が無いにしても、之を用ふる人が、然ういふ作用があると確く信じて服むとしたならば必ず効力あるに相違無い。若し又其の薬を服み、次に酒なり煙草なりを用ふると、妙な感覺を起さしめる性質の物であつたらば、尙一層効力があるであらう。例へば極めて稀薄なる硝酸銀水を「これは煙草嫌ひになる薬だ、此の薬を口蓋の奥の方に塗り、然る後食鹽水で含嗽することを一

日に數回行はれよ、煙草嫌ひになること妙です」と信す可き醫士より與へたとせんか、乃で止めんとする人が其の通り塗つて含嗽したる後、煙草を一服試みたならば、實に厭な感覺がするに相違無い、これ硝酸銀の塗布は極めて稀薄であつても之を口中に塗布すると、少くも一時間は煙草を吸ふに堪へぬものである。但し斯ういふ種を明して用ふるのでは駄目である。又此の硝酸銀は劇薬であつて中毒を起す物であるから煙草嫌ひにならんとて、素人が無暗に應用すると頓でも無い危険を招くことがある。醫士の監督無くに試してはならぬ。

催眠術を施す可き病症

催眠術を施す可き病症と

催眠術を施せば何んな病症に良効あるかと云ふに、前にも述べた通り、精神作用が原因となつた病氣には、或は大に、或は幾分か効果を奏せぬといふは無い。斯くて神経系統の病症にも頗る効果がある。けれども同じく精神作用が原因となつてゐても、眞の精神病になつて了つたのには概して其の効果を奏せぬものだ。又精神作用が原因となつて神経系統の病を起したのでも之れが爲めに肉體器質を持続的に損傷したる病、例へば大なる憤怒の爲めに腦溢血を發したる者などには催眠術療法を施しても其の効力甚だ少く、其れよりも寧ろ他の理學的療法藥物療法を施した方が遙かに効力のあるやうなものだ。故に催眠術療法を一括して評すると、直接に將間接に精神作用が原因となつた病氣には此の療法のみで卓効があり、若くは他療法が之を助けて奏効するものである。之に反して肉體的作用が原因となつてゐる病症には殆んど何等の效果無く、若くは幾分か他療法を助けるに過ぎぬ。純然たる肉體的の病

に催眠術治療のみで治つたといふ例話も往々あるけれど、段々調べて見ると、それは誤診であつたのが多い。例へば卵巣腫瘍が催眠術で治つたといふのを、斯道専門の名醫が診察したれば毫も卵巣腫瘍であつた證據が無かつたやうなものだ。それから又火傷が催眠術療法のみで治つたといふ事實も屢耳にするが、元來火傷は何等の治療を施さるも第三度の重症を除く外は自然に癒えるのが多いからである。又純然たる肉體的疾病に罹り、相當の治療を施すか、若くは養生法が宜しければ自然に治るのであるのに、患者は重症で迎も治るまじと思ひ込んで居る場合には、催眠術を施して其の治る可きことを暗示すれば大に良効を來すことがある。例へば肺結核(奔馬症ならざる肺結核)の如きである。肺結核は古來死病であると言ひ傳へて居るから本病者は精神的に病を重らすものであるが、催眠術を施して全治す可き事を信せしむれば、榮養状態が良くなつて他療法を大に助けるものである。尙左に催眠術を施す可き病名を順次に列記しておかう。

●神經衰弱症——暗示の與へ方が巧みなれば偉効がある。

●ヒステリー——純精神的の病なるにも拘らず、催眠術療法の効果は人に依て大に違ひ、或る者には非常に良効があり、或る者には殆んど効無く、而して良効ある者でも概して再發し易い。

●ヒポコンデリー——催眠術療法より優る療法は殆ど無いと謂つても過言では無からう。

●神經痛——催眠術療法に兼ねて又他の理學的療法や藥物療法を施さねばならぬ。

●偏頭痛——原因に依て違ふ。併し概して催眠術療法の効果はあるが、一時的なるを免れぬ。

●癲癇——これも原因に依るけれど、催眠術療法を以て他の療法を助ける上に於ては甚だ効果がある。

●顔面神經痲痺——他の療法にても餘り思はしい成績の無い病であるから催眠術療法を施せば恰好である。但し必ずしも効果ありとは斷言し難い。

●常習頭痛——偏頭痛に同じ。

催眠術を施す可き病症

- 書癡——催眠状態中に患部を按摩して暗示を與ふれば良効がある。
- 神経性胃病——他の療法や攝生即ち運動療法や規則的生活等を兼ね行へば良効がある。
- 便秘——原因に依て大に異なるが概して神経性胃病に同じ。
- 豆波利——催眠術療法を行へば回数を重ねる毎に軽減する。
- 夜驚睡怖——催眠術療法は特效療法と謂ふも差支無い。
- 遺尿——膀胱に器質損傷の無い者には良効がある。
- 陰萎——高老及及び器質損傷を除く外は大に効果がある。
- 遺精——これも概して良効がある。
- 不眠症——催眠術療法の効力は偉大である。
- 齒痛——齒槽膿瘍・根側膿瘍・外傷性を除く外は姑息的の良効がある。
- 手淫より來れる諸症——偉大の効果がある。
- 色情倒錯症——催眠術療法を措いては恐らく治す可き療法は無からう。
- 咳嗽——神経性の者及び肺氣腫の原因となつてゐる者には効力がある。

- 舞蹈病——頗る効果のあるを疑はぬ。
 - 精神病——鬱憂性の者には稍効力があるが、濶大性の者には殆んど効果が無い。
 - 吃咽——他の方法を以て治療するにしても催眠術を兼ね施せば速く其の効果を認められる。
 - 神経性耳鳴——甚だ良効がある。
 - 船暈症——大に効力あるけれど、時を経れば効力が薄らぐ。故に催眠術者が同船してゐて施すに如くは無い。
 - 肺結核——本症を死病と信じて、鬱憂する者には是非施す可き必要はあるが、併し必ず他の療法を兼ね行はねばならぬ。
- 右の外精神的作用より來れるものと認めたる以上は必ず催眠術療法を施すが宜い。又肉體的の疾病でも精神作用が之を重らせる場合には催眠術療法を兼ね行ふ可きものである。

催眠術の効果ある病の説明

神経衰弱症

神経衰弱症
の原因

〔原因〕 遺傳は大に之を助ける。中には子々孫々に傳へて一系を爲し、常人の眼には普通人と異ならぬやうなれど醫士より之を見れば本病者の系統だと確かに判断出来る。而して其の疾病の發するは大抵小兒時代では無く主に青年時代に催すものである。次に精神過勞が原因となる。縦ひ遺傳が無くても非常に精神を使役する時は本病に罹ること殆ど免れぬと謂つても過言では無い。例へば學資金も無いのに人並よりも立派な學者にならうとして徹夜の勉強するとか、或は勝敗を期し難き勝負事をなして大膽なる策略工風を運らすとか、又或は賭博的に投機の商業をなして常に一喜一憂するとか、或は撰擧の競争をなして東奔西走し、而して心をビク／＼させてるやうなものである。次に劣情遂行は少なからず本症の原因となる。殊に青年が手淫を侵すために本病に罹るのが甚だ多い。又手淫其の物では病氣となるまでに影響を

受けたので無いけれども偶々其の害ある事に就いての講義を聞いたとか、或は親ら其書を読んだ場合に以前の失行を非常に悔い、遂に煩悶の餘り本病を發することもある。次に母が妊娠時に身體が衰弱してゐると其の子は本病に罹り易い。次に熱性病後殊にインフルエンザ後に往々本病を發する、次に酒精中毒や濃い茶若くは珈琲の亂用からも来る。其の他耳鼻の病や鉛毒からも来るなど澤山原因はあるけれど、精神過勞に最も多く發するもので、以上の中尙數因の合併は大いに病氣を重くするは言ふまでも無い、例へば遺傳ある者が精神を過勞しつゝ劣情を遂行するやうな道理である。

〔病狀〕 予は便宜の爲に精神的と肉體的とに分け前者より次第に述ぶることにしませう。(一)無用の問題が起る——本病に罹ると今己れが爲しつゝ有る仕事に關係無く、或は其他何の事變も起らぬのに、色々な問題が心の中に湧いて来る。例へば己れは數學専門に複習して最中なるにも拘らず、『若し日米戦争が起つて我國大いに勝つたれど、償金を更に取りられぬ場合には何うなるだらうか』とか、『鳥は羽あつて自由に空中を飛翔すれども、人間は何故に羽あ

神経衰弱症
の病狀

らざるか、又何故に空中を飛行し能はざるか」など、數學其方披けにして我に何の關係も無い事柄を穿鑿する、之を醫道では「穿鑿狂」と名づけて病的にするけれど、素人目には普通人としてゐる、併し斯の如き事を穿鑿してゐるのは勿論病的である。(二)疑ひ深くなる——何事に限らず疑ひ深くなつて疑ふ可からざる事までも疑ふやうになる。例へば「資本を投じて商賣した所で果して生活を支へられる丈の客があらうか」とか或は「書留で金を送つても若しや紛失せぬだらうか」といふやうに普通人の疑ふ餘地の無い事までも頻りに疑うて心を煩悶せしむる如きを云ふ。之を醫道では疑惑狂と云ふが、斯の如き人も矢張病的になつてゐるのだ。(三)意氣揚々——僅かに得意なることがあると、意氣俄かに昂り、人に誇りたくて堪らぬ。例へば己れの作が偶々「某雜誌」の懸賞文に當選した、成程普通の人とても嬉しく無いことは無いが、本病者になると其の度が一層にも二層にも甚しくなり、或はこれを人に見せびらかし、或は再三再四読んで見て自らの文を自らで感嘆し、果は先輩の文學者も眼中に無いやうになり、自ら先天的の大文豪者たるを許すやうなものだ。嘗

に文學のみならず商業に従事する者政事に奔走する者其の他誰にでも斯ることの有るものなれば何人も能く——自省せられたいものだ。(四)失望落膽——これは右の反對で僅かの失意に出逢ふと非常に失望落膽し、世界中に己れの如き不幸な者或は愚人はあるまいと意氣消沈する人を云ふ。例を前者に取つて見ると、某雜誌の懸賞文に當選したる所から先天的の大文豪者を以て自任し、今度は尙一層の名文を書き撰者をして後に堂若たらしめ、彼より書を我に送り、「先生の文は余輩の到底當るべき所に非ず、以後選者を先生に譲り、併せて余輩の文も先生の批評を乞はんものなり」と言はしめよう、是に於て苦心慘憺一大長文を草して送る、待つあるの一月何ぞ長きや、漸く期日に至り、蒼皇として某雜誌を繕けば豈計らんや選外佳作の部にも無い。是に於て失望落膽して、泣く、怒る、怨む、悲しむ、果は己れのやうな不才は世にあるまい、嘗に文章のみならず何事にかけても普通以下の人間だ、甲に比べても己れの方が愚である、將來如何に學んでも逆も成功は覺束無い、嗚呼何うしたら可からうかと自分で自分を天下の愚人にして了ふのだ。得意失意は誰でも

あるけれども、斯の如き状態になる人は病的になつてゐるので、此の儘に打ち棄ておけば憐れむべき境遇に一生を送らねばならぬ。(五)取越苦勞をする——心配は多少誰にでもあるけれど、本病者の心配は今現に無い架空な事柄までもクヨクヨ考へて断えず其事が念頭を去らぬ。例へば少し頭痛がすると、これは腦病で後には卒中の爲に斃れるので無からうか、或は肺結核に罹らぬだらうか、或は我が親、我が兄弟が癩病を傳染せぬだらうかなど我身の事や人の身の上を案じ、果は大地震が有つて東京の市中此處彼處に出火し、鐵管は破裂して水を噴き、煉瓦や瓦は轟々と崩れ、我は此の下宿に居て火責になつて死ぬ、故郷の親達は嘸々歎かるゝであらう、否、其の親達の方にも海嘯が無いとも限られぬ。父は元氣だから山の上へでも逃るかも知らねど、母は到底駄目だ、など、取越苦勞をなし、泣いたり、悲しんだりする、斯の如き人は何事に限らず常に不安の念を抱き、自己の職業も安心して働けぬものだ。勿論病的である。(六)雜念類發——患者に依ては穿鑿又疑問乃至は杞憂などは左程起らぬけれど唯取止の無い雜念が頻りに起つて來て勉學などを大いに妨げる

のがある。例へば今物理書を講じてゐる最中に、餅菓子食べたいなアと思ふ、餅菓子といへば去年の今頃は加藤と共に三十錢を平げたことがある、さうさう彼の加藤と洋行論をした結果喧嘩をしたことがある、洋行するには六百圓の旅費が要る、親爺に六百圓を工風させるのは無理だ、親爺は何時も咳嗽をしてるが若し肺病になりはせぬか……さて、何を讀んでゐたか分らぬ、『眼鏡のレンズ凹なれば斯々、若し凸なれば云々……』何うも此の文章は拙い。併し物質學者の書いたのだから仕方が無い、我が國人は文學思想に富んで居れど、文學思想といへば田中は仲々上手に小説を作る、己れは何が得意だらう、寧ろ實業家にならうかなど、一事が深く印象せぬ中に又他事に移り、之をも決定せぬ中に又他方面を考へてる風の人を云ふのだ。これも同じく病的になつてゐるのである。(七)念を入れ過る——『念には念を入れよ』といふ諺もあれど、之は其れと異り、何事にも念を入れ過るのである。例へば土藏の鍵をかつて來たれど、若しや掛つて居ぬかも知れ無い。是に於て又戻り、手で開けて見る、開かぬ、それでも尙不安心でならぬ、更に錠を脱して見る、

成程掛つてゐた、で又掛ける、又手で開けて見る、斯の如くに幾度でも繰り返して漸く安心するのだ。これも醫士の眼から見ると矢張本病に罹つてゐるのである。(八)記憶力減乏——本病に罹ると次第に記憶力を減乏するものだ。幼時は學校で賞められた位に記憶力の善かつた者が、青年時代から急に物事忘れ易く其の時成程と理解しても少し日が経てば茫として影を捉へるが如き感覺となり、外國語など覺ゆるには非常に困難し、段々病が進めば辭書を引いて其書を閉づるや否や其字を忘るゝこと程左様に忘れ易くなる。これは本病者やヒステリー病者の特有である。(九)無常の感が起る——無常の感と言へば語弊があるかも知れぬ。が併し著者一己の積りでは唯單なる悲哀とは異り、即ち普通人の喜ぶ可き事も悲觀し、悲しむ可き事は尙更悲觀し、善ぶ可き事でも無く、悲しむ可き事でも無い事も悲觀する。故に人有つて結婚を爲せと勸むる者あれば、逢ふは別れの初めだと謝絶し、人の死を見ては嗚呼無常なるかなと泣き、花を眺めても、月を望んでも皆常住不變の物でないと思念し、我は何の爲に生れたるか、我は何を目的とす可きか、嗚呼萬事解す可らず嗚呼

神經衰弱の肉體的病狀

人生朝露の如し、など、世を果敢なみたる末は華嚴の瀧が戀しくなつたり、淺間の噴火口が懐かしくなつたりする。縦し之まで甚しくならぬとしても、『來年の事言へば鬼が笑ふ』てな言行を取り、何事も勇往邁進する氣象は段々除れて了ふものである。宗教的人に論せしむれば、何と評するかは知らねど、醫道では之を病氣だとするのである。右にて雜と精神的病狀を述べたれば、次に肉體的病狀を説かう。

(一)悪いと思ふ所が悪くなる——本病に罹つてゐる人が偶々食欲の進まぬ時が有つて若しや胃病で無からうかと心配し始めた、すると矢張胃病の徴候を呈はし、胃部に疼痛を感じたり、或は嘔氣を催したりする。又若しも脊髄病をビクビク恐れてるとすれば脊柱に痛みを發し、嘗て聞いた脊髄病者の徴候通りになつて来る。其他肺病心臟病なども恐れる儘に襲うて来る、言はゞ病氣は御詔通りになると言つても可い。(二)陰萎になる——之は手淫を侵したる者が手淫の害を知り、其の惡結果を心配し過ると生殖器機能を害し、大いに陰萎となり、醫士が『君は手淫を侵して居るけれど、幸に身體を害して居らぬ、以後爲さぬ

催眠術の効果ある病の説明

とすれば憂ふるに足らぬ、心配さへ爲ねば陰姿も従つて治る」斯う繰返して辯ずれども、本人は一向之を信せず、却つて醫士を不深切とし、或は診断出來ぬから胡魔化するの地位に思ふものである。(三)一般の徴候——頭が重苦しく且つ鈍く痛む。眼は疲れ易く爲に長く書を読むことは出來ぬ。夜は睡られぬ、即ち眠らうとすれば色々のことが胸に浮ぶから眠れぬ、眠られぬから浮ぶ、斯くして漸々眠つても夢ばかり見て其の夢も恐い夢、悲しい夢、然らざれば猥がましい夢、兎に角碌な夢は見ぬ。朝になると仲々起るに懶く、起き出ても身體は大いに疲勞を感じる。食欲は進まず偶々珍らしい物を食べれば大分進むやうなれど、直に厭が来る。便は秘結して二日に一度三日に一度、若し又毎日通じて甚だ少量であつて而も硬い。手足は冷えて僅かの寒さでも身に泌み、普通の人ならば氣が附かぬ程の隙子の孔から来る風でも過敏に感じ寒くて堪らぬやうになる。又動悸は直に亢ぶり易い、少し重い物を持ち上げるとか、或は坂を上るとかすると呼吸が頻繁になつて動悸は早鐘の如くにドキノと搏つ。凡べて身體が何と無く勢力を失ひ、歩行しても直に疲れて

了ふものだ。

ヒステリー病

ヒステリーとは何んな意義か——ヒステリー Hysteria とは希臘語のヒステロ Hystero 即ち子宮といふ意義から出たもので、之を今日此の文字通りに譯せば眞の子宮病と間違ふ所から原語通りになつてゐるのである。昔の人が何故斯んな名を附けたかと言ふに當時の醫士はヒステリー病は婦人の子宮と大なる關係がある、又婦人に限りヒステリー病に罹るものと誤解してゐたからだ。イヤ今でも中には婦人特有の病だと思つてゐる人がある。けれど段々研究して見ると、成程十五歳以上の婦人に多い病には相違無いが、中には鬚の生えた男子も侵されるし、又稀には八九歳の小兒も罹ることがある。獨逸の統計では女十人に男一人の割、佛國では女三人に男一人の比例だとのことだ。さればヒステリー病は婦人の專賣特許では無い。斯う辯じて來ると、然らば何故婦人に本病が多いかの問題が起つて來る。これは以下述べる所の章を讀まれた

催眠術の効果ある病の説明

一四〇
 自ら了解せられるに相違無い。所で元來、體の何處が痛むのかといふ事が先決問題です。之に就いても昔の醫士は神經の或る部分が傷んだ病だとか、或は腦の或る場所が害を受けた病だとかと解釋してゐたけれど、今日の學說では専ら精神機能の中樞たる腦髓の活動に損害を受けた病である、従つて或る神經の纖維が斯う細くなつたとか、或は腦髓の或る場所に斯んな空洞が出来たといふやうな病では無い。されば本病者を解剖して見ても殆ど變化が無いのである。所で怒り斯ういふ事を聞き囁つた人が本病に罹ると、其の實を人に告げれば、他人が精神病者扱ひにせぬだらうかといふ懸念から「ハイ私は神經衰弱で御座います」と言つてる令嬢もあるし、又醫士が診斷の結果、ヒステリーだと告げれば「私は其様な精神病者ぢや御座いませんよ」と氣色ばむ奥様もある。去りながらヒステリーと精神病とは甚だ異つてるし、神經衰弱とも似て非なるものである。何も態々隠す必要も無ければ、然らぬるにも及びませぬ。之にてヒステリーの端緒を解いたれば之より何故其の腦髓活動に損害を受けたか、即ちヒステリーの原因を説きませう、抑々此の原

因を詳しく言へば際限が無いやうなものなれど、一言に盡せば劇しい精神感動が基となるのだ。取も直さず驚愕であらうと、腹立であらうと、心配であらうと、失望であらうと、乃至は悲哀であらうとに論無く、何でも甚しく精神を惱した結果である。謂はゞ精神的の怪我が本病を招くのだ。乃で婦人は先天的に男子よりも劇しく精神を感動せしめ易い、言葉を換れば苦勞性に生れ附いてるから罹り易いのだ。殊に男尊女卑的の風習ある我國に於ては女に本病者の遙に多きは尤な譯で、お氣毒な次第です。以下色々な例を擧げて説明致しませう。

失戀——之は古來何程多くの人を本病者に引張込み、幾何の小説材料になつたかも知れぬ。それから又彼の戀の病といふも實はヒステリーであるが、其の戀にして目的を達すれば俄に——或は次第に治るを見てもヒステリーは精神上の怪我である。

破鏡——平たく言へば離婚が本病者を製造した事は失戀以上であらう。されば離婚は夢々疎かにす可きものでは無い。

老嬢と寡婦——に本病者の多いのは野卑な性慾上からでは無く、頼り無き孤獨の感に打たれるからだ。で良縁を勧める人があると本病に於ける知識の無い親は、病氣が治つてからに致しませうといふけれど、其れは治り難い。所で結婚なされば治りますよとの勧めに従つた者は、それ御覽じませと媒者に誇らせた例に乏しく無い。

無子——昔から我國は女大學的の教があつた爲に、子を生まぬ婦人に本病者の多いのは事實で、之が爲に破鏡を見るに至つては原因の自乗だ。けれども元來子の無きは婦人のみの罪？では無いから、再縁して子を設けると前日のヒステリーは影も無くなる。

愛兒の死亡——悲哀の極端であるから、女も男も本病になることがある。けれども之は前者と異り夫婦共に悲哀を語り合ふから、大に慰安となるは心理上の定則である。斯くて幸に又妊娠すれば本病は自ら治つて了ふ。序に言つておくが、愛兒を失つた人に「貴方はお年が若いから尙幾人もお生みになりますよ」てな事を言ふは決して愚籍にはならぬ。「尤です、思ふ存分お泣

き遊ばせ」は何よりの愚籍である。又美しい同情である。不平不満な結婚——が原因となつた例も實に夥しい。親が利益や權勢に憧憬れて、我が子を其の犠牲に供するとは實に残酷な極みだ。又嫁く時には得心だつたけれど、いよゝゝ其の家に乗り込んで見ると、案に相違し、遂に不平の結果本病になることがある。輕々しく結婚した爲だ。媒者口のみ頼られぬものだ。以上は重に結婚的の例のみを挙げたが、今度は一つ方面を換へ、種々雑多な例を述べませう。

非常な驚愕——或る妙齡の女が、數十尺もあらうといふ高い絶壁の上より、下なる蒼海を瞰下した刹那、圖らず眩暈がして真逆倒に落ちた。すると幸に通る掛つた船人が直に救ひ上げ、直に相當の處置をしたれば、蘇生したる上に何等の怪我も無かつたけれど、其れ以來重いヒステリーに罹つた。今一つは三十幾歳の婦人が、温泉場で湯槽に入つた間一髪といふ時、傍なる客人思ひ誤り、「ア大變ッ熱湯ですぞッ」と叫んだれば、婦人直に飛び上つたが、温湯であつたにも拘らず、之が原因となつて、爾來本病に惱んだのもある。

非常な恐怖——年僅に十歳といふ娘兒に、説く者は面白半分、大人が聞いても凄惨な怪談をなしたる末、「お前は俺を何某だと思つてらうが實は俺も其の化物だぞ、イヒ、ヒ、ヒ」と厭な笑をして見せたれば、キヤツと叫んで人事不省に陥り、それより一生ヒステリーで憂き月日を送つたのである。元來小兒は恐がりながら、怪談を喜ぶものなれば、下女下男などを雇ひ入れる際、前以て我兒に怪談と猥談をせぬやう、能々注意しておくことである。此の外大蛇猛獸に出遇ひ、其の害を逃れたにも拘らず、本病になつた例も珍しく無い。

非常な腹立——この例話は心理學上や病理學上等に於て、頗る有益なれば少し長くなるけれど記しませう。東京は神田の某町に住んでた某商人は大の放蕩家で、最愛の妻子ある身でありながら、常に情婦の許に入り浸り、後には不動産は言ふに及ばず、家具家財から妻子の衣服まで手當り次第賣り飛ばし、妻は寒に涕き兒は飢に泣くといふ次第。これでも妻は貞操を守つて、孤燈明滅の下に衣類の貸仕事をして、故家の親にも其の貧を明さぬやうにしてゐた。

れど、著てる衣服や家の有様が何條隠し切れうぞ。斯うなると親は實に有難いもの。乃で其の親より何分かの資本を借り——否貰ひ、貸本屋を始めて漸く細い煙を立てゝゐた。或日妻は十歳の男の兒と七歳の娘とに番をさせ、生れて十月になる嬰兒負ひながら用達に出ると、無情な夫は情婦の手を曳きつゝ、嘲笑つて我を見るのにバタリと出逢つた。豫て諦めてはゐたれど、嫉妬の炎がムラノ、燃え上らうとした。でも胸撫で下して通り過ぎた。即て用も済み、家に歸れば貸本一冊も無い。何うなつたかと兒供に聞けば「お父さんと何處かのをばさんとが來て皆脊負つて行つた」「ア、畜生ッ」と口唇を噛んだは實に無理も無い事だ。それ以來といふものは乳汁の分泌バタリと止み、強度のヒステリーに陥り、兒供諸共故家の厄介になつた。所が其の後其の夫は不圖した動機から大に前非を悔い、眞に善良な人間に立ち返り、妻の前に來つて低頭平身し、「御身は我が妻では無くて神だ、我は御身の夫では無くて獸類だ今は思ふ存分打つなり殺すなりして呉れ……」赤心面に顯れて一點疑ふ可き餘地が無い。「勿體無い仰せ、妾は良人の妻には相違ありません」是に於て再

催眠術の効果ある病の説明

び圓滿なる家庭を作るやうになつたれば、ヒステリーも次第に治つた。憤怒の極乳汁の分泌バタリと止む所から、如何なる薬も効の無つたのが治る杯、心身の關係は實に靈妙なものだ。

激しい喜悅——も稀には本病を招くことがある。或る紳商が急用あつて車夫を急がせた爲に車上より百圓紙幣の大東何十と、大切な書類の入つてる包を落して了つた。所が左程裕かならぬ家の娘十八歳が、其の落ちたるを見、『モシモシ風呂敷包が落ちました』と注意したれど、聲の低い上に、先方は急ぎに急いでることなれば耳にも入れず、此方は繊弱い足なれば遂々追附けぬ。此の紙幣一枚有つたら父の助けにもならうけれど……イヤ、悪い事を思つた他人様の物だ——早速之を警察署に届け出た。例の紳商は五六町行つてから氣が付き、さア大變、直に車を返して捜せど更に見當らぬ。さア困つたと蒼くなつて警察署に至れば、例の娘が巡査と對話中、紳商大に喜び、「之が有つたと無いとは我一生浮沈の基、一萬金を進呈致します」盛夏ではあつたが、娘はガタガタ顛へた。署長は「大金の事故、此の娘の家へ持ち行かれ

たが宜からう云々」紳商は其の言に従ひ、早速一萬圓に數多の美しい帯や着物地の地を添へ、其の親に逢ひ「些少ながら何卒之を御受取下されイ、して御令嬢は若し相續者でゐらせられずば伴二十四歳の妻に……」後は涙に咽んでゐる。娘には一人の弟がある。親も娘も何否むことが有らうぞ、唯々「何分宜敷」を繰返すに過ぎぬ。即て見合となれば容貌舉動等申分の無い若旦那。是に於て目出度若夫婦が出来たれど、以來其の娘否奥様はヒステリーに罹り、小一年の治療で漸く治つたのがある。之は餘り激烈な喜びが精神上の怪我となつたのである。

右の如くに數多の實例を擧げて見ると、ヒステリーは全く精神上の怪我が原因となるので、精神上に激しい刺戟を與へる事が無つたら決して起る可き筈のものでは無い。と申すと頭の舊い醫士は「精神上の怪我は勿論ヒステリーの原因になるけれど、其ればかりが原因だとは間違つてゐる、確に婦人生殖器の病も本病の原因となる。見よ、月經の不順子宮や卵巢の故障ある者は大抵ヒステリーを發するでは無いが、現に月經に故障がある中はヒステリー

一が有つたれど、其の故障が治つたら従つて本病も去り、又卵巣腫脹の人がヒステリーに罹り大に悩んでゐたが、其の卵巣を切除して了つたらヒステリーが療せずして治つたのもある。其の外鉛、水銀、モルヒネ中毒からも起れば身體の外傷からも起る、何ぞ精神上の怪我のみならんや」と息巻く。がドッコイ然うは言はせぬ。成程生殖器病が本病の原因になつてゐる如く見ゆるには相違無いけれど之は唯皮想であつて、深く立ち入つて観察すると、子宮や卵巣等に故障があれば、他に精神上の苦痛を伴ふ事情が出て来るからだ、されば其の病を以て直接の原因とは出来ぬ。統計に依てもヒステリー病者の多くは生殖器に故障の無い人が多いでは無いか。又中毒や肉體の外傷も、其れが爲に恐懼、心配等が伴ひ、同じく精神上の激しい刺戟が原因となるのである。終りに臨み一言す可きは、

本病者と深い交際——を結ぶと本病になることのある一事です。之も矢張模倣的精神感動——即ち其れに釣り込まれて遂に我も精神上の苦痛を共にするからである。何もヒステリー細菌といふ様な物を感染する譯では無いのだ。狂

人の真似をすれば狂人になるといふのも多少の道理がある。

ヒステリーは前述の如く原因は精神上的の怪我であるから、其の病状に於ても、精神的病状と肉體的病状との二つに大別する事が出来る。今左に精神病状から述べよう。

(一)我儘者になる——人の此の世に在るや、如何に高貴の方でも、一から十まで我意を通されるものではない。時には長尻の厭な客に相手せねばならぬ事もあるし、時には笑に紛らして涙を飲むこともあるのみならず、奉公人に對してさへ世辭を言はねばならぬこともある。然るに人の妻となつてゐて夫や舅姑に對し、眠いからとて先に寝ね、腹が空いたからとて先に食べるに至つては婦人に尊ぶ可き婉曲といふことが更に無い。所が本病に罹ると、斯る美點は段々除れて我儘ばかりを振り廻すやうになる。

(二)執拗くなる——「金時計を買つて下さい」「ダイヤ入りの指輪が欲しい」と言ひ出したが最期、「今少し都合が悪くから來月にしておくれ」と素直に理由を説明するにも拘らず、執念深く責め立て、買はせようとすれば本病者の特

徴である。

(三)機嫌換になる——今が今まで笑顔でゐたかと思へば少し氣に入らぬことがあると、直に憤顔になる。昨日の親友も今日は憎く、今日憎んだ人も明日は憎く無いやうになること珍らしく無い。而して其の愛するものも憎むのも普通人より度が強い。

(四)嫉妬深くなる——嫉妬す可き事が有つて嫉妬するのは普通かも知らねど、嫉妬す可き事柄の毫も無いのに、唯想像だけで嫉妬する。此の状態に就いては後章なる「嫉妬する癖」に詳しく述べてある。

(五)懦弱者になる——病氣前に何事も几帳面に整理した人なるにも拘らず、本病に侵されると、衣類でも其他の品物でも仕舞ふ可き處にも仕舞はず、放棄り散しておくやうになる。

(六)迷信深くなる——相當の教育を受けた爲め「寅の日だ、酉の日だ、何處其處は鬼門に當る」などの愚なる事柄を信じなかつた婦人が、本病に罹ると、コン／＼チキ様を信仰したり、或は如何はしい宗教者(宗教者?)と手を携へて、

「何とかの命、助けて給へ清めて給へ」ドコドコドン、ドコドドンと舞踏する事を耻ぢぬやうになる。

(七)見え坊になる——「見え坊」とは東京言葉で、他の地方では何と言ふかは知らねど、兎に角物を街ふやうになるのだ。乃ち家の經濟も省みず、夫の收入も考へずに、無暗と立派に着飾つたり、過度に祝儀を遣つたり、慈善金を出したりするやうになる。慈善は結構な事であるけれど、身分不相應に施して、爲めに家族を困らすやうになるのは病的である。

(八)記憶が悪くなる——次第に記憶力が減つて、嘗て能く覚えてゐた文字や琴歌を忘るゝは未だ可いが、甚だしきは、屢々往來した知人の家をさへ忘れ、狐に魅されたかの如く、其門前を行きつ戻りつ、漸く人に尋ねて「ア、然うであつた」と合點するやうになる。

(九)矛盾する——物事が矛盾し、即ち常識に缺けた行をするやうになる。例へば犬猫などを非常に可愛がり、口移しに食物を與へたり、一つ寝をしたりするかと思へば、一方に於て蜻蛉の羽を切つたり、蛙を苦しめたりするやうな

残酷を敢てし、甚しきは犬猫の爲に奉公人を虐待するやうな無慈悲をなすに至る。

(十) 欺され易くなる——意志が薄弱になる爲に、人の言行を判断する能力が段々減り、それが爲に甘言を以て近づく者に欺かれ、或は家財を横領せられたり、或は大切な貞操を破られたりするやうな例は往々ある。嗚呼事茲に至つてはヒステリーも亦恐ろしい病と謂はねばならぬ。以上の十ヶ條で略精神的病状を述べたが、序に本病の爲に墮落した人の實例を擧げて世の戒めにしませう。

所は帝都の高臺に立派な家を構へ、數百萬圓の有價物は確に有ると噂せられた某家の夫人四十五歳が本病に罹り、前述の病状通り、正しい夫を嫉妬し、數多の奉公人を愛憎すること甚だしく、媚る者には金鎖の時計も惜まず、親戚故舊と雖も、不善者を喜び、善者を遠ざけ、金の有るに任せて贅澤三昧、或は箱根の温泉に數十人の供を伴つて恰も昔の大名夫人が御越しになつたかの如く高ぶり、或は歌舞伎座の観覧券數百枚を買ひ占めて、猥りに他人に與

ヒステリーの爲めに墮落した人の實例

へたりしたのは此の家に對して左程の打撃でも無つたが、此の與し易い夫人の心を見て取つたピーク、俳優某は陰に陽に媚び諂ひければ、夫人はマンマと欺かれ、遂に年にも耻ぢず、我子同様の者を情夫とし、洋行して最長の長男が、未だ一度も手を通さぬ着物を與へたり、或は多くの金員を貸したりし、尙之でも慍らや、私に夫の實印を利用して若干の金を得、例の俳優とドロンを極め込み、俳優も金の有る中はチャホヤ言つたけれど、後には此の俳優にも捨てられ、病は愈重くなり、骨瘦せ肉落ち、見るも哀れな姿になつたが、元々ヒステリーの爲めであつたといふ診断が確かになつたのと、今一つは斯る金満家になつた原因は夫人の大なる助力であつた爲め、戸籍上だけは矢張其家の夫人となして、其の後治療を施したれば病の全快するに従ひ、前非を悔い、元の正しい心に立ち返つたとは云ふものゝ、一度操を破つた身、今に夫は其の夫人に對して無言であるとの事だ。これは一例に過ぎぬが、妙齡の令嬢から、壯年の婦人など本病の爲に墮落したる例は甚だ澤山ある。然るに世の人は之を病氣と思はず、従つて療養も施さぬとは慨はしい次第であ

る、次は肉體的の病状を説かう。

(一)頭痛がする——堪へられぬといふ程では無いが、何と無く頭が重く、即ては顛顛部から頭の頂部まで幾分か痛み、針仕事をしてゐても、讀書をしてゐても之を續ける事が出来ず、果は横になつて臥るやうになる。斯くて暫時休んでると治るから、又元の仕事をやるけれど、今度は早く頭痛がして来て、遂には仕事を止めねばならぬやうになる。之が病の進行と共に治ることが無く、何時も頭痛を感ずるに至るのである。

(二)眩暈がする——坐つてゐた揚句だとか、或は何か一心に見詰めてゐた後などに、眼が暗くなつて来て身體がよろける。之も病の進むに従ひ屢々あるのみならず、其の儘卒倒して人事不省になることがある。

(三)動悸がする——心臓の鼓動が常には普通の人よりも低い位なれど、一寸驚くとか、或は少し重い物を持ち舉げるとかすると、動悸は一時に高ぶつて早鐘を撞く如く、胸の中は苦しくて堪らぬやうになる。

(四)消化が悪くなる——胃病といふ程では無いが、何うも食欲が進まぬ。従

つて食量は次第に減る。何か珍らしい物があつて少し食べ過ぎるやうな事があると、嘔氣が出たり、嘈雜が有つたりして甚だしきは嘔吐を催すやうになる。

(五)不眠になる——床の中に入つても、色々の事が胸に浮んで眠られぬ。眠られぬから考へる。考へるから眠られぬと云ふ工合で、重いものになると終夜眠られぬのがある。

(六)夢見性になる——眠られぬ揚句に漸と眠ると、色々の取留の無い夢を見る。而して其の夢を實際のやうに苦にするものである。

(七)顔色が悪くなる——概して蒼白くなるのが常なれど、初めの中は屢々變り、ポツと紅くなつたかと思へば蒼くなるといふやうに、一日の中でさへも幾度も變るけれど、病勢の進むに従ひ、次第に變らぬやうになり、即ち蒼白くて何とも云へぬ淋しい色を呈すものである。

(八)月經不順になる——月經の來潮期が或は早まり、或は遅れ、月經時も長くなつたり、短くなつたり、又月に依つては全く無いこともあるやうになる。

(九)汗をかく——熱い飲食や温度の高い空気に觸れて汗をかくのは生理的だが、本病に罹ると、因縁無くとも鼻の上や腋の下及び其の他の部分にも汗を出すことが多くなるものである。

(十)異様な感覚が起る——身體の方々に蟻の這つてるやうに思つたり、痺麻質斯の様に關節が痛んだり、咽喉に物が塞へてるやうに感じたりするものである。

(十二)食物の嗜好が變る——これも本病者に往々ある事で、大好で有つたものが、大厭となり、大厭で有つたものが、大好物となつたりする。

(十二)無い物を見たり聞いたりする——初めの中は或る物を見違へたり、聞き違へたりして居るけれど、病の進むと共に、真に何物も無いのに見えたり聞えたりし、尙も病の進むに従ひ、其の物が何時も眼に見え、耳に聞えるやうになる。彼の狐憑病といふも畢竟ヒステリーの嵩じたのであつて、斯うなると狐になつたり、己れに復つたり、一つ體で言語動作を二様に働かすのである。但しヒステリーに罹る人は必ずしも狐憑病になるといふ譯では無いが、少し

病が重ければ多少の幻覺錯覺あるを免れぬ。

(十三)一種の癖が起る——例へば髪の毛が少しも亂れてゐぬのに、無暗と手で擧るとか、或は頻りに後を振り向いて見るやうな一種の癖が出ることもある。

(十四)一種の熱がある——俄に熱發し、何病になつたのだらうと思つてる中に薬も服まないで治つて了ふことが時々ある。又熱は更に出ぬのに、本人は大熱が出て來たと騒ぐことがあり、體温器で計つて見ると平熱。乃で熱が無いと告げて、其の體温器は損じてゐるのだらうと信せぬことがある。

(十五)人事不省が往々有る——前述の眩暈或は卒倒の揚句に有ることもあるし、又悲哀驚愕の爲にも卒然人事不省になり、暫時又は數日の間、恰も死せるが如くなることもある。虚榮の爲に許嫁の夫を捨て、不釣合の人と結婚したけれど、思つてゐた事が齟齬し、煩悶懊惱の結果本病に罹つた其の揚句、ゆくり無くも許嫁の夫が立身出世せるに出遣ひ、俄然人事不省になるなどは實に小説のみで無く、實際に於ても珍しく無い例である。

(十六)生殖慾が變る——亢進すると言ふ説もあるけれど、それは意志の薄弱に

なつたのを見て論ずるので、其の實大に減じ或は衰へるものである。

(十七)痙攣が起る——痙攣とは身體が引き釣れるやうになるのを云ふ。乃で悲哀或は驚愕などに接すると、前述のやうに人事不省とはならぬが、身體を彼是と動かし、續いて仰向けになり身を反し、膝を立て、腰を上げ、實に妙な姿をなす、之を醫道では角弓反張と云ふ。この痙攣を起してゐる間は精神が朦朧となり、家人をして心膽を寒からしむるやうに凄く笑つたり、或は大に泣き叫んだりする。斯くて引續き聲が嘎れたり、吃逆が出たり、咽が塞つたりする。

(十八)痙攣する——四肢殊に下肢に痙攣が起ると更に歩むことは出来ぬけれど、一脚のみに痙攣が起れば、其の脚を後方に曳き、恰も跛者の如き歩方をするものである。

(十九)知覺を失ふ——痛い痒いなどの感覺は減退若くは殆ど無いやうになることがある。而して多くは偏側のみに表はれ、則ち知覺の失せてゐる方は五官悉く異常になり、眼も健側程に見えず、鼻も香はず、耳も遠くなり、舌も半

分だけしか味無く、皮膚は熱い冷いも感せず、筋肉は針で刺しても痛く無いといふ様になるのがある。

(二十)内臓の變徵——例へば胃出血、鼓腸などを來すのがあるけれど、之は極めて稀にある例である。

本病者は悉く此の二十徵候を表すとは限らない。而してその輕重に於ても區々で、唯多少神經質の人だと思ふ位なのもあるが、老練なる醫士の診察に依り、始めて本病者だと云ふ診斷が定くのものもあるし、之に反しズン／＼進行して惡徵候を表し、甚だしきは黄泉の人となるものもある。而して其の経過即ち病の早く治ると治らぬとは周圍の事情殊に家庭が圓滿で有ると無いとに依ることの多いものである。

ヒポコンデリー

〔原因〕は慢性消化器の病、生殖器の病、春情の發動する頃、或は遺傳及び不明の原因などである。

催眠術の効果ある病の説明

〔病状〕は大いに怯懦になり、想像力が進み、身體の異状を心配し、少し咳嗽が出れば肺病であるやうに思ひ、僅かの頭痛がしても腦卒中にならぬかを恐るゝものである。これより續いて胃部が重苦しいとか、嘔氣が出るとかして消化が悪くなり、便秘を發し、次第に瘦せ衰ふるとは奇妙な病と謂はねばならぬ。醫學書生が此の病に罹ることの多いのは一つの争はれぬ事實である。此の病氣に就き興味ある著者の實驗談がある。此の實驗談は世の醫士たる者及び患者一般に大いに讀んでおかねばならぬことである。

頃は明治三十一年六月十九日日まで忘れぬ。此の日に知己の紹介で清水幸助(年齢二十一、田舎)といふ人を診察した。之を望診するに體格強壯即ち筋肉の發達といひ、色艶の佳いことと言ひ、何處に病氣があるだらうかと疑はるやうな姿、例に依つて其の既往症を尋ねれば、

「去年の五月何と無く苦しかつたから、村の醫士某に診て貰つた所が、心臟瓣膜病であるとのこと。それから二日程経て治つたやうにあつたが、折しも友人に話したければ、それは大變だ、心臟瓣膜病なら俄かには死なぬ

けれど、一生治らぬ、早く治療し給へといふ。さう言はれて見ると心配で堪りませぬ。彼是してゐる中に胃は疼痛む、頭痛はする、脊や腰は絞められるやうな感じがするから、又或る醫士に診察を乞ひたれば心臟病では無い、脊髄癆である、飲酒房事は堅く慎しめ云々。脊髄癆は固より重い病であることは知つてゐたから、更に心配を増した。依て更に他の醫士に診て貰へば腦病であるといふ。何れにしても重い病氣。又更に其の上の醫士其の上の醫士と換へたが、皆々腦病と定つた。これより先月まで治療を受けましたが、一向に宜しく無いから上京して、日本第一等の醫士は誰であらうと尋ねれば、〇〇〇病院長醫學博士何々先生であるとの答。早速これに従つて往つたら、豊圖らんや其の病名大いに異なり、膀胱痙痺病。成程大醫は大醫だけあつて、凡々なる輩とは大いに診立が違ふわいと感じまして、今日まで三十五日間は一心に服藥してゐますが、始めの中は少し効があつたれど、郷里の女房が訪ねて來た以來は又々重くなりました云々」

催眠術の効果ある病の説明

…二日で治り…：脊椎癆…：腦病…：膀胱痙…：妻が訪ねて來たら重くな
つた…：實に變な病ぢやなあ…

『して又今は何の様に苦しいです』

『何の様にと形容はし難いですが、何と無く頭が重くて食慾は進まず、大
便の通じは四五日目に漸く一度、それゆゑか腹が張つて、小便は一晚に六
七度も洩ねばならぬ、兎に角先年よりは腕力大いに減りました。それは倍
ておき、何々先生のお蔭で、少し快かつたのを何を隠しませう、久しぶり
で妻と交りをいたしたものですから、又々重つたのでせう。下略』

これより尙色々問答してから、觸診・聽診・打診など残りなく丁寧に終つたが、
何等の異常も無い。脊椎癆でも無れば膀胱痙でも斷然無い。良あつてこ
れは間違も無くヒポコンデリーであると大悟徹底した。大悟徹底した譯は
斯うなのだ、これが讀者の注意すべきことである。

去年五月何と無く苦しかつたといふのは感冒でもあつたらう。所が村醫が
心臓の音を聴き間違つて、重い病名を附けたが、當人其の病名の何たるを

知らぬから、一向平氣であつたし、殊に感冒位だから治つて了つたのを、友
人の注意で心配し始めたが病の本。其の心配した爲に胃痛・頭痛従つて脊腰
も痛んだのである。然るに又早計先生が僅かの點の似てゐるために脊椎癆
などいふ重い診断をした。重い診断をしたとすると飲酒房事を禁ずるは當
然である。禁せられた者は心配を増すはこれ亦當然の理。乃で心配に心配
を重ねたることなれば、多少腦病の徴候を呈はしたかも知れぬ、イヤ呈は
したに違ひ無い。故に便秘もあれば不眠症も起る、これ亦自然の道理。然
るに〇〇〇病院は朝の九時から正午頃まで僅か三時間に少くも百人の病者
を診察することなれば、一分と四十八秒時間に大切なる人間を診る割合に
なる。さすれば如何なる大醫も宜い診断の出来る筈は無い、無いから一晚
に六七度も小便するといふこと丈で膀胱痙痺といふ名を附けたので、眠ら
れぬ爲に屢々小便に往くのであるといふ考の起る暇の無いのは無理の無い
ことである。されど大醫と信じてゐる矢先へ今までに異なつた病名である
から、尙更有難い、有難いから少しの効が有つたのである。然る所へ最愛

の妻が来た、妙齡の男女なれば不知一夜の夢を見た、見たは見たが前に房事を禁せられたことが先入師となつてゐるから、愈々氣になる、固より氣に罹つたのが病の本なれば又候重くなつたのだ。と余は斯う診察したけれども、これを正直に答へては却つて病者の爲にならぬと考へたから、「矢張膀胱癱痺です、私はこの病を治すが、何よりの得意、必ず向ふ半年間に夢の醒めたやうにして上げませう。」と告げおいて診る度毎に少し宛宜くなつたと方便術を施したければ、當人も大いに信用してくれる爲め、其の上夜も安眠出来るやうに服薬せしめたから、小便に往く數も次第に減り、最早健康無事にならうといふ嬉しい所へ霹靂一聲、徵兵の検査、検査は固より覺悟の年なれど、病氣故に必ず不合格と自分免許をしてゐるのに、甲の合格、「私は永らく病氣で悩んでゐた弱蟲で御座ります、何うぞ……」『黙れ、汝が病氣なら世界に健康者は居らぬぞ、精神を勵まして御國の爲に忠勇の武士となれ。』

大喝一聲の下に何の返事も出来ぬが、大病後と思つてゐる身なれば、下手

神經痛

軍醫の誤診と誤解し、入營して後は、又々弱い身に此の様な酷い務めをなさしめるとはと心配し始めたが病を重くし、遂に悲觀煩悶の末、可惜健康體を轟然たる汽車に敷かせて自害した。嗚呼恐なるかな、嗚呼憐れむ可きかな。けれどもこれを殺したる者は汽車でも無く、自害でも無く、唯最初の村醫が大に原因をなしてゐる。醫士たる身は小心翼翼として赤誠を盡し、而も斯る重い病名を打ち明すものでは無い。斯くて村醫は尙恕す可しとしても帝都の中央に巍々たる病院を立て、醫學博士の學位まで有ちながら、ヒポコンデリーの診断が定かぬとは抑何事ぞや、これ診断が定かぬにはあらねど一分時間程に大切なる玉の緒を取り扱ふからである。縦ひ診察料を高く取つても、多くの人を疎漏に診ぬのが正當なる醫士と謂はねばならぬ。故に患者も亦是等の點には能く注意をして醫士を撰び給へ。

〔種類〕唯單に神經痛と言つても其の中には色々の種類がある。即ち三叉神

催眠術の効果ある病の説明

經痛・肋間神經痛・坐骨神經痛・膊神經痛及び生殖器神經痛等であるが、之を一々區別して説くときは餘りに専門的になるから、茲には概括して説くことにする。

〔原因〕其の主なるものを列記すれば遺傳、體質の不良、感冒、外傷、傳染病後、貧血、精神過勞、生殖器病、梅毒、肺病及び動脈瘤等であつて、其中にも三叉神經痛は頭骨の病・中耳の病に多く發し、肋間神經痛は肋骨病・脊椎病の續發症となるなど、其の部分に依つて原因も多少違ふ。年齢は中年より老年にかけて起るが、小兒には極めて少い。性から言ふと男子よりも婦人に多い、これは妊娠産褥月經閉止等の生殖器に關する故障が男子よりも多いからであらう。去りながら坐骨神經痛・膊神經痛などは婦人よりも寧ろ男子に發し易い。其の他不明の原因もあるが、兎に角眞の原因及び病理に至つては尙これを詳かに説明の出來ぬ事柄が多くある。

〔病狀〕一言に盡せば神經の痛むのであつて、其の痛みは俄然として起ることも有れば、又或る前徵例へば寒さを覺えるとか、奇妙な痒さがするとかし

て、其の揚句に起ることもある。中には左程に痛まぬものもあるけれど、多くは猛烈で灼くが如く、切るが如く、或は裂くが如くで、夫等の痛みは一時緩むことがあつたり、或は引き續いて惱むものもある。斯くて寒冷な空氣や精神感動及び患部の運動は其の痛みを増さしめるものだ。次に知覺機の障害があつて、神經痛の部分の皮膚は劇しい知覺脱失或は弱い脱失が有り、而して其の痛みが歇んでゐる時や或は痛みが歇んだ直後に著しいものだ。されど其の下層に在る部分の知覺は過敏になつて軽く壓しても或る一定點に非常な痛みを覺える。この疼痛點は診斷上に於て大切なるものである。次に疼痛部に麻痺の起ることもある。次に疼痛部に顔面神經痛即ち三叉神經痛に於ては皮膚及び結膜が著しく蒼白くなるか、或は紅くなるものが稀でない。次に涙や汗の出ることもある。又重症の神經痛が幾久しく續くと、其の神經の分布してゐる部分の組織に變化を來し、毛髪が白くなつたり、脱けたりし、或は皮膚が厚くなつたり、反對に消削たりし、或は皮膚が變色して色素を沈着するなどの妙な症狀を來すことがある。次に一般の榮養は左程影響を蒙らぬことも

あれど、大抵の者は疼痛の爲に睡眠を妨げられ、及び食慾の減する所からして、自然に色が蒼白くなり、身體は瘦せ衰へて来る。次に精神状態も亦影響を受け、鬱憂の状を呈し、中には自殺を企てたる者さへもある。本病の経過は甚しい差等の有るもので、其の痛む時も一日に數回なるもあるし、或は數日で止むのもあるし、或は時を定めて正規に發するものあれば、或は不規則に發するものもある。而して一生涯治らぬもあれば、直ちに治るもあり、或は數年悩んで遂に全治する症など有つて、其の豫後の診斷は何とも見極めが出来ぬ。

偏頭痛

〔原因〕 先天的の素質が主なるもので、男子にも無いでは無いが、殊に春期發動期の婦人に多い。誘因は精神過勞・貧血・月經異常・萎黃病・房事過度・痛風・癩麻質斯・精神の興奮・便秘其の他の障害及び飲酒過度等で有つて、或る人は本症の發作は身體の自發中毒に由る、詳しく言へば或る方法に依て時々體內に産

出する毒物の作用に外ならぬ云々と。されど尙確然たる證明が無く、又其の毒物は果して神経系統の何れの部位に其の作用を逞うするかも素より明かでない。

〔病狀〕 一言に盡せば通常頭部の偏側を犯す所の一種の頭痛で有つて著しく全身に違和を覺え、食欲缺乏・惡心又は嘔吐を來すものだ。其の疼痛の時間及び間歇時は長短不定で、之を屢反覆するものであるが、中には其の時間が極めて齊然たるものもある。又大抵の患者は其の偏頭痛が發らうといふ前に何と無く不快を覺え頭重く、或は眩暈し、或は耳鳴り、或は眼に火花を見、其の他惡寒や欠伸をするなどの前兆がある。疼痛は通常頭部の左半側で前額部・眼部、時としては顳額部を占めてるが、稀には左右交番に痛む人もある。其の痛さは破裂するが如く、劇しいものであるが、中には左程で無いものもある。次に食思が少くなつて其上嘔吐を發する場合には大抵強い酸味を帶び、胃液の分泌が甚だ多くなる。斯くて病が續けば續く程甚しく疲れて眼には燥爛としたる光線を見、臭氣の如き外來の刺激に對しては頗る鋭敏で、稀には半

視症を來す人さへもある。又稀には手や指の知覺異常を來し、耳は鳴り、言語は障害を伴ふものもある。又痙攣性偏頭痛といふのは患側の前頭や耳朶が蒼白くなり、瞳孔は散大し、唾液の分泌が盛んになるけれど、痲痺性偏頭痛といふのは患側の顔面が紅くなつて顫動脈が高く搏動し、瞳孔が小さくなる。併しながらこの分類は學理上の議論で有つて實際には此の兩性を混するものである。大抵の患者は其の間歇時は爽快で敢て疼痛を感せぬけれど、屢發つたり、或は長久しく續くと、重症者と同じく其の間歇時にも多少の痛みが残つて惡心嘔吐などの止まぬことがある。全體本病は極めて緩慢なるもので、中には僅かな月日で治るものもあれど、多くは數年乃至は數十年の久しきに亘るものだ。されど醫士たる者は本患者に對しては容易に治らぬなど、斷言せず、其處は臨機應變の方便説を述べて患者を慰藉することが肝要だ。

癲癇

〔原因〕 眞の原因は未だ講究せられぬけれど、遺傳素質が至大の關係あるも

ので、癲癇者の大部分は癲癇或は其の他の遺傳素質が有り、嘗て血族中より一回或は數回神經者を出したる人に發するものだ。換言すれば、父母や祖母などに眞正の癲癇に犯された者があれば尙更であるし、若し然うで無くても一般の神經病例へば精神病・歇私的里・神經衰弱などに罹つた者が近親に在ると本病に罹り易いものだ。其の他妙なのは精神的特性ある者及び一方に偏つたる非凡の天才ある人例へば詩とか畫とかい古今に秀でたる英才有れども、世上の事は小兒同様なる人の子孫に本病者を出すことの少く無い一事である。次に兩親中に大酒家があり、其の酩酊時に妊娠したる生兒も後に本病に罹る實例が多くあるとの事だ。次に飲酒及び房事過度は本病の大原因になるといふ人もあれど、これは甚だ不確實だ、何となれば飲酒の癖や房事過度の癖は神經質の遺傳を受けたる人に多いから、それが爲に本病に罹り易いので、飲酒や房事が直接に本病を促すので無いかも知れぬからだ。次に梅毒が誘因になるとの説もあるが之も疑はしい。次に心身の過勞殊に或る感情を頻回劇しく發することが誘因となるは確かなやうだ。次に榮養不良・貧血及び多血も多

少の誘因となる。次に急性熱性病、胃病、頭部の外傷は少なからず本病を誘ふ。又耳内の異物及び炎症、腸の寄生蟲及び婦人生殖器病などは反射的にこれを促すものだ。

〔病狀〕完全なる本病の病狀は之を數期に分けて説くが便利である。乃て其の第一期即ち前驅期は一上肢又は一下肢又は心臓部或は胃部より頭部の方向に微風の昇るやうな一種特異の知覺異常を訴へ、而して不快なる臭氣を感じ、紅い色などが見え、耳にも笛か蜂か或は何の聲とも形容出來ぬ聲が聞え、身は寒くなつたり、反對に熱くなつたりするを感じ、其の手は非常に蒼白く變じ、或は紅く變り、劇しい心悸亢進が有り、續いて眩暈がし、精神は恍惚となる。此の前兆は人に依て更に無いのも有れど、有るとすれば甚だ僅かの瞬間であるか、或は幾分長く續いて經驗ある患者になると、其の前兆なることを知り、前以て寢床に入るなどの豫防策を講ずるが、至極重いのになると心窩が甚だ苦しく、又胃病を來したりする、此の間を第一期と稱するのである。但し此の第一期が無くて直ちに第二期が第一期となることがある。第二期は瘧

撃期であつて、俄かに地上に倒れ其の際身體は大抵前方に倒る意識が全く消え一切の感覺歇むものだけれども、倒れて歇むのか、歇むから倒れるのかは判然せぬが、兎に角倒れる際に甚しく外傷を蒙ることがある。又患者に依ては倒れる際に高聲を發して叫ぶのがあるけれど、こは人事不省になる前に叫ぶので無く、人事不省になつたる瞬間に叫ぶのである。斯くて暫時の間は強直性の筋收縮が起るもので、即ち頭部は通常後方に曲り、上下の齒を緊しく合せ、軀幹を弓狀に反り、四肢を伸し、指は屈げて内に折り拇指を覆ふ。呼吸は大いに靜かになり、顔色は初め蒼白いが直ちに蒼のみになる。之より第三期即ち間代性痙攣期に入ると、顔の筋が劇しく痙攣し、眼球を旋らし、或は兩眼共に一方に偏り、舌は痙攣狀に伸びたり縮んだりし、上下肢及び軀幹の筋肉は斷間無く痙攣し、瞳孔は甚だ濶くなつて而も反應力を失ひ、脈は幾分か速く、體温は平温又は少しく昇り、其の間に糞尿を洩したり、又男子は射精することもある。又此の間に舌を咬み切ることがある。之より一度長大息をして第四期即ち昏睡期に入ると、人事不省は依然としてゐるが、呼吸

は安静になり、顔面は殆んど普通の色に復り、前後も知らず昏睡して次第に普通の睡眠状態に入る。此の睡眠時間は患者に依り、數時間に渉るもあれば、又極めて短いものもある。さりながら此の發作の餘波は影響し、頭痛に悩み、或は何と無く倦み疲れ、精神は變調して物事に激し易く、又所々の筋肉に劇痛を留むることもある。併し大抵の本患者は第四期が終ると共に殆んど健康者と同一状態に入るのである。

以上は完全なる模範的の癲癇を述べたのであるが、輕症なる不全性の癲癇は前述の癲癇發作の外に小癲癇といふ輕度の發作が現はれることがある。それは輕度の眩暈や昏睡或は暫時の失神を呈すのみで、之を形容して言へば談話時又は碁でも圍んでる時俄かに中止し、暫くの間茫然としてゐたる後又其の事を續けて行ふが如し。又或る症に至つては、其の間も中止せず器械的に行つてゐるものもある。例へば途上で發つたとすれば、矢張前進して其の揚句に家があると、其の家に入つたり、或は河に落ちたりするやうなものだ。又或る症に至つては失神して倒れるけれど、顔面の色も左程に變らず、僅かに上

肢を痙攣させる位で、間も無く意識が明瞭になるものもある。又癲癇類似症といふのがある。これは多く精神的の癲癇で、眞正の癲癇後直ちに現はれ、或は特發し、兎に角精神が全く亂れ、積鼻揮も爲すに裸體で跳ね廻つたり、或は河に入つたり、或は放火甚しきは竊盜をなすことがある。又中には非常に鬱憂状態に入り、或は恐怖的の觀念を懷き、幻覺錯覺がある。斯くて精神が復舊したる場合には、發作時の事を更に記憶せぬこともあれば、又漠然たる記憶の残つてゐることもある。之は精神病と甚だ似てゐるけれど、又異つたる點もある。宜しく精神病學に就いて其の區別を知る可しだ。

右の發作は十年乃至二十年間に三回か四回に過ぎぬのもあれば、又毎日發するやうなものもあつて、外部の影響例へば暴飲・精神興奮及び房事過度或は身體過勞等の如きことがあると屢發り易い。それで攝生療養が宜しければ、全治せぬにも限らぬけれど、其の重いものになると、發作毎に精神が痴鈍になり、記憶力は減じ、身體も瘦せ衰へ、運動が不完全になるもので、容易には死なぬけれど、兎に角健康者程壽命を保たれぬは言ふまでも無い。が併し反射的

に來る癩癩は大抵全治するものである。又中には一二回乃至三四回も時々發作して其の揚句に長久しく中止し、他日又發する例も有るから、發作が久しく止んだからとて果して全治してゐるのか了らぬものである。話變つて癩癩を粧ひ、彼の放火或は竊盜の如きを敢てし、或は故らに倒れて見せたり、人が咎めると何も覺えが有りませぬなど、誤魔化す者もあるさうだが、之は舌の工合・筋肉の状態及び他病との鑑別法に照せば看破ることの出来るものである。

顔面神経麻痺

〔原因〕元來顔面神経の在る場所は淺く、従つて外來の損害を蒙り易いから、神経麻痺中で最も多く發し易い病である。性から云ふと、婦人よりも壯年の男子に多く發し、第一に感冒が最も本病を促すものだ、例を以て言へば、窓を開いて眠つたり、汽車の進行中に長い時間窓を開け放しておくやうな場合に罹り易い。次に中耳の病及び岩様骨の骨瘍が其の影響を顔面神経幹に及ぼす。

すよりも起る。次に耳下腺或は其の近傍に腫瘍ある時。次に頭蓋底或は腦底の病氣例へば梅毒性の新生物又は炎症がある場合。次に延髄及び腦髓に疾病あると顔面神経も亦其の餘波を蒙つて、遂に本病になることがある。其の他結核・癩病・急性傳染病及び鉛中毒等も往々本病を誘ふものである。

〔病狀〕麻痺したる顔面の半部は弛んで、患側の前額に在る皺は自ら消え失せ、眼は大に開け、涙が常にタラ／＼流れ、鼻唇溝が消滅して痕が無いやうになり、口角は下に垂れて唾は流れ溢る。患者若し前額を縮め、或は鼻を歪め、或は笑はんとし、或は話さんとし、或は嘯かんとし、或は頬を脹かさうとする場合などには、前述の病狀が明瞭に表はるゝものである。而して眼は十分に閉すことが出来ぬ所から塵埃が自然に入り、往々結膜炎を發することがある。又、口唇の運動が不完全であるため言語を自由に話すことが出来ぬ。又頬の運動も自由で無いから食物を咀嚼することも甚だ不自由である。次に患側の舌の前方が三分二程味覺を妨げられるけれど、多くは輕微であつて、患者に依ては味覺が妨げられてゐるか否かの感覺が了らぬものもある。次に

唾の分泌が減り、爲に痲痺側の口中が乾燥するを覺ゆるのも稀に見る例だ。次に聴覺にも障礙を受け、甚だ過敏になることも往々有る。先づ病状は雜と右の次第であるが、尙之を病の經過に依て區別すれば三種となる。(一)輕症顔面神經痲痺は顔面筋を犯すのみで、味覺などの障害無く、顔面神經及び痲痺筋に於ける電氣興奮性も常の如く、大抵二三週間で治るものをいふ。(二)中等症顔面神經痲痺は多少の痲痺は勿論有るけれど、完全に痲痺せぬ、重言すれば、神經の興奮性は稍減少するけれど、決して消滅する程にはならぬ。而して四五週間で大抵治癒するものである。(三)重症顔面神經痲痺は完全に痲痺し、其の治癒は少くも三ヶ月多くは五六ヶ月、甚しきは數年數十年或は生涯治らぬものもある。

常習頭痛

〔原因〕急性熱傳染病や著しい全身貧血・腦病・頭蓋骨病等には勿論頭痛を伴ふけれど、之を以て本病と看做してはならぬ。本病の原因は血行障害及び幽

微なる榮養障害が原因をなすもの、如く、即ち腦髓や及び其の皮膜に充血或は貧血するより起る。彼の學生・官吏・受験前の學生などが過度に精神を使役すると本病に罹り易い。而して往々遺傳することも稀で無い。

〔病状〕甚だ慢性のもので數月乃至數年の間持續し、甚しきは終生之を免れぬこともある。其の頭痛の所在は時として前額或は顔面、時としては後頭、時としては頭部全體或は又其の他の部分に局限することもある。其の痛さは破裂するが如く或は鑽るが如き劇烈なものもあるけれど、大抵のは左程に強く無くて、單に頭部が重い位に過ぎぬものだ。併し其の劇烈な疼痛になると、僅かに毛髮に觸れても尙患者は疼痛を感ずることが稀で無い。何れにしても患者の性情が變調して物事に激し易く、加ふるに食慾少くなつて、身體が何と無く懶く、爲に業務を執ることが出來ぬ。若し強ひて業務を執つても直ちに疲れて了ふ。又重症になると悪心るくなつたり、嘔吐したり、或は甚しく發汗したりするなどの症候が有つて身體瘦せ衰へるものである。

催眠術の效果ある病の説明

書癡

〔原因〕主に寫字を過す所から發るもので、寫字生・書記等に本病に罹る者が多い。即ち境遇上已むを得ず無暗矢鱈に筆を放さぬより遂に此の病に罹るものである。其の他裁縫師・音樂者・卷莖を捲く業者などにも發することがある。

〔病狀〕拇指・示指・中指の三指が痙攣して、其の筋肉は強縮を發し、字を寫し、或は其の他の指仕事が出来ぬやうになるものである。

横隔膜痙攣 (俗に云ふ)

〔原因〕精神感動・横隔膜の損傷より起り、或は歇私的里・胃腸病・腹膜病等の反射からも來る。

〔病狀〕所謂吃逆をなして速かに治るのが通例であるけれど、中には頑固にも數週乃至數月に渉るのがある。

精神病(きちがひ)

これには色々の種類はあるが、何れにしてもヒステリーや神經衰弱症とは其の趣を異にするものである、間違へてはならぬ。併し該二病が原因となつて精神病になることもある。然うなればヒステリー・神經衰弱症と言はずして精神病と名づくのである。即ち本病は精神の異常であるから、之を病めば從來の人物とは大いに變り、其の目的と順序とを失つた行爲をなし、人の忠告や諫めを聽くもので無い。而して己れ自身は其の病氣になつてゐることを知らぬ。縦ひ知らせても怒るのみで、更に信せぬものである。

〔原因〕遺傳が最も多い。遺傳のある人は殆んど發らぬといふことは無い、今茲に精神病者百人ありとせば、六七十人までは遺傳である。其の他神經衰弱症と同じ原因もある。又教育の宜しく無い爲もある。又頭部に怪我・耳病・胃腸病・生殖器病・梅毒・酒精中毒などもある。年齢は二十歳から四十歳までの間に多い。男女の比較は男より女の方に多くある。抑、本病は社會文明の進歩に

催眠術の効果ある病の説明

従ひ、多く發する病で、歐洲の文明國では、三百五十人に一人の比例の國もあれば、六百人に一人の所もある。我國では五百人に一人の比例であるとの事。次に貧窮人は困苦の爲め、富貴な者は飲酒・放蕩・房事過度などが原因となる。

〔病狀〕本病には色々の種類があつて、其の種類に従ひ、病狀も亦異なるけれど、其の鬱憂的の者と、濶大的の者とを摘んで述べれば、甲は常に悲哀の念を抱き、鬱々として交際を厭ひ、人を疑ひ自ら悲しみ、時には他人が我を狙ひ撃しようとしてゐるとか、時には食物の中に毒藥を混せてあるとかいふ様に信じ、それがため、自殺を企てたり、或は他人を殺さうとしたりする。乙は意識磊落或は傲慢になり、他人を輕蔑し、自分を尊び、架空遠大なる事業を企てたり、或は帝王將相の位置にあるかの如くに思ひ、或は博士大博士の智識ありとなし、或は大いに叫んで粗暴の舉動をなし、酒色を貪り器物を破り、或は瓦石木葉の類を並べて、數百萬圓の富を得たりとなすなど、實に憐む可きものである。此の外甲乙何れにも屬せぬのがある。例へば色情にの

み狂ふ者、食物ばかり貪る者、或は潔癖に過ぎて寒中に冷浴したり、或は動物の慈愛のみを事として財産を抛ち、或は哲學狂、或は道義狂など一々舉ぐるに暇が無い。

醫士といふ資格を以て考ふれば高山彦九郎なども一つの道義狂である。足利尊氏の墓を數へて三百鞭ち、橋の上に手をついて草莽の臣高山彦九郎と叫ぶなどは豪傑君子の爲す舉動でも無れば、普通平凡者のする振舞でも無い。博士入澤氏は徳川五代將軍綱吉を以て精神病者であると斷言して曰く、『漫りに讀書に耽り、或は男色を好んで婦人を遠ざけ、或は濫りに施しを好み、或は非常に動物を憐んで殺生禁斷の令を出したる如きは確かに精神の變質者に相違無い。』と、而して又曰く『これも父家光の遺傳であらう、何となれば家光も頗る男色を好み、婦人を遠ざけ、春日局の苦心に依つて漸く婦人を近づけたこれ色慾の顛倒といふもので、一種の精神病である。』と、参考にす可き議論である。

神經性胃病

〔原因〕(一)精神過勞—本病は學者に多いものだ。抑、學問に従事するものは、他業者よりも事の是非善惡を識別せねばならぬ道理であるから従つて心身の攝生を守る可き筈なれど、事實は之に反對し、學問する者は却つて萬事が不規律になり易い傾がある。能く勉強し、遊ぶ可き時間に遊ばば決して精神の過勞を來す譯は無けれど、大抵の學者は勉強す可き時にクヨク思ひながら遊び、遊ぶ可き時に遊ばぬ人もあるし、又遊ぶ可き時勉強す可き時も間無しに勉強するものもある。又中には反對に、遊ぶ可き時も勉強す可き時も遊んでゐる怠惰者もある。斯る輩は皆何れも精神過勞になるのだ。斯う申すと前二者は然うなれど、後者即ち何時も遊んでゐる人は精神過勞にならぬだらうと言はるゝかも知れぬ。所がさうでは無い、始終遊んでゐても、良心のある以上は常に其の良心の苛責に逢ひ『これアマア〜』と日を送るが故に矢張精神は鬱々し、前二者よりも尙一層の過勞を來すのである。(二)筋肉衰弱—不運動は

即て筋肉衰弱となり、筋肉衰弱の結果は胃の筋肉衰弱を來すは生理上の然らしむる所である。縦し筋肉衰弱せぬまでも不運動なれば消化吸収の點に於て無論宜しからざるは誰でも知つてゐる事柄であらう。(三)時間の不規則—萬事が不規則であると、食事より食事の間も記帳面で無くなる。即ち朝起ること遅く、従つて朝食も遅く、それで午食は比較的早く、夕食は人並で夜深しをする。故に或時は食後三時間程で次の食事をなし、或時は寢食を忘れて勉強し、七八時間も過ぎねば食事を取らぬなどの不攝生を行らかすは敢て珍らしく無い。余の知つてゐる學者中で學校に奉職してゐる人は、出勤の時間に制限せられて、朝はかつくに眼を覺し、顔を洗ひ飯を食べ、洋服を着る、靴を穿く、走る、恰も手品師の様に忙がはしくしてゐるし、又小説書いてゐる文學者は眼を擦りながら、夜の十二時乃至は二時頃までも筆と戦ひ、朝は九時乃至十時に起き出で、悠々と新聞を見てから食事を済し、食後の休憩などは是だけは理屈に適つてゐるが、間も無く中食。斯ういふ風であるから二人共立派に本病に罹つてゐる。(四)遺傳—これは敢て學問に従事してゐる譯でも無く、又

催眠術の効果ある病の説明